尾張名所圖會 前編

七

常陽津知村秋永興七

尾張名所圖會卷之七

目録

海東郡
海西郡

海東郡解
阿波手森
反魂香塚
妙勝寺
萱津古戰場
土田八幡宮
義教公富士御覽の図
石作神社
新屋天神
高宮社
法藏寺
萱津里
阿波手社
權藥師
大銀杏
同初觀音泰
東勝寺
方領大根
中森
小町塚
菊仙院
木田重長宅址
法界門橋
藪香物
反魂香と燒図
光明寺
甚目寺
大吉寺
中杜天神
法性寺
福嶋正則宅址
藤木田
萱津古驛
阿波手浦
正法寺
實成寺
上条瓜
延命寺
石作村
新屋村
新居家川
花正村
貴船社

福井藩藩校

三位法印宅址　蓮華寺
根高地藏　根高松岡
八ツ屋孝女の碑　砂子川
同後園林泉の図　圓長寺
伊福部天神　河葉天神
神守驛　憶感神社
諸柔村古船堀図　日置村
甘樂名神　由乃伎神社
水鶏塚　佐屋川
西光寺　蟹江川
源氏嶋　善太川
津嶋里　津嶋渡
牛頭天王社　末社
蜂須賀正利宅址　勝幡城址
万場渡　万場驛
自性院　馬嶌明眼院
藤嶋神社　廣濟寺
面足尊社　義經弓掛松
日光川　諸鍬神社
若宮八幡　光明院
佐屋驛　相江天神
戸田米　佐久間城址
須成天王　龍照院
圓成寺　大井神社
佐屋津嶋追分の図
例祭　春縣神事の図

流鏑馬　六月船祭の図
社僧四ヶ寺　天王橋跡
社家町　四家七黨
妙延寺　土御前社
興善寺　八劔社
本蓮寺　成信坊
市神社　名産あぐ店
姥ヶ森　馬津古驛
海西郡解　圓通寺
西音寺　給父渡
光耀寺　一心寺
関通上人傳　石田里
蓮根　古川城址
神領　神主氷室氏
奴野城址　本下藤吉天王参詣図
瑞泉寺　西福寺
負壽寺　教信坊
蓮臺寺　常樂寺
名産白雪粕　名産麩
大龍寺　十二城址
宇太志神社　石塚
百合根　横井時永の傳
早尾渡　葛城古渡
小杜天神　連理菊
子消里　市腹嶋

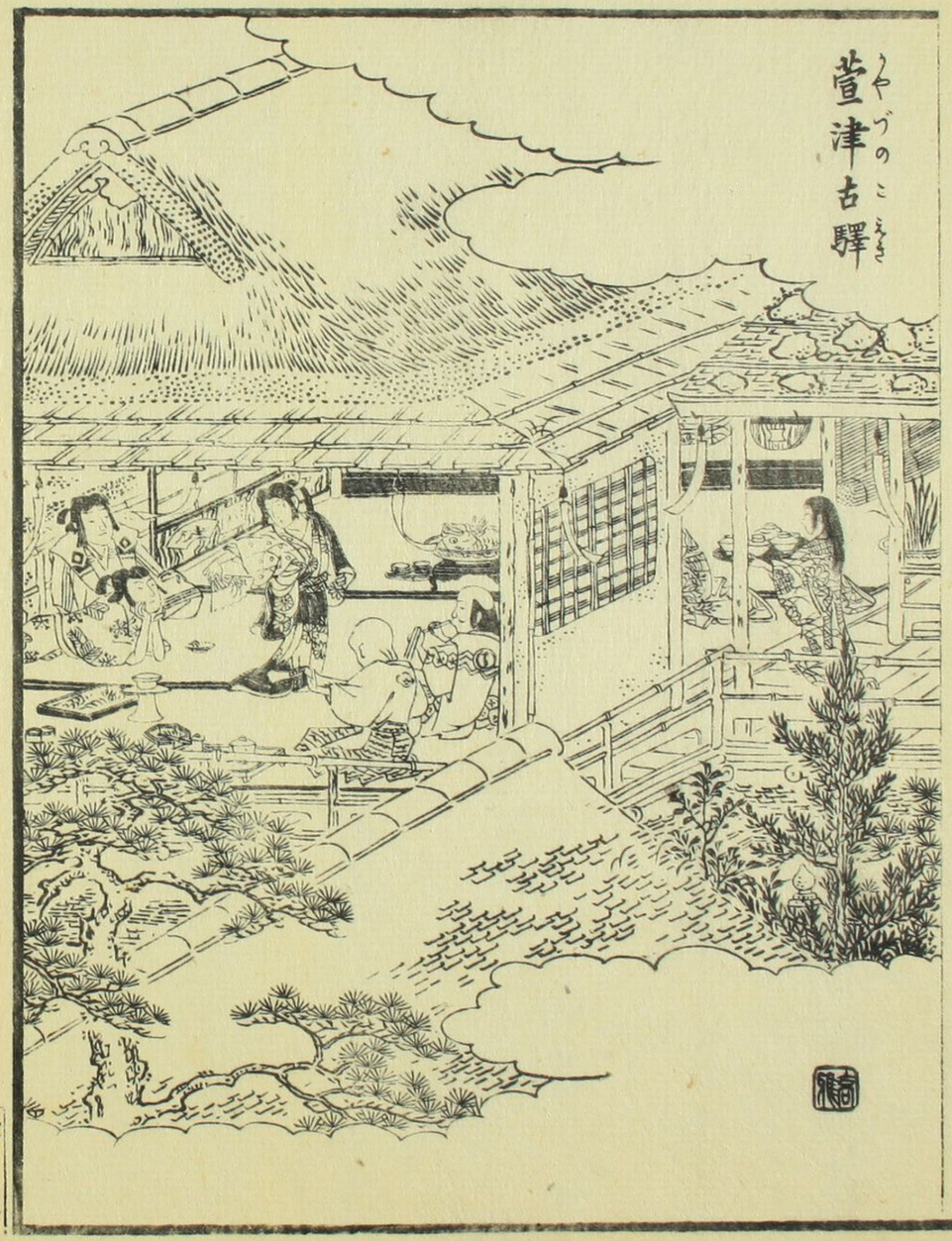
赤星名神　大楠　筏川　弥勒寺
宮筠圃の傳　筏川岸桃林の図　孝女さよの傳　忠女さるの傳
森津藤架　孝女さよの傳

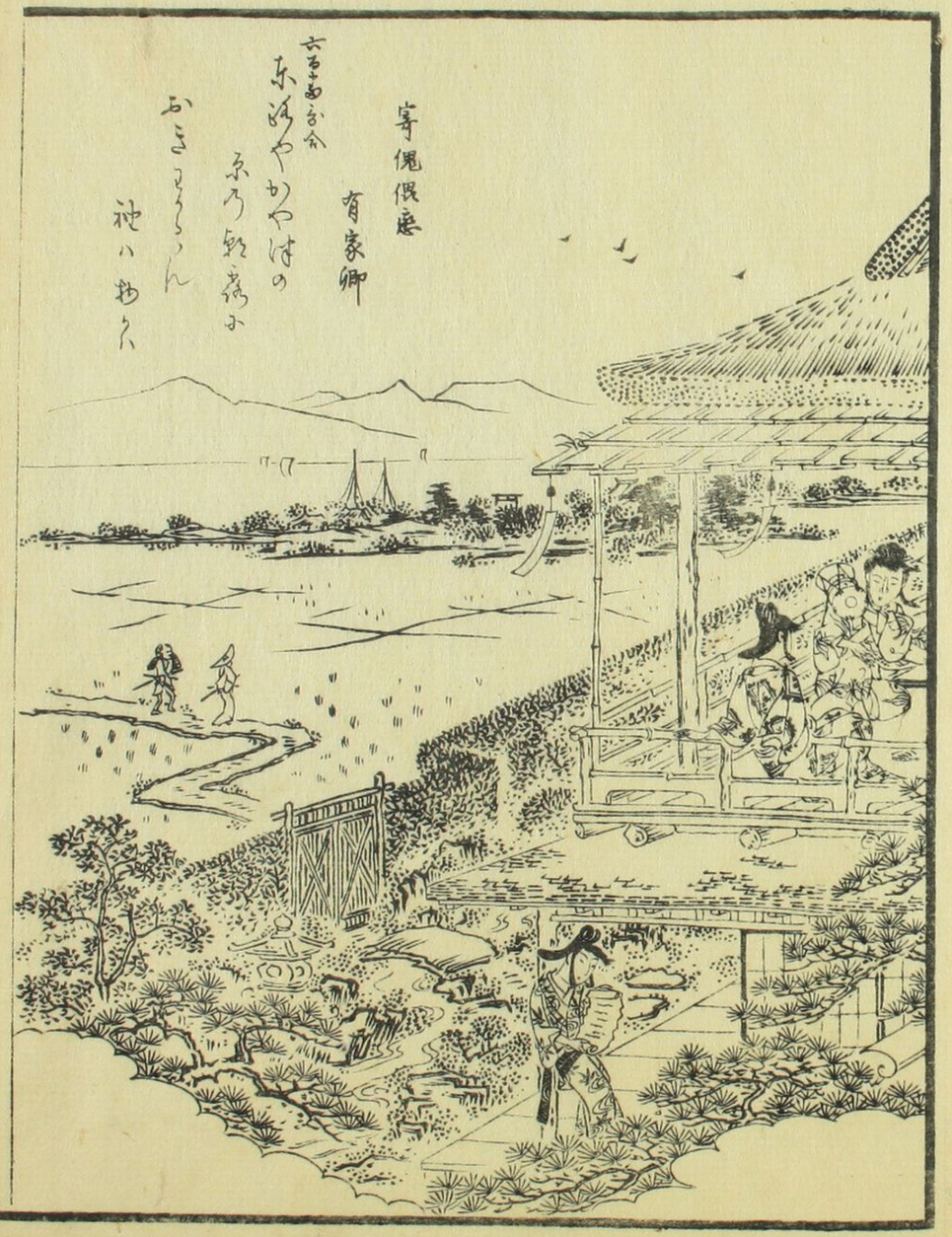
海東郡

當郡ハ愛智郡ノ西ニ隣リ北ハ中嶋郡ト境シ西ハ海西郡ト接シ南ハ尾張海濱ニシテ海部郡ト隔ツ頼朝ノ天下ヲ治ムルヨリ二郡ニ分ツ東ノ方ハ則海東郡西ノ方ハ今ノ海西郡ニ六國史ヲ按ズルニ古書ニモ少ハ皆海部郡ト記ス

法界門橋　上萱津村の北ニ五条川ノ小架ニ多橋アリ　むかし甚目寺大伽藍ありし時東の惣門にありしが法界門と呼びしが頽廢して今其名のみ橋ノ称ニ存ス

萱津里　今上中下ノ三郷ニ分テリ　東鑑に建久六年六月廿九日壬午著尾張國萱津宿給當國守護人野三刑部丞成綱進雜事ヲ嘉禎四年二月十日丙戌晴萱津御宿亥刻將軍家俄御不例御寉乱欲諸人驚騒醫師時長施醫


萱津古驛


寄傀儡恋
有家卿
東路やかわはの
ふる郷なれは
おもふこころん
袖ハぬれ

術之間小選令御本復仍賜御劔京兆令引御馬給云〻
十日丁亥晴今日御逗留于萱津宿依去夜御不例餘
氣也其後修理兩河浮橋云〻貞應海道記小幽月景
ありなとて旅店小人志づかりぬれば草枕とりて萱津
の宿にとまりぬるなん名所方角抄小萱津京下津り
一里計つ南之信小かいぼの宿とはしるなん古歌うり
むり京り志ぬふり
田一ノ宮下津萱津を経て古渡染田吟海走り二
村山の蘇とるとく三河八橋へかしら

尾張八景 萱津里夜雨
菁條 村雨 濤新愁連屋 客終無桂玉掛心頭
名寄

大德寺天倫和尚

冬ごうとの乃ぬ〻の萱津はい牧ふり人のつまやもるる 長明

尾張の国に京りわらひつきけるうちんのりうんしり
門志ぬるり見ゆるいりふ

新續古今集

志ぬるり深ようけくたるまにのひるとなる 偶偶わこ

藻塩草に萱津のあてなつの見も志ぬるこくわれば此はこハかやはの高のそつあべし

尾張八景 萱津夜雨

雨の夜の月の宿れおるとく萱津の里ハくさひき 紹益

名所今歌集

ふるさとをおもふ人の此はるとくみさとるかやつの宿 猛彦

東路の萱津の宿とうくるかやつの宿乃面けり 春蔭

枇杷園句集

五月 あるやうえいの底根場るかとうの邨 土朗

泪ゝし萱津の底根場るかとうの邨 駿六

白雲や里乃ぬ作れ里乃ぬ尾張 徐英

尾張八景 粟手杜晴嵐

楓樹飜紅如錦繡海潮退碧似瑠璃翠嵐一帯添奇

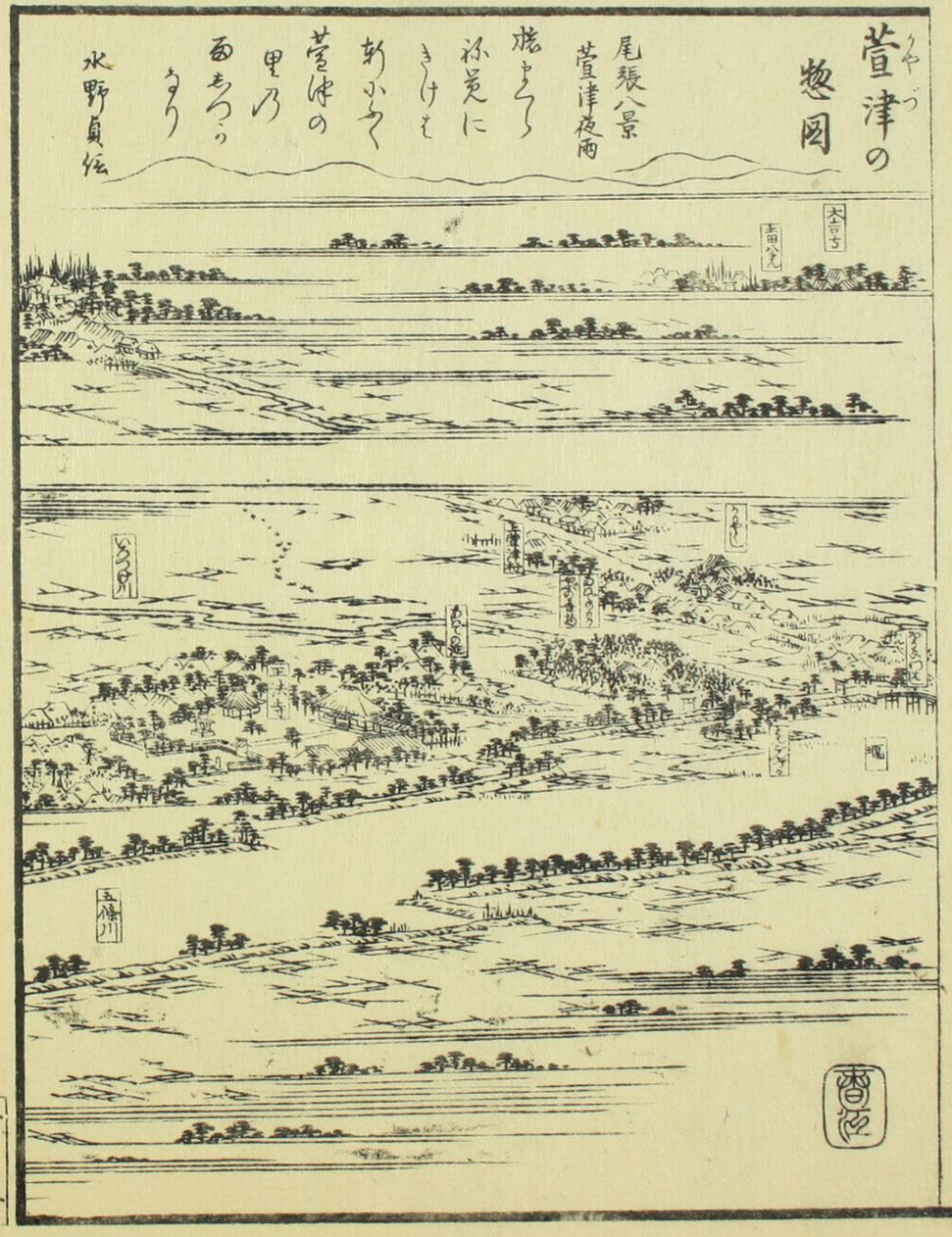
阿波手森 上萱津村 古人の秀歌多く蒼鬱る古林日の影を
見ぬ木のもとハ多ハ猪ハ猪ハ人漬稀ハて多寂莫るる
猪地ゝり藻塩草に尾張ゝり又名所方角抄小阿波手
の袁浦里有之下津ゝるふ里の南小ゝり遠保名ゝも入ゝり
ゝもゝり阿波堤粟手粟殿ゝも書ゝり

大德寺覺印

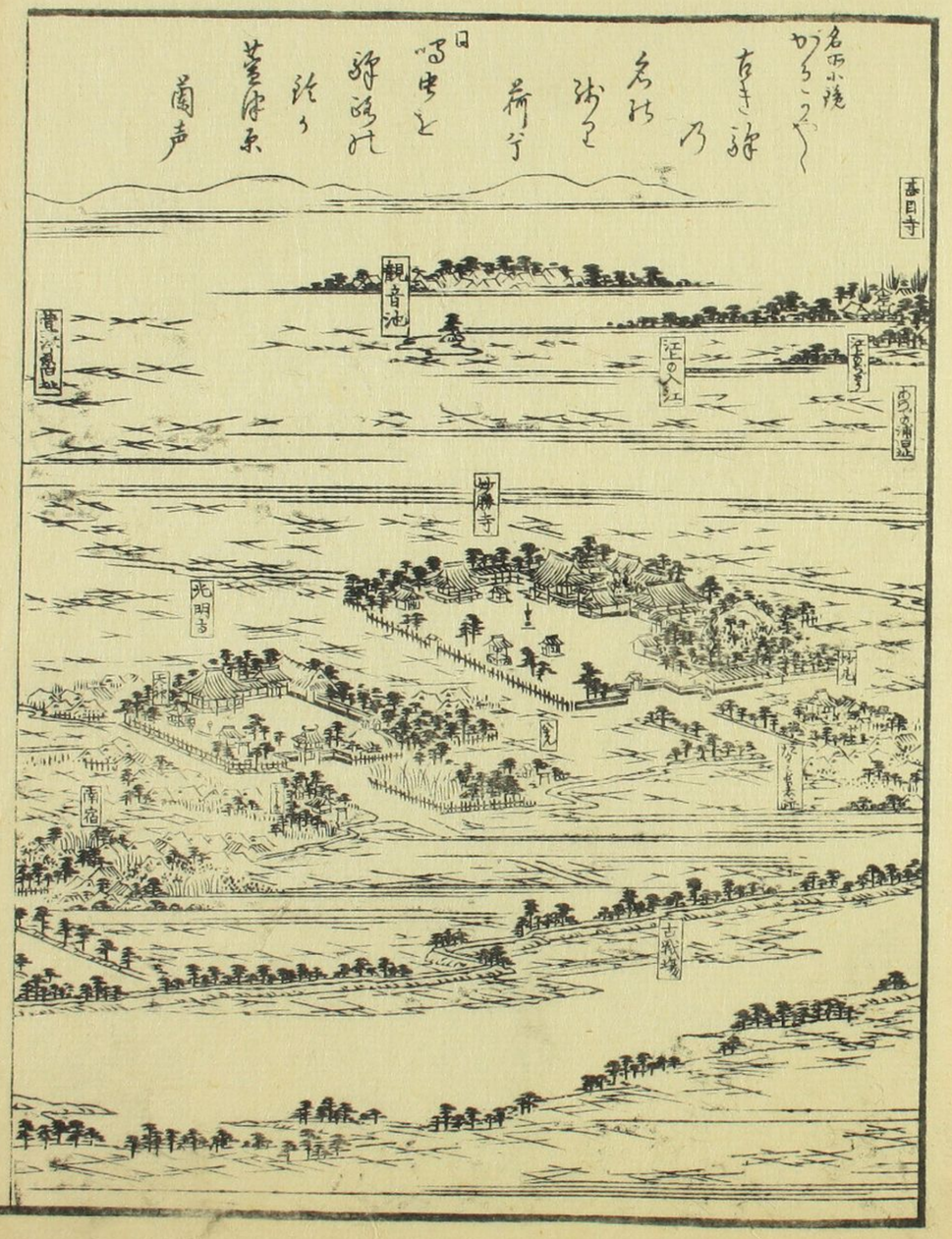
萱津の惣図

尾張八景
萱津夜雨
塔よりゝ
孫兒に
きけとも
新かゝ
萱津の
里乃
面影つゝ
ゝり

水野貞信

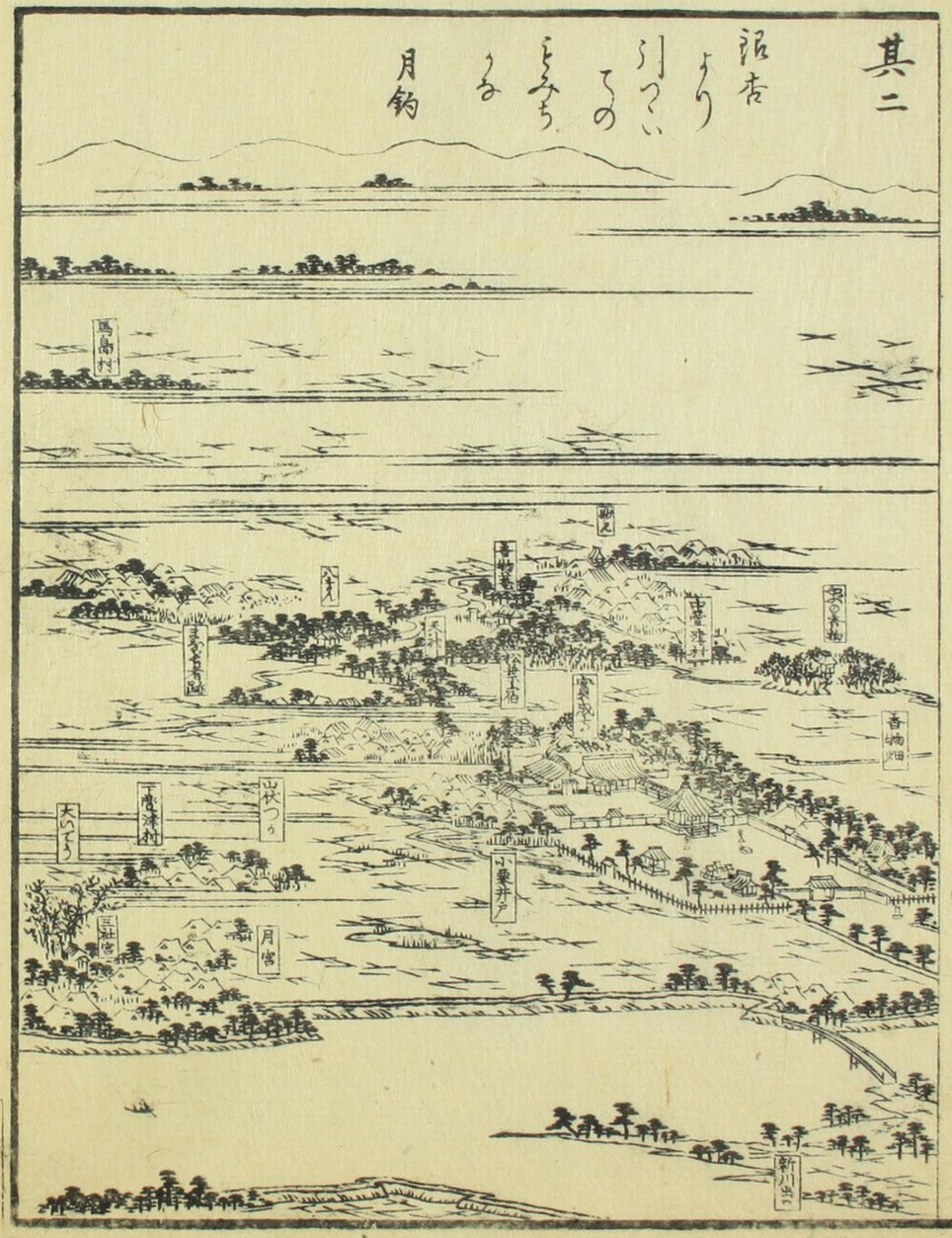


名西小塚
かりこゝゝ
古き跡
乃
名残
波と
荷ゝ
日
昔也
跡なし
萱津東
蘭声



其二

沼杏
より
引つい
ての
ちらち
る
月釣



景栗手林廟樂者誰

新千載　詠しらず

かきたてて人も栖のなきさにけぶかはあてれ袁とるれ　紫式部

建保三年内裡名所百首

我恋いわてれ袁乃るる　順徳院御製

同　さりとも少く多ふかもるるふかの袁れ人てまてね袁るろれ　信西行意

同　かこ系れあるこの玉れ結ちりけくわてての杜の春きえねや　参議定家

同　日数るあてての杜のかわ系ちる春れ名ちかより　従三位家衡

同　名ちかあてこの陸ちの杜の呼ちるきかなれ秋ちの一寺　後成々女

同　いろてても行てての杜れ名ちれ乃ちれ乃ちれ秋風よたえ法ちれん　兵衛内侍

同　多深と計ちも春も春ちとあてての袁の杜乃ちれき　實内々家法

同　方に春るおもひいこれもちれ志ちれ志ちれてての杜の春ちれ本と　左兵衛督忠定

同　白雪も春ちたあへと枯ちれ志ちれ志ちれ春ちれ　家冊後ち知家

同　ちのきくにあてれ杜の杜の春神ちれほふ名ちれ乃ちれ乃と　家冊後ち鞍宗

同　ゆ乃ちてあてての杜れ名ちれほとしききちれ乃ちれ乃ちれ　散位行能

同
絶はつる身をうつせみのからなれどなほはゝその杜にあとやとめん　参議大膳大夫藤原康光

色葉集
なき人のこゝろはけふぞ我身なれ君かはゝその杜やあるらん　相摸

康平三年三月十九日ころ余れ一家かくて人の名をかく世路ひろに落ける
しるしおきてはゝその杜は尾張の国にあり昔妻夫と見むとて出けるに
波表にいりつきてはひ見けして死にたり是によりてはゝその表とは名つけ
けるとかやとおもひとりしを絶と書てあると尾張とは注すなり

夫木
つかふなるかはらそではゝその杜のほとゝぎす忍びかねたる声をきこし　琳賢法師

同
我なかにはゝその杜の木の下はつまとふ鹿の立ぬまそ啼　土御門院小宰相

雪玉
人しれずけしき見つゝやきよりきてやはゝその表の木のもと　内大臣実隆

自分合
今ぞ知るはるてのかりの秋風よ木の葉おりしくちきりをは　豊原統秋

延享二年公宴
いつまでかかたらね袖のなみだかはなれつゝのわかれのけさ　通枝

冨士見在池三月にはゝその表の序の妙勝寺兵仁　表の東に反魂香焼跡又表下に社あり　一枝の香のみ入し龍あり
我かはき人のけふさに来あひてとてはゝその表よりみん　契沖

神ならや　はゝその表の初槿　紹巴

曠野集
薬一把かりて見れるはゝそかな　湍水

藪香物（やぶのかうのもの）

同村正法寺にて製す　むかし豊津の里に市ありし時近里の農

夫瓜茄子蘿蔔の漬物初めしを樊田宮へまゐらんと申しかども
道遠ければ河波手の表の竹林の中に甕を埋め（今も其の姿を存せり）
わかゆる菜蔬を諸人投入れ漬ても思ひて小撮と入置など
せしが自ら混和して殊に美き塩漬となりしを二月十一月十二月彼
社へ奉献せし是を藪の香の物と名づけ名産となりし後世
路傍の行人など神供の物とも悦びとも吟ひ或は摂摘
ともかくとしけれバ終に正法寺の境内にうつして今に其
ると樊田宮へ奉納まる倒りし故に香の物とはいふなり
言葉まで十訓抄に菅三品の家にて人々月とをておそ
びしに或人月はのぼる百尺楼と誦しけれバ老たる尼の
やしげなるがこれをきゝて僻事を詠じ給ふ也月は
のぼるは楼に登るべき月には登るまで故三位殿は詠じ給ひ
しといひければ人々恥て藪に香の物といふ児女子がたとへ

阿波手森
反魂塚
藪香物
法界門橋
法界門堰
反魂塚
名所小鏡
藪の香れ
白尾

本社
白髭八幡
藪香物
大国
連理神
金山社
銭神
あたその池

それらのハざりけるにて感心せられしに志るし　源平盛衰記
ひとやぶにかゝれるものといふ事ありけり

尾陽雑記に云　むかしハ正法寺大地にて伝ふハ東巖禅師といへる老比丘茄子大根小角豆蓼やうのものゝ種を通りけるが必一ツ二ツ此神にさゝげて通りけると禅師只捨るべきにあらずとて甕に入置しと見てほけ並しより初るとや大方日本香の物のはじめなるべしと云り故吉例として此所の香の物を二月初午の日に熱田に其品三十二をさゝげて神供とし又十二月廿四日にも是を納む是を阿波手の杜の藪の中に有けるが行つれもの来りてとりしより果ハ藪の中にて漬けるとぞ今ハ此内に来り藪の中に漬置なりとぞ

清丸
宰相中将公隆卿日光例幣使にて卯月廿六日熱田に宿らせ玉ひしが二見の浦をまかりて玉ひし浜荻藤渡等忘貝なども見玉ひしとぞ阿波手の杜の跡をも院に御覧ありて叡慮にかなひ玉ひしとぞ御製を給はりしかば枝葉をも雲の上まで及ひけるとぞ

霜かれにかゝるひしもうれし神風や伊勢の浜荻波にむせて　信景

尾張名所記
武蔵のゝちに見ひらるも香の名の　鳥竹

すゝしき秋や粟田の漬の味　雄渕

阿波手社（あはでのもり）

阿波手の杜の中にあり　日本武尊本國神名帳集説に拠
阿波手森有神祠称熱田神疑是萱津天神社而以香物故光明寺

境内末社　八剱大明神　白髭大明神　金山彦尊　銭神など数祠あり
之歟云々

連理榊　社前にあり

詠阿波手神社倭謌
みしめなるそらけくわふは表の名の粟まくてや神のめぐみ　賀茂季鷹

阿波手の里

むかし此地にありし里にて萱は近き頃まで古き図によりてそこに茅るのミ

阿波手のさと尾張国しらず
夫木
日かるゝはあはでの里のつちの名もなきゝおもきこえを　よみ人しらず

阿波手浦

藤渡等に尾張よりの此浦むかしハ入海にて阿波手の表のあたりまで汐さし入海士の住家もありしが中世堤をつき新田と築て海遠く隔りて遠し古図によりて此地を蒼田
きよのくん
恋海衣易れたゆしまのあたりなる地を

金葉
名にたてる阿波手の浦の蜑ならばかつくめしもそきけ　源雅光

千載
志かたるゝ袖のひるまハあはやなき阿波手の浦の海士にとはゞや　法印静賢

新勅撰
我恋ハあはでの浦のうつせ貝むなしくのみもぬるゝ袖かな　後法性寺入道前関白太政大臣

続古今
秋ともかくめるも名にたてる阿波手の浦の海士の釣火　後鳥羽院御製

同
是やけわたての浦よやくしほの名の絶せぬ思ひなるらん　平親清女

続千載
恋ひてもよむ煙の末もうしさのあはでの浦乃そしほ火　為道朝臣女

同
いかせん阿波手の浦による波のよるべ人とみる夢もなき　荒木田秀宗

続後拾遺
いろをいかにそめけるやしほぞこのうらたつなみとぬれにけるかな　達智門院

新千載
いつしかもあきのはつかぜふきぬるかなこのうらなみのこえぬれば　前大納言為世

新後古今
いつしかもあきのはつかぜふきぬるかなあしのまろやのいりあひの鐘　寂蓮法師

夫木
こぬ人をまちわびぬれば浦風のうらうちなびきあきのはつかぜ　琳仁法師

同
なのりそを焼けるあまのすさびにもひとをあはぬ恋はしるらん　基行

同
波風の友とひろひし小貝にもあはでのこれる恋もしるらん　前大納言為兼

新集
今はとてあはれとおもふ人もなしこれぞ思ふ人のなごりの　為兼隆信朝臣

李花集
とへかしなわすれぬ人のなごりにはなれぬ袖のいろとこそ　宗良親王

天授元年十月十三夜会
いつまでかこぬ人をまつの浦風にあはぬ袖のなみぢ　懐良親王

千首和歌
いつまでかこぬ人をまつの浦風にあはぬ袖のなみぢ　為尹卿

新元亨御百首
いつたのもしかこぬ人をまつの浦風にあはぬ袖のなみぢ　為忠朝臣

南田詠草
いつまでかこぬ人をまつの浦風にあはぬ袖のなみぢ　伴蒿蹊

いつまでかこぬ人をまつの浦風にあはぬ袖のなみぢ　成良

反魂香塚

（ほうこんこうづか）

摂津国川辺郡東多田村の東、多田の下にあり

僧日潤

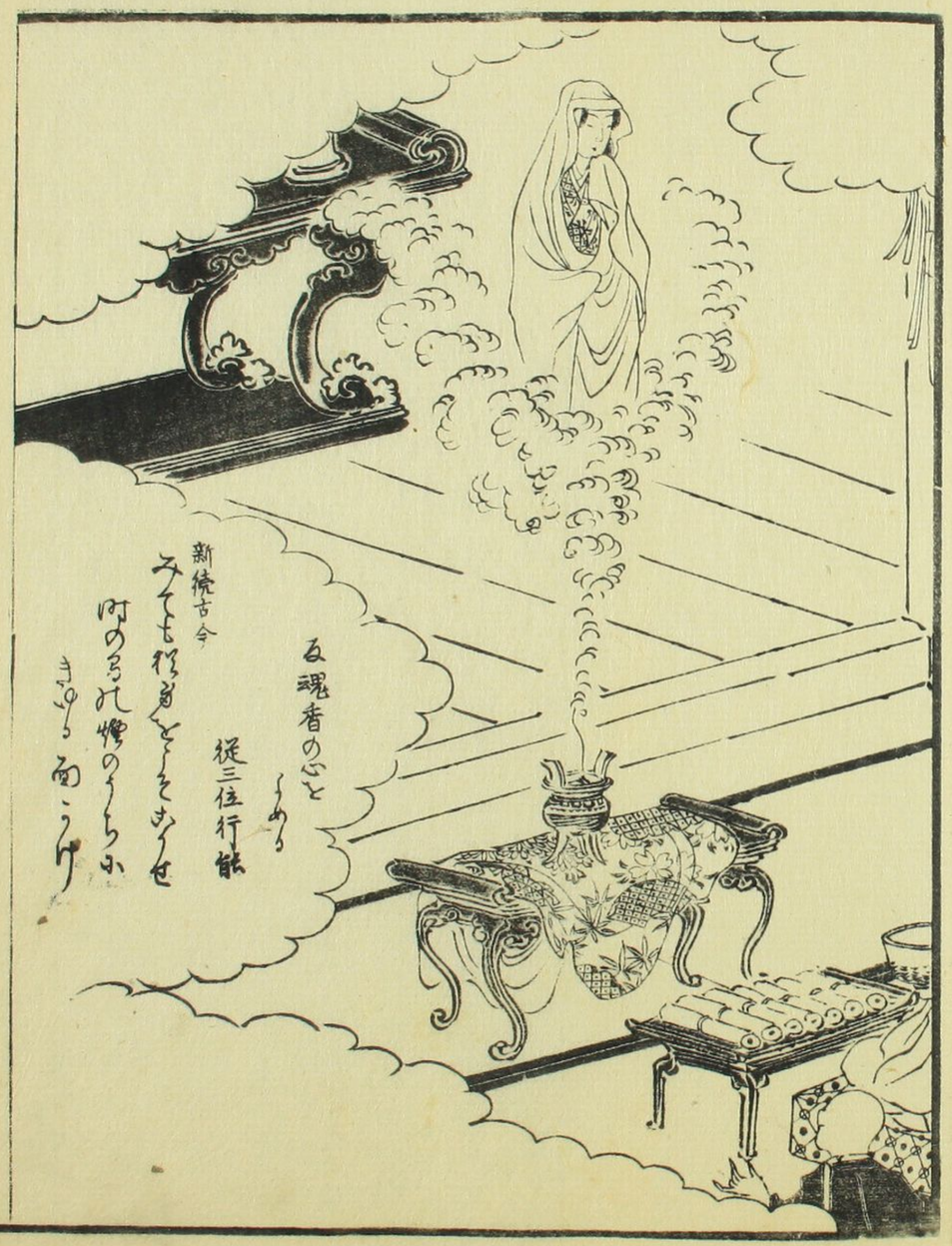
慶長の頃、七歳にて父と別れ、東西にわかれて住所まで求めたづね失ふと父を慶出羽守殺して、なほ我子を死せしめ、きく紹光上人と称して反魂香とたきまぶれ、寒會と遂一跡塚をつくり、今も修法を委しく名古屋七ッ寺に係はる。

また、ばくに異なる又正法寺縁起に、ある人、東岡祖東岩和尚、浦に茅庵を結びて有しが、光仁天皇の賓亀十一年、奥州信夫の里に、美き夫婦（夫を恩雄、妻を薮姫と云ふ）上京せんとして、来たりて、薮姫病に臥して、遂に亡まりぬ。病中に一首、和歌を詠て恩雄に残す。

我身きえ、なば後の世れいてきたびに誰とたのまん　と恩雄

こたへとなんく、然歌の和歌東岩和尚と清じて、嘗み成

反魂香の図


反魂香のこと
従三位行能
新続古今

可ニ之多ハ利髮ニして弟子ニ成り後妃の塚れ上ニ庵を結び
善提とぞ号ひける（氏内侍雄ハ共一才後妃ハ十六才と法名と大空了覚信女と）其後天慶元
年橋本中将実示小の向の折り栗毛の表の古漢など
大かこ遊覧しまつ小彼恩雄法師ゲ庵と窺ひ本尊れ
薬師佛ニと云ふ菴主も美き才ゆて球繍小念佛せを
感ゲ法師ゲ才れうるとて也ひるふよ法師も志ぐ〻浩
也バ彼ゲ形小色を美ひ法く浩ゲ才ゆいこと後妃と我実妙
小尤迂ゆ一時綾の女乃後にやどり一子と我ゲ浩れ
後吉伝も世ぐりしゲ母ハ形ゲこと子汝小嫁一共小我と暴ひ
上京ん〻もに〻にゆて才ゆれうるよゆて遠に
其師の東岩和尚と結ゲ反魂香と焚き秘法とも伝せバ
香烟の中小二八の女性忽然と顕りまけると近づきて云禁と
かゆうん〻もゲ烟と共小失ゆり彼ゲハ怒れ去れ泪と成ゲ

つ　竜と女と自ひれゆうゆ神小ゆゆねむ一怒ゲき
ゆ絵ゲゆひゆ也バ法師も　如ひきや花のとされ与と留て
烟の中小見なまぐ〻ハ　ゆぐ〻ゆ涙ゲる夫分け塚と反竜塚と
ゆびゆゆと委〻ハ縁起小出ゆれどるもれバ古に略ゆね
さて加る傳説ゆれど七ツ寺の縁起ハ大小異同ゆて一定
ゆ〻けもバ今二説ゆれを畧と挙て以ク後考小俟ゆるのミ
按ゆに反魂香れ李淡我邦小ハ尚ゆに加ゆり彼土小ハ白氏文集東坡詩集
等れ注小のゆ見えて也余れ史籍小ハ載ゆ也ゆ又ゆ法と知る人ゆても絶てな
けもバ也名れゆに拓ゆるハ小も涙ゆし

金鈔埋没幾星霜　獨有荒墳倚路傍　千村勇臣
到一身難苦備能膏反魂香古音容絶墮淚碑殘蔵
慨長時憶聊焚紙銭去不逢林下吊藤姫　岡田新川
場園詠物詩　馬鬣封猶在荒涼古道邊偶逢遊目日遥想反魂年
影冷三篙水香銷一炷烟豈無乘海感悵望對枯蓮　青生元宣
粟手無人訪郊原艸色平反魂香火地懐古不勝情　柴山東巒
正是春光欲盡時落花芳艸吊藤姫追思往事豈無

湊祠畔猶餘連理枝

堅香集

栗の穂小ぶりとうとう咲出もうれ　琴宇

落燈ゐる音やや栗ふれ夜のつゆ　松尼

秋もうやゐるやうやうゐれ声　天老

權藥師

上萱津村ふわり正法寺れ法居所之大空了覚信女位うふ宝亀十年八月十四日とわり上れ方に三ツ巴の紋ゑえうり

本尊　某師ゆ朱　聖徳太子の御作　ゆして茂脈れちかきうり　藤姫位

牌一基

仮業沙わく

ゆれ業のうりつく是ろきめるゆ　白図

秋のゆむしろ四五枚たゝみうり　少汝

家れ戸の石ゑ業ゆ夕ゐれ　岱青

日東山正法寺

因村ゆ行り曹洞宗　熱田法持寺末

本尊　正観音の木像　寺宝　茂脈の面　鉦　茂脈の小

阿波手森謠本　古写本一冊　縁起小云尚寺ハ天平勝宝年中

唐僧東岩和尚ゑ肇創の師ゑ元和元卯年今れ宗旨に改め法持寺の八世月峯慶呑和尚ゑん中興の祖中

す　古渡ゆ後のゆゑして　国君ゑり香のゑの田　毎年尚ちうり

ゑ千の除地と賜ゑ　今と牧寺伝す

熱田宮（香椎御供米ゆと奉献と

二月初午　一黒米三斗　式部五合　一香椎絵三十二組　一ツ盛ツ撃二ツ　一基苞一組　椎絵苞一　一柳箸十二本　組寸法三尺　一竹棒三本　組寸法三尺　拾月廿三日　手刻　一黒米七斗壱合　一番椎苞一　一柳　一本　右清祓初午ゑ因ゆり

長生山妙勝寺

因村ゆわり日蓮宗　京都本山ゆ末

因基ハ日蓮上人の弟子日妙よゑして尾張四ゑ寺の一ゑ福島ゑ大文正則寺伝及び境地と

ゑ所わり坂東の寺本寺うり○本尊　法華三宝　寺宝　日蓮上

人木像　因法の作　其外数多ゐれど略しぬ

横笛山光明寺

中萱津村ふわり時宗相模茂脈れ法浄光寺末

弘安年中一遍上人の開基

ゆして上人巡國行脚の時尚ゆ（来らと必尚ゑゆ逗留ゆうく

諸人結縁れゆ六十万人決定往生の六字名号と授けらゑ

旧例ゑその時　國君ゑり厚くゑてうゑゑ三國傳記ゆ永

和年中尾張ゆ萱津の道場の流法陽七條ゑゆ用のゑ

わりく上洛ゑゑ梅華無尽藏中も尾陽萱津の道場

とゝもに出られて昔は七十二の僧寮及び氏坊
軍れ寄附あり寺領も多く繁栄の古梵刹なりしが秀吉
公の時没取せられ且寛永十二年焼失の後廢頽に及び小
瀬甫菴が太閤記に云　後陽成院の御宇に出つゝ太政大臣
豊臣の秀吉公なる人あり微賤より起り古今に秀てまた
に離倫絶類の大器なり　中略　八歳の比因國光明寺門前
なるに沙門の作法に深く世百のなり沙法に者智世に
稽古しなるき勇道の為法をもきまして出家に乞られ徒と
なるとのことなり百我意に振まい僧どもに対られ
ぐやのなりしが棄のごとくいやく比児の氣らに中に沙門に
なりて却て佛法のさとりとうすべしと元義一変し又の
方へと送るなり法虎に云　豊沢の里の光明寺は若狭宗の僧
住せりそれ一遍上人回国の次に甚目寺にて六時礼讃を修
せしに小光明寺れ流をいと孫に対ひ念佛の法門を
ど説ける縁を上人に聞て問家なり梵坊法陀佛と
号す即一遍上人と中興の祖と仰ぎる今に到て三十四
世なりつゝ三流の第の綱れ僧に其の古き板木あり豊臣
秀吉公なるなりし時出ちに入てまゐりしひるがいまに行る時
なりれ板木の下に村雨と拝戴しひろう壮年中なりて杉
昔れ雨とともに自ら木下と名のるなりしに僧の
口碑に伝へ侍りし又天文の初光明寺派下に福田孫と云る
僧あり眼疾と療しなるなりとなり　後京良院にて御疾成
ゆせしめ知ひなるが御快くうせ知ひしなるば時に古されける後
居わるく官女と知ひしなるば携て出に帰り墨俗して光知郡中
村に居と移し法助と称せしに彼官女の生る子即秀吉
公也所に光明寺へ参詣なるとゝ○本尊阿弥陀如来

下萱津

大銀杏

俗に此杖流布しそめし人ハ
ものゝ一遍上人西國
行脚の時携へ給ひし
杖と云ひ伝にきもとるゝ
ひろしゝ葉と小さき根と
生じて今かゝる大本と
なりしなり土人の口
碑とゝ伝へるなり

かりそめに
植し杖い
世々人れ
法ふかきもの
ちうしうちうしん

玉好

寺寶

青磁大花瓶一對 世ふ天然ち

鎮守天満宮社 縁起ふ云

の飛梅天神ハ往古妻日井郡飯田村松林の間ふ生ぜ飯田萱津西村の
氏人夫婦とゝ祭り正和二年当社を焼失せ内当社も焼色ぜ
伊勢ふ参りそれハ私と今ふ天神ハ新ハ産神の松樹ふかゝりく
嘗ふ

五輪二基 一基ハ永享八年十二月十三日千ふ法陀仏とゝ
一基ハ同九年五月十二日久ふ法陀仏とゝ

奥田大神宮 毎年十月寅卯の祭事に当ちりの祭供ものゝ 一香物 三十二
給 一黒豆三斗 一白米二升 一御酒料百文 右給ふ掛とつけ新七ふ
一大根一把 一御酒料百文 右給ふ掛とつけ新七ふ
一柳 箸八膳 長一尺五寸 一棒四本 大和竹 長六尺
右当ち
り貢新の香のものハ正法寺の貢新ハ別ハて当ちの末ち林光院と
年製造す為ふ林光院と書ち屋と年ゝ又国上ふ香のものの畑ハ
ハて今ハ当ちく あるちり貢新ちれハ法世ゝとり本末ちゝ
ハて今ハ当ちく あるちり貢新ちれハ法世ゝとり本末ちゝ

久長山實成寺 田村ふあり日蓮宗

当ふ四ヶ寺の一ゝ明應年中 織田大和ち敏定再興ゝ法後福信
正則ち尼と妻附わりしゝ今ふ伝和す ○寺宝 日蓮上人真
筆の大曼陀羅一幅 日親上人の大曼陀羅一幅 唐画十六羅漢十六幅

萱津古戦場 田村ふあり岩倉の城ち織田彦五郎信友主君武衛義統と戦
信友の後と奪ひ九彦五郎と誅伐ちん軍

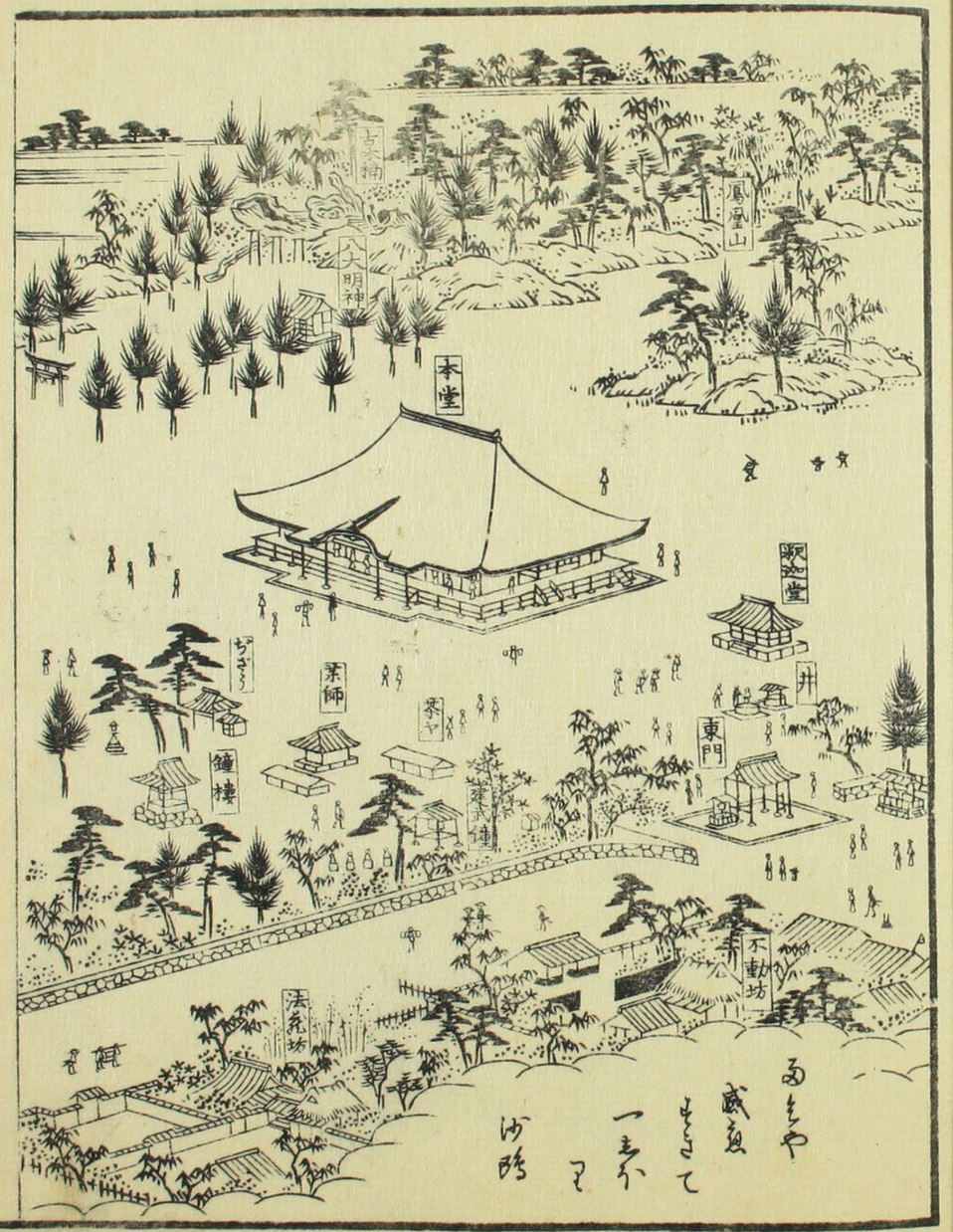
兵と伊勢先陣次の氏屋小放火せやして天文廿年八月十六日那古野を進発ありて
稲葉地川の辺まで打て出でおのおのに分れ清洲うらも蓮津村迄打て夜明うら申刻
まで双方互ひに入り乱れ火花をちらして戦ひしが織田孫三郎信光の小姓赤淵
清六討死をみて討死せしにつひて十方たを中條小一郎宗田橋六一陣小手をおはる
須方の坂井甚助と討取るうまが坂井表にて馬部孫助也村与一郎赤林孫七郎
山倉孫助小藤の勇士五十余騎或ハ討れ或ハ疵をうなを清須勢大に敗北せ
ばを信長公駆ひすひからじとあげ〳〵敗陣
わ〳〵〳〵信光記小見えたる古戦場

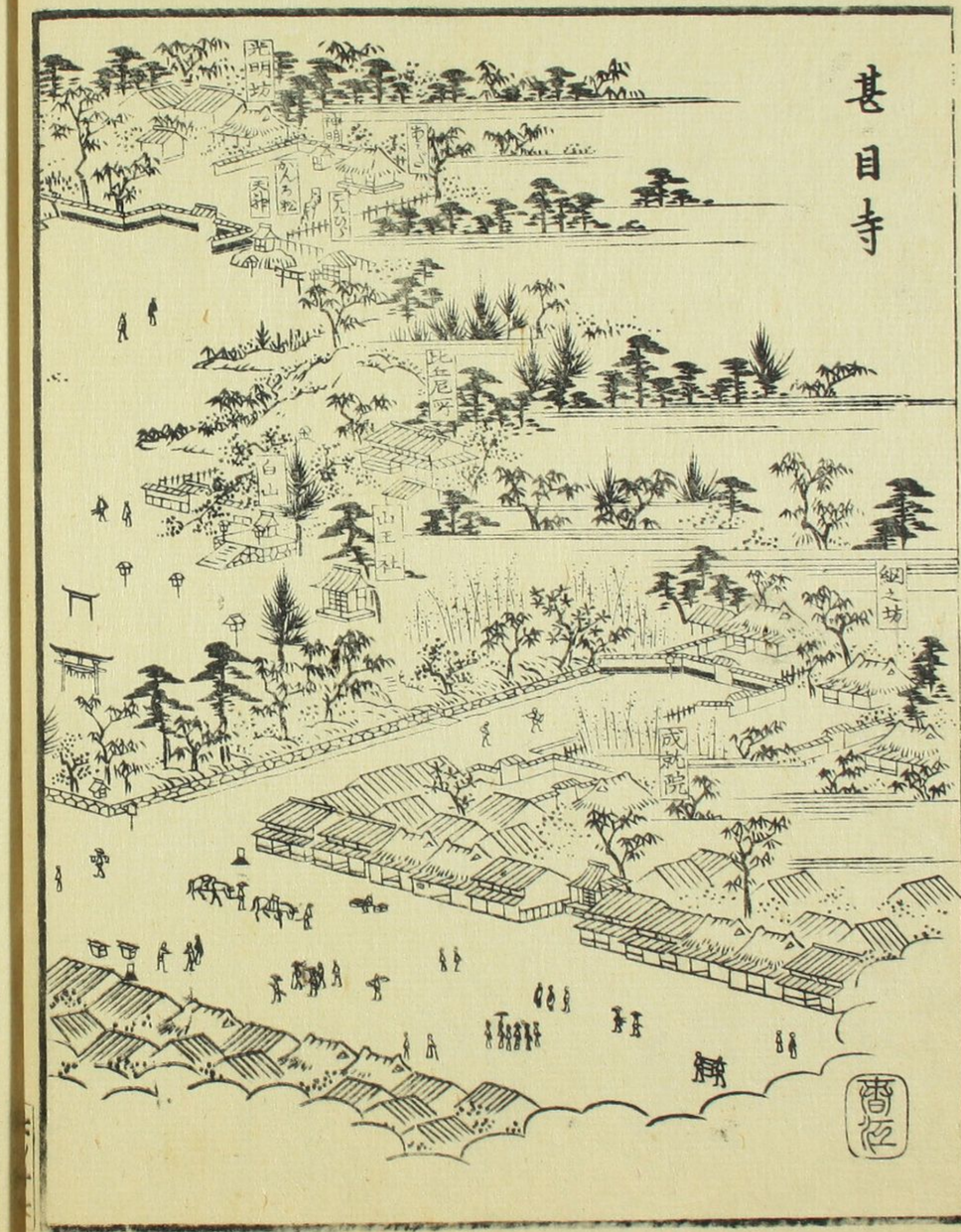
鳳凰山甚目寺

甚目も村小あり寺名を
府下大須志福ち末

寺伝小云尚古ハ甚目流磨
の創建ありて往聲常に漁猟と業とせしが一日網を繕へ海浜
小おん〳〵後ろ入江小網をかけ〳〵ありたるたちまち網の裏小あり
ると見えれバ力をあ〳〵網とかけ小宗令仏の一体とあらわ〳〵
見まに聖観音の霊像なれバ且驚き且怪び合掌礼拝し
立所に己が罪劫と後悔し小業と捨く道心と發し江の側小
一宇と造立し彼霊像と安置し吉貴四年丁巳推古天皇其の六年と
姓氏とんちをもつて往昔称ふ出世の時南天竺毘舎離
國の月蓋長者が息女如是女五種の悪病とうれへる時称ふ

より法陀観音菩薩の三尊仏と授ふ〳〵和ひく彼劫病と救ひ
ひ〳〵霊像うつしが我 日本小伝来〳〵法陀の尊像小流濯
玉若光ち小安置〳〵観音の像ハ即尚ち此寺小なりたる或
時 天智天皇時不縁小ましまるが 帝尚ち此観音霊験
あ〳〵うるものと宣〳〵石山行幸あらるに御悩忽ち御平癒
ありせらるるに 勅使左小弁兼盛朝臣八葉の宝殿今にたと
佛殿小懸掛ひ 勅願ちとうに移ひぬ白鳳八年己卯又
勅宣あり〳〵堂舎と建立〳〵鳳凰山此 勅額とかゝ〳〵仁
壽三年癸酉更小一宇と造営して法華此像と安置後田渠
寺康和五年癸未散位菊原連長信智能共小私力とあ〳〵
再営すち信及び下司大江重房等も亦合力して堂舎修
小復古せり天治元年甲辰二月朔日の地震小又堂宇破毀
寺大治元年丙午春當座下司散位大江為通及び志賀部氏


本堂
鳳凰山
大明神
吉天神
鐘楼
茶屋
東門
不動坊
法光坊


甚目寺
光明坊
天神
比丘尼所
白山
山王社
細工坊
成就院

名藍高出鳳
凰山香火人
来境不間霊
像自知沈海
苦更将慈網
向塵寰

士朗

拙把園句集後編
ゐわ
月もわを
り
雪の名

の女又力と合せて常建を建久七年丙辰聖観上人檀越小劫の施入と請ひ始め二月十日山に入り木を伐る是を新始と云八年四月四日石蓋を敷き立月八日柱を立七月十一日上棟十二治二年庚申堂宇を葺き建仁元年辛酉十一月三日落成し同十八日午時堂供養 勅使大膳大夫安倍資元 さて上人一力小く大宇を修造し供養を遂げしば即上人とん中興の開祖なり木像と堂内に安置せり上人曾て紀寺他を巡礼して後其行方を尋ぬ又来日とも知る人なれば殆くいと紀寺に柱化なりんと諸人奇異の思いをなせり実に法燈絶えざる堂塔も叢林なる妙法清律の古名刹なり○本尊聖観音 三国傳来閻浮檀金の秘仏なり左右に毘沙門持国二天の立像を安置す往昔一遍上人南方に遍歴の時此毘沙門天信仰し共に奇瑞あり此時八必堂あり西の方に茅屋あり上人廻国の序南山に来り此毘沙門天信仰し共に今報恩仏行を修行の時又持国天八信に田植毘沙門と称して堂津の里小千木下長者と云ふ者あり此者の像と信仰し或日一夜の中に十余町の田を植ひしかば夫より田植毘沙門と共に霊像と又堂内に一木巨像の四天王と安置す即行基菩薩の作なり毘沙門と共に霊像なり 寺宝阿弥陀の木像 当我十郎祐成の妻虎御前尼の造立なり高六十六糎の坐像阿弥陀仏と称し寺院を絵画一幅

八葉宝鏡一面 天智天皇御寄附 宝剣一振 同 紺紙金泥法華経一部 同 弘法大師真影一幅 真如法親王筆 涅槃像一幅 北殿司家にて堂津の千木下長者が母尼に成て五十二歳の中に此老尼と称する人ありし頃 甚目寺縁起一巻 文永元年の写なり 当寺古図一幅 比丘尼所に蔵す 寺産證状 織田信雄公豊臣秀吉公の朱章及び国祖君御寄附の清洲城の絵図あり 鰐口 本堂東の方に掛く落に尾州甚目寺御宝前遍照雅則追善也聖泉寺三世天光和尚の筆にて天井の圓大檀那飯野左近蔵人定道明應八乙未年八月吉日大工藤原宗次と有り又同本堂の西の方に掛く落小奉寄進尾張國甚目寺観音大工西金屋刑部大夫文明十一年七月十八日願主妙椿道栄と有り又本堂絵天井に下津正眼寺三世天光和尚の筆にて天井の二字と大書を是火伏也と云伝へ 堀川夜討の絵馬 本堂に掛く奉掛絵馬長尾三位法印吉房公御願所施主湯木甚左衛門藤次敬白文禄貳年癸巳正月吉祥日右筆田邊圓書宗次と有り造尾小云法部れ中の庄小右人有て毎月廿日に行修行逆うれば墓日に掛ひ一古う掛かけ古絵なるとも元和の比なる者にて尾法印吉房御願と有り前園白秀次公の先考一位法印吉房なるも社頂志の小人も角力の図 茅ヶ崎四年同十一月廿日に行なん 橋辨慶の図 同十年 鬼の首 引の図 同十一年 馬の図 元和六年巳上いづれも古画の大絵馬にて願釋迦堂 古色ありし古画の大絵馬にて願釋迦堂内に聖僧の木像と安置す白き帽子被りけり四天諸人女神と心仏白粉と云ふ十王堂地蔵堂の阿弥陀堂軍山堂護法堂 三重塔 本堂電流用王弘法大師の作擬宝珠に尾州甚目寺三重等の数宇いづれも宝塔内にあり

塔寛永四年丁卯九月吉辰施主名護屋
野両替町吉田半十郎政次しるす

鐘楼

後陽成院江州西念寺鐘晨鐘響遠振十方界夕梵聲廣度三有際三宝久住四海倶利天下泰平海内安全建武二年三月廿日大工藤原国安大檀那道誉住持比丘澄俊濃州大野郡揖斐庄南方保今坂之御社御宝前鐘天下泰平故也文明三年辛卯閏八月日願主徳室御代官左衛門尉橋永久しるす按

二王門

因幡にあり宝暦年中より假の陸を無てあり〳〵ぶ

鐘楼

伊勢にあり宝暦年中より假の陸を無てあり〳〵ぶ

東門

門内あれども主場なし数多しるす

観音池

寺の東南の畑中小江上にあり池即古(旧)跡寺の上一山の麓潴集うて女郎の塔うち風凰山を巡り行列して

塔頭

法華院 東林坊 竜泉院 成就院 性徳院 光明坊 普門院 宝蔵坊 不動坊 福寿坊 一条院 一心寺

天台宗

網之衆三家

基目 詫摩の末裔にして妻帯の僧徒也 海部郡 弥右衛門氏 北畠氏 三代実孫に負観六年八月八日壬戌

尾張国海部郡人治部少録従六位上基目連公宗氏尾張醫師従六位基目連公冬雄等同族十六人賜姓高尾張宿祢天火明命之後也しるす今れ印行ホ小基目連と其日連しるす得るす

比丘尼所

歓迎堂とやる智恵といつる尼僧の冥慕し創建れ年記詳ならず法尼に云福徳正則清次しるす

名の所也弱沢井ホ老ホの先方れ古ホ日我徴賊少年の内工匠のために綱鐘とそびえ毎夜基目ホれ休して小老尼厚く待て食糧と給しむ我今ことをとるもの氏食糧と給して甚恩を得と我化物よ縁

ラバ老尼絶うく[illegible]郷[illegible]
せりこと[illegible]毎年彼沈小茅を賜わるし沢井[illegible]老人生に沈う待し正則[illegible]
武志[illegible]しが分れ茅をとそれ沢人の恩と張り徴賊の内と
ずして法家に沈う潜れる去るるし八夜に[illegible]

蕭寺倚墟落蔓草遍空庭不見来儀瑞修竹繞牕標
山門苔痕紫碧殿燈火青接輿有餘歎吾道付林坰 松平君山
摇落高楼返照斜雙林寂寞接煙霞寺前画馬嘶秋
草綱棄白毫歴年華流水門空傳法界長虹橋掛望
琵琶登臨賦得塵途外極目諸天有雨花 届方致
中原紫氣繞香臺萬里蒼茫法象開憑檻長江秋色
動捲簾遥嶺白雲来華鯨聲響老僧下鳴鳳影飛羽
客迴猶自豪遊心地浄風流多暇興悠哉 賀利重
金城西去向紺園露浄風香桂樹繁北岳秋高連積
雪南天雲盡接平原千年古佛掩扉寂幾處遊人繞
寺喧出入路塵曽不隔馬蹄鳥迹大悲門 谷直矩
大悲高閣欝崔嵬遥望東門大路開頭展鳳山翠微
近拏梯雁塔白雲迴中天風雨過欄去下界水煙入
座来方丈梵歌心地浄登臨詞客幾銜杯 田孝治
煙霞深鎖鳳凰山碧樹陰森僧院閑晚磬秋風天外
響曼花摇落五雲間 八美部

甚目寺初観音詣

大悲観世音菩薩

鳳凰山

月十八日

菩薩

納

音

上条瓜　上条村ハ春日郡の名産にして今も猶國君より幕府ハ奉呈
[illegible]　他邦の産ハ更ハ為之自遷世来に上条瓜
[illegible]瓜河越瓜[illegible]瓜ハの上に列

八幡宮　古図村ハ[illegible]　応神天皇左右に玉依姫
并仲皇后を配し奉る　世に古図八幡と称す　社傳ハ云ふ社ハ
幡宮ハ　後島羽院の御宇建久元庚戌年九月頼朝公上
洛の時当所を通ふに白鷹の樹間ハ[illegible]を見[illegible]
[illegible]八幡宮擁護[illegible]祥瑞[illegible]
久世郡石清水八幡宮及び三所の別宮末社ハ[illegible]
て当社と共創し叢業[illegible]大社[illegible]年[illegible]荒廃
せ[illegible]と雖長四巳卯年五月三日当社の別当法[illegible]聖盛再
営を加へ同十一丙午年　國君[illegible]重修[illegible]制札ハ[illegible]
[illegible]して巍然[illegible]神[illegible]○別當放生山寶幢院云云
宮ハ[illegible]村
万徳寺末　祠官　廣瀬氏

富士見山大吉寺　同村にあり曹洞宗三河村正眼寺末久寿二年の創建なり
[illegible]廢絶せりと天正十年伝[illegible]

年興す所ハ[illegible]中興の開山[illegible]
云富士浄覚の附当寺に流[illegible]永享四年九月足利将軍義教
刹当寺ハ山号と今のごく号けられ[illegible]彼山と称せ[illegible]
浄妙寺も多くあり[illegible]天文十五年三月焼失の時[illegible]灰燼せり[illegible]
ち寺と賜りて　吉君
今に連綿[illegible]

本尊　大日如来
春日の作

剣留山東勝寺　廻間村にあり曹洞宗三河村正眼寺末往昔の堂宇衰廢せ
の妖僧道行[illegible]と天正十八年直首座中興して舊紀に復せ[illegible]
のなり業況[illegible]
名づけ[illegible]
久[illegible]
[illegible]

本尊　業師如来座地
太子の所作

青林山延命寺　板敷村にあり曹洞宗[illegible]創建の年
類聚国史ハ貞観十四年三月廿八日戊戌尾張国[illegible]往昔清林寺[illegible]十二坊[illegible]大伽藍
古刹[illegible]物換[illegible]早移り[illegible]土坊ハ廢絶し僅ハ[illegible]延命[illegible]存せ[illegible]天正乙巳の
年法持寺[illegible]四世仙英和尚中興し清林の寺号を青林の字に改め[illegible]当院
の山号[illegible]今の宗に改[illegible]
れ日当[illegible]
[illegible]

本尊　延命地蔵尊木仏の座像にして
[illegible]親王の所作日本三躰の一なり

義教公
土田村に
富士御覧
の図

方領大根 方領村ハ産土宮ニ大根ハ一名ハ目方ニ中ニ自然ト生ル地ニ運送スル能ハズ野ニ生ルニ世人ハ其ノ大ナルモノヲ尊ブ俗ニ傳フ大根ハ門松尾法大根ハ幅半房ヲ過ル尾法大根ハ刻ミ方位ノ長キヲ以テ世ニ名ヲ聞ク又松平君山翁ノ種蘿蔔説ニモ尾張蘿蔔冠天下其大者數斤色如珂雪味甘如飴四方之人爭而買之以充方物焉ヲ以テ也方位ノ長ト云ヘリ宮重ノ産ハ必宮ヲ以テ文字ノ黒点ヲ押セリ形ハ一細キ方ノ如ク馬乗ノ如キ大ナルモノハ南村ノ産ナリ小ハ中嶋郡石作村名ハ以之豆久利ト云ヘリ地名ハ今ハ村中ニ移ル又ハ郡ト云ヘリ南郡ヨリ村名ノ移ルハ全ク中古ニ近キ村ヲ以テ世ノ南郡ニ属セリ

石作村 和名抄ニ中嶋郡石作ト云ヘリ今ハ村中ニ移ル又ハ郡ト云ヘリ

石作神社 乙作村ニ在リ延喜神名式ニ石作神社本國帳ニ從三位石作天神 日集説ニ中島郡ニ今無石作村按海東郡松葉庄石作村天神社疑此祠乎 姓氏録ニ石作連火明命六世孫建真利根命之後也云々 是尾張氏同祖神也 ○ヲ

中杜天神社 森村ニ在リ本國帳ニ從三位中杜天神ト云ヘリ

中森 同村ニ在リ上ノ表ハ中島郡ニ在リテ今ハ表上村ト云ヘリ中ノ表ハ海東郡ニ在リ下ノ表ハ海部郡ニ在リ 伊勢村ノ名ハ伊勢國御厨ノ人ノ移ル所ト云ヘリ

家集

菩提の聲 菩提ハ中ノ表ト云ヘリ 道中ノ表ト云ヘリ 赤塚氏

新屋村 今新居家ト書ス 日本書紀宣化紀ニ穀我大臣稲目宿禰宜遣尾張連運海部郡新屋郷公穀一千伍佰八十三束假稟六百二十五丸貢海料驛馬以半稅充國庸 尾張國屯倉之穀物部大連麁鹿火宜遣新家連運新家屯倉之穀 又和名抄ニ海部郡新屋ト云ヘリ民部省図帳ノ残缺ニ云ヘリ

新屋天神社 同村ニ在リ 本國帳ニ從三位新屋天神ト云ヘリ 日集説ニ按舊事紀物部印葉連公五男物部竺志連公新屋連等祖云々 延喜式天穂日命

藥王山法性寺 同村ニ在リ其云ヘリ 孝德天皇ノ大化年中ニ里ニ一人ノ信士有リ其名ハ未詳 天智天皇ノ時ニ在リ 動乱所々ニ起リ 後ノ梅院ノ時ニ南方ノ往信運菱ヲ以テ再ビ日光月光及ビ十二神ノ二天ノ像ヲ彫刻シ 蓋光明寺 ハ大方ハ廢絶セリ 今ハ 杜後絶ヘリ

本尊 藥師如来 **寺寶** 如意輪觀音 小野小町 **杖念仏** **藥師如**

来画像 宅磨 豊國大明神の神号 秀頼公八歳の手にて揮し あれどもこれと異れ

小町塚 因村にあり 寛永八年二月齢ひ八旬ばかりなる異僧此里に来り寺
家ごとに入て小町が墓はいづくぞやと問ひまはりければ
其所を教へしけるに邑の地所赤林といふ住けるが残して彼僧
を請じ小町の由来を尋ねければ彼僧のいふ人あはれむべし小
しく三色の書をあらはし一生の事実を語りきかせ且当年ハ
小町が八百八十年忌に当れり小町が終身持し如意輪観
音此塚の中に有べし出現あらバ寺中の結縁小町が菩提
ともなるべしと語りければ三度経及び法性寺の住僧性範ならびに
九郎太夫ハ示現せしめ彼塚を堀りにかくして洞穴の
観音を得たり則法性寺に納めて今に什物とす異僧ハ其場
よりかき消ゆるがごとくうせけるとぞ

因村に安倍晴明塚あり これハ晴明此地に来りし時農民田中に蝗虫の生ずる
を患へければ則幻術をもて蝗害を除きければ村民これを小塚と築きて祭りしと
いひつたへたり按ずに小町塚晴明塚共にさだかならねど里人の口碑とぞきく

ころうつ
すのと

新居家川 因村にあり水源ハ中島郡桃源寺川より来て魚鼈甚多く秋の比ハ鹿下より
捏槻の諸人も群し新居家橋ハ此川に架せる津島道の橋なり又此川の
源潮ありてこの比や兵乱の時賊徒銅鐘を掌まで持去
かく鐘を此川に沈めしと潮く小川埋まりて見えずなりしと土人の口碑に於て
甲斐名勝志に都留郡新屋村に鐘ヶ淵ありて天正の比武田北條合戦の時陣鐘を
此淵に沈めしとあるをあはせ考ふるに此やや村彼ハあり村と呼べど文字も同じ新屋
まで又同じ鐘ヶ淵のあるもいと珍し彼唐土の松江ハ鱸魚の名あるに我出雲
の国の松江にも彼魚を産して甚佳味の名あるもおひらかに奇遇といふべし

高宮社 二ツ寺村にあり 慶長十五年庚戌九月福島正則の重修なり 祭神 大日孁貴
尊例祭八月十八日 当社に古き棟札あり其文に云 右為当郷神社并拝殿等
奉作造立供養意趣者現世安全武運長久悪敵退散國家豊樂之善願如件
尾州海東郡二寺高宮於御遷宮被成候者也山田助作御護持大施主安藝國之
羽柴少将藤原正則慶長十五年庚戌九月五日大工清須勝左エ門修復
仁右エ門とありまた因村小関ノ宮社月宮社あり共に正則の修復なり 祠官 横穗氏

福嶋参議正則宅址 因村にあり 正則幼名市松といふ当村の大工与左衛門が長男にて
村の赤林氏と称して小田原へ居住せしが其比ハ縁故ありて新居家
に彼公勲良のもとへ正則を召抱へしが公に随従し天正十一年四月江州志津ヶ
嶽の先登に切石をはじめて武名日に盛りなり 同十月叙爵し 安藝
小叙爵しこれより当国清須の城に居住せり元和三年六月参議従三位に叙任し安藝
備後両国にて四十九万八千石の太守となりしが程なく至りて元和五年六月
二日所領を没収せられ信濃の内にて纔四万五千石を賜りしが程なく寛永元年
七月十三日六十四才にて卒す実に希世の猛将にて勇烈比すべきものなし久しく
武五年の乱に実に此時なりせばその功いかばかりなるべきか惜しむべし 名れ

小町塚

九月ころ　日ぬ
　　ふ
行の　　ち
人の　　
小町　　
ふさ　　
ふる　　
の下の　　
く　　
れ　　
ふる　　

高門
いりあひ
みやひ
ゆふ
の

塚もむ
あけゆく秋の
風を
ながむ

雀史
かすみ
すきの
表地
おかる

既絶せしかとも[illegible]不仁の暴逆と天の罰[illegible]

瑞祥山菊仙院 同村にあり曹洞宗三ツ河村正眼寺末文永元年の創建なりて明要法師の開基なり **本尊** 阿弥陀の木像 **寺宝** 不動明王八福像 正則寺なりし **正則位牌** 海福寺殿前三品相公月翁正印大居士と行り 寄ちい正則清須立城の時菩提所なりし也 正則の後絶ふる事なれ大地平田となる[illegible]なれ又正則画像一幅は新庄村の地士市林氏の家内裏書に正則の小像と記す[illegible]文者に拝する所と大日小[illegible]と書[illegible]

花正村 神[illegible]に尾張國花正御厨御封戸三十七町[illegible]て頗る廣く 伊勢大神宮の御封戸なりし 旧村なり 当郡の内花正花[illegible]花[illegible]郷名の[illegible]

瑞應山法藏寺 中嶋村にあり浄土宗西山派当郡栗生光明寺永観堂禅林寺の西山[illegible]

[illegible]て昔弘法大師[illegible]蓮花寺創建の[illegible]地義井[illegible]寺の西[illegible]南[illegible]年月詳[illegible] **本尊** 地義井[illegible]

[illegible]所の霊像[illegible]世に子安地義と称し[illegible]地義井女人参詣の[illegible]

藤木田 今の木田村[illegible]塵添塩嚢抄に引用せり 昔清公の尾州地に春日部郡[illegible]川[illegible]

連[illegible]人[illegible]れ[illegible]国の中に一[illegible]

[illegible]て大樹の[illegible]地と名木田と名づけ[illegible]

[illegible]世茲文字と者[illegible]

[illegible]国[illegible]

木田三郎源重長宅址 同村にあり 重長は別当の人にして盛衰記平家物語[illegible]の治承四年卯月九日源三位頼政の[illegible]

法[illegible]の源氏物[illegible]に美濃尾張小木田三郎重長[illegible]公[illegible]の多胡系図[illegible]に一族の人[illegible]名[illegible]の武士[illegible]

貴船社 乙子村にあり[illegible]神 同象女神 天正年中長尾三位法印造立の棟札[illegible]

社地頗る廣大なり 古棟札[illegible]奉造立貴船大明神 社頭者依為當関白

様秀次公御氏神御父三位法印為御願御神躰[illegible]兄同金殿玉楼之社頭悉皆御造

營成就畢仍撰嘉辰貴開眼供養法儀給誠如依信力甚深神徳厳重而守護御武運長

久當其運遷官之導師者長沼萬徳寺良秀法印于時三位法印之代

奉飯沼半三郎殿盛勝于時天正廿年壬辰九月廿[illegible]日[illegible]

三位法印宅址 同村に **法印**は尾張武[illegible]吉房[illegible]秀吉公の姉

聟秀次公[illegible]文[illegible]の者村の人[illegible]弥助[illegible]登庸

[illegible]武[illegible]に任じ[illegible]業を紹又為信[illegible]信長公美濃の堂

洞と表[illegible]乙子村小[illegible]弥助が[illegible]雑役馬

馬[illegible]乙子村小[illegible]弥助[illegible]

[illegible]鐙片[illegible]皆片[illegible]弥助と

取[illegible]

[illegible]村に今も[illegible]地の[illegible]尾張人也志[illegible]

[illegible]村小図

池鯉山蓮華寺 蜂須賀村にあり **縁起**に云弘仁九年弘法大師

蓮華寺

十時梅厓

大道遺靈是大師
竺蘭高刼此開基
自為塑像趨
庭闕別伏蜂王傳
口碑寶樹瓔々遷
怪石芙蓉的々出
清池難因羈絆尋
名勝耶宮所聞寄
小詩

阿部松園

塚上玄蜂腹若壺
村人不敢涉郊墟
當時如少大師咒
何術驅斯毒螫徐

寒清淨の蘭若ふ
の淨り手の一脛清
宗ふ入

曉春

淨春ふ
春し
秋の暁

其二

是都と
居すまひ
かえる
極う郷
其峯

開基にして文永元年 良敏上人中興せり 志賀寺寺の巨刹 上人ハ山城国岩倉の良因上人の弟子なれハ尚ほ岩倉流に十三宗を兼ねて安寺に入りぬ

め大師 熱田大神宮へ参籠して千日れ護摩を修せんと願ひ小杉の浦中疫癘流行し衆庶ひとと若くるが余うくを 嵯峨天皇宸襟を悩ましまして除疫の祈禱うさしめんと 勅使右中弁菅原宣を遣はして 大師小岩の人へハ 勅命忠節を尚ぶに下し 感慮安らけ大智識

黙止ぐ〻又千日の修法を始め急ぎ〻一夜の内に四天王を造り自像を造りこれと 大神宮ふしぎ〻て三身ハ都小上り余内わりて又護摩を修行わるゝ疫癘浩中浩外までも邪氣消散せ〻ハ 御感斜なゝ大師の威徳上下に輝き法力四方に著るく仰ぎぬこのもなりけりかくて再び熱田に参り千日れ行を結ハ是けるゞ留ちの中をゝ

土縁の大師代々修法ありけれバ身替り大師と称し
また灸縁と　焚田の灸れ院に安置す　大師大師と云
此ふハ是より西北に霊場あり彼地へ此縁を移さは衆生の結
縁廣大ならんと大師則西北をのぞむに五色の光明ありて光
の中に貌を顕すに多須賀の森也此處昔より数多の毒蜂ありて
諸人を悩しけれバ大師加持力をもて彼毒蜂を符縛し
一隅の塚に封じ給ひしが其後蜂の人を螫ことも絶にける
夫よりして此地を蜂塚とよびしがいつとなく訛て蜂須賀
といひならはしぬ志るに当年道場開基の時閼伽の
井を穿ちけるに井中より光を放ちて五鈷鈴を掘りだ
せり又井中より涌出る清水溢れて池となり一夜の
内に白蓮花咲乱れて異香四方に薫ず因て池給山
蓮華寺の称をもって號委しき事ハ印行の縁起にあり

ありて此ハ省く毎年三月廿一日より廿四日まで八開扉
ありて音楽法会を修行す此四日の間遠近の群参
おびただしく繁昌するもこれ大師の威徳千歳の下に輝ける
としるく覚ゆる○本尊 大日如来の座像 寺寶不動明王像 大師の手光
明曼荼羅 同 十一面観音 同作木仏 剃髪名号 同作にて則母堂の生髪をもて返答のしるしに六字を繍ふ 五鈷鈴 井中涌出するところ 松虫鈴 大師の所持 五筆心経 同筆 菩提念
珠 同所持 泥塔 同作 両會曼荼羅 同筆 黄金舎利塔 一基 嵯峨天
皇宸筆 一葉 陣太鼓 諸に元亨元年辛酉九月十八日藤原経住勧進寺僧等沙弥乗蓮とあり此外あまたあれど略す
寺産 むかしは八千石なりしが兵乱の後亡失せしといへども今も猶若干を残す

海師遺迹偏天涯此地殊看瑞氣加金杵有霊曽出
氷丹蜂無毒尚衡花三春集會傾緇素五夜薫修護
國家一自従官少餘暇登臨何日命中車
磯貝滄洲

蓮花精舎勝祇園樹色蒼々雨露繁霊地千年餘土
像来風景田事真言林間蜂塚無人識堂外鈴池尚
自存我昔山房寓居久登臨偏想祖師恩
無所得

蜂須賀藏人正利宅址 同村にあり

高名記に云中比尾張國蜂須賀の里に蜂須賀藏人源正利といふ人あり元来斯波武衛の末葉なりしかども武衛家衰微に及んで此里に蟄居し所の名を以苗字とし僅に百貫の地を領して年月を送り民家に軒を並べ其名かくれもなく知る人多かりける大永六年一子を設く幼名を小六郎と名づく長ずるに随ひ智仁勇の三徳を備へ智謀勇猛の良士なり初犬山の城主織田十郎左衛門信清が旗下に屬せり一日信清他に出行ある間敵窺ひ来りて犬山の城を囲む小六郎防ぎ戦ひ敵を追拂ひ棟梁の敵を槍下に討れることを大切に思ひて感議せりまた岩倉の城主織田伊勢守信賢が旗下にありし時に家臣謀叛して城を囲む則小六郎突て出敵を追拂ひ槍を合せ首をとりて高名す夫より信長公に仕へ斎藤龍興と合戦の時功名比類なく信長公の感喜斜ならず依て領地五百貫を賜りその後蜂須賀彦右衛門尉正勝と改名し則信長公の命によりて木下藤吉郎秀吉の後見にせらる其外數度の高名はあげて計ふべからず

勝幡城址 勝幡村と塚西村の間にありて南北百二十間東西百十四間あり織田弾正忠信定の城とも又は弾正忠信秀の城とも云按るに永正年中弾正忠信定初て此に城を築きて居住せりしが信秀も此城にて誕生ありしが古渡の城へ移りて後は廢城となれり按るに此地は春日部郡にて古屋合戦の条に見えし但し右の古城の跡は今も空地なりと云又按るに往古此所の城主も今に知れ難し尾張國司歴任略に二條院の應保年中尾張守大中臣安長朝臣勝幡に在住とあれども此地の事なるべし

根高地藏堂 根高村にあり當所六地藏の一にして稀に靈佛なり又此寺の方丈の側に古松樹一株ありて頗る奇觀なり

万場渡 万場村にあり佐屋街道の船渡にして両岸の白砂綿を布けるが如く清流東南より一色村を経て遂に海に入る頗る大河なり此渡場より五六町川に沿ひて南の方に横井山とて數百株の古松生茂れるが白砂に映ずる風景播州舞子が濱に似たりとて眺望もいとよき一勝區なり

驛樓西接萬場津　兩岸春風棹唱頻
落日舟中蓑笠白　白鳥非關左賽神人
森有齋

津頭樹如薺　落日遠沙明
水淺舟膠著　行人爲助撑
服部牧山

ゆきゝや舟まちもなくおりたちて一人さき渡る冬の川ばた
十三童 吉田冬朗

石場驛

因村の川の西うら客舍旅店多く商賣して佐屋街道
駅ゆえこゝうり神ゆ輝と絶て佐屋路ゆ通る

孝女姉妹碑

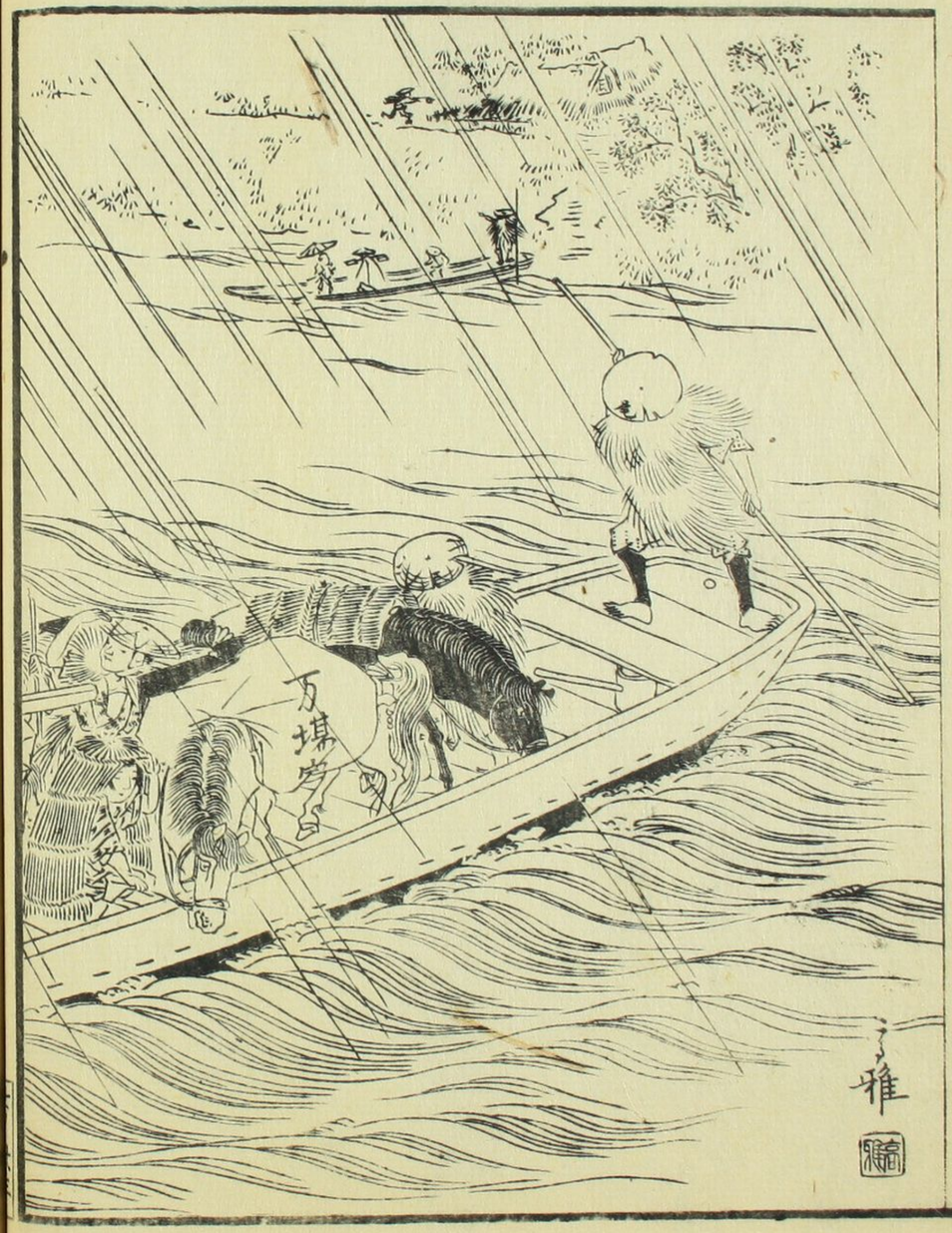
八ッ屋村ふるり尚年尚村に住給善五郎ってる家貧しくして父母
三男の食ざる心のまゝうまりしゞ二人の娘あり姉を久米ゆひ妹を
ゆくゝと呼びて二人とも性質孝行ゆて父善五郎病ざりしゞ或時善五郎の
家に帰りけれバ二人力をあはせて孝養をつくしゞ貧苦の資乏しくなるに任せねバ二人
かゝひつ富家に身を委ねゝ奴婢となり給ふ二人ハ色衣のごとく村中を巡りて食を乞ひ或ハ府下ゆ
む又ハ人ゆ嘲を乞ひ給ふ二人ハ色衣のごとく村中を巡りて食を乞ひ或ハ府下ゆ
清と勢ひをもって病父につくしゞ或時府下中下の覺鳳寺ゆ妹をよ俄ゆ大庭樹
を裏ゆいゝ得ゆ帰りけるゆ此ハ七月五日のゆ
りくゝ有之ん〳〵裏中を家ゆ〳〵に繰二文の銭ゆ
その二文をも惜〳〵と思ひたゞ我ゆハ水ゆ
窒〳〵ゆうにゆ此時姉ハ十九妹ハ十六ゆ
と申ゆえゝ遂ゆ邑をゆうその居行と御に刺ゆ
年〳〵て碑文ハ須賀安貞が撰ゆ
碑文に讓ゆて書ゆハその依香と〳〵ゆ

砂子川

砂子村ふるりて越名と彩川と
天明年中水野其治水のゆらに
大川ゆもバ魚鼈多く商船も往来
熟の安堵を得ゆ利民井一の新川ゆう官命と蒙ゆ初ゆ地と決り新ゆ流せゆ頃
水碑ふゆゆりてゆに略を又ハ川に架せ
を橋を砂子橋と称て多佐屋街道の往来
北野山自性院 因村ふるり去る東
府下大阪表福寺末

尚ちハ大宝二壬寅年行基菩薩の創建ゆ
て 文武天皇ゆ御宇勅願所ゆて永祚元己丑年八月八日

万場川船渡


万場川

の大風小堂塔傾頽せるに建久五甲寅年四月上旬北條四郎
時政關東より上洛の刻小堂もれ本尊人移しの形跡とかけ翌
年下向の時皆〻當寺に逗留わして一ふい右幕下報効么
乃清新二ツは我家新茶院の御恩のため堂塔と再宮し寺
領も寄進ありしを記録小今も相數固存ぶり○本尊茶師
此末及び十二神将も行基菩薩の作寺宝縁起二卷延慶二年小書写すれし鍔口銘小尾州海東郡富田庄成願寺鍔
口也　大檀那川崎右京亮通貞妻
文明十八年丙午十月十三日〻あり

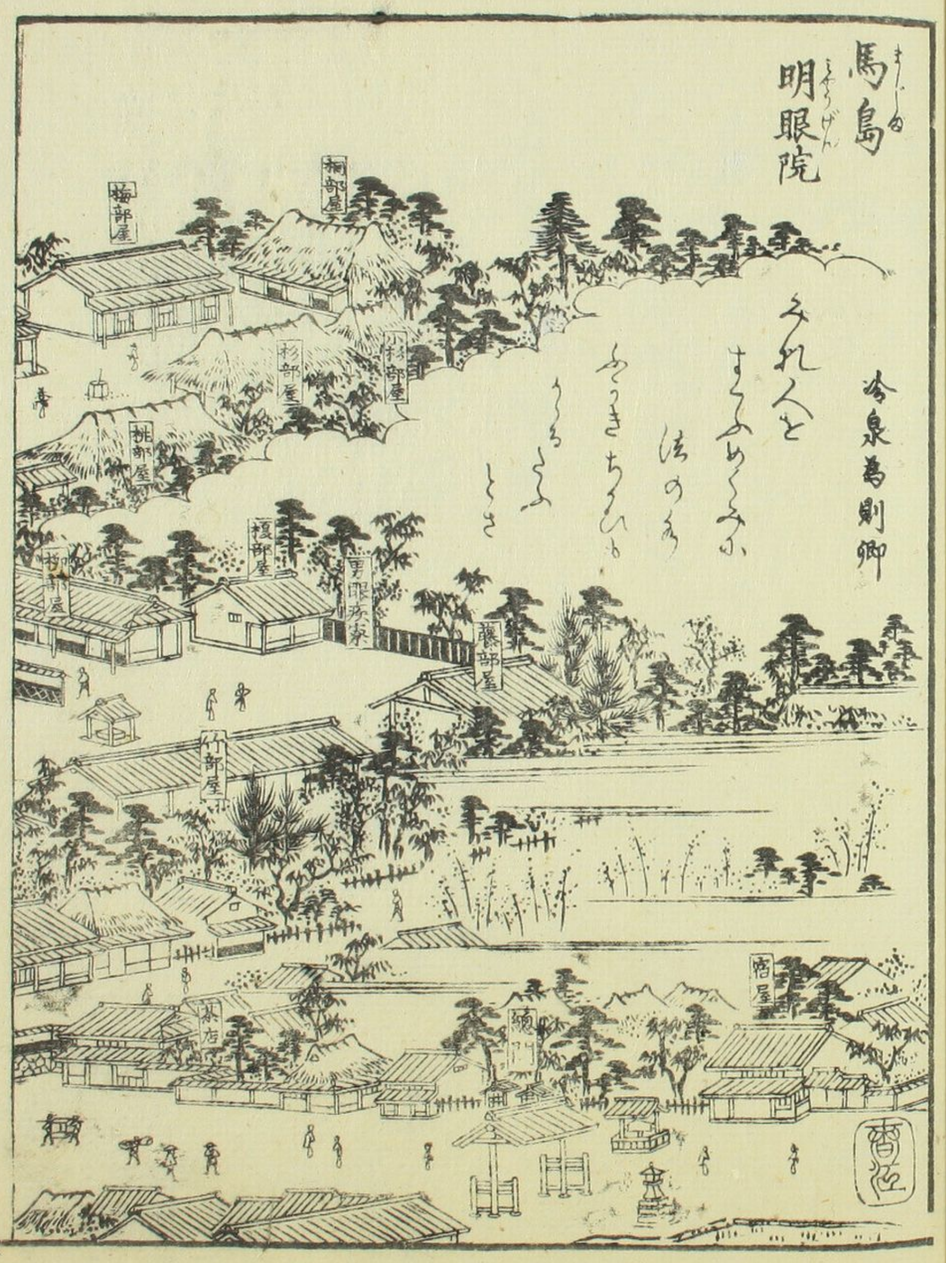
五　大山安養寺明眼院　西白

嘉風やむ乾ける寺　桂

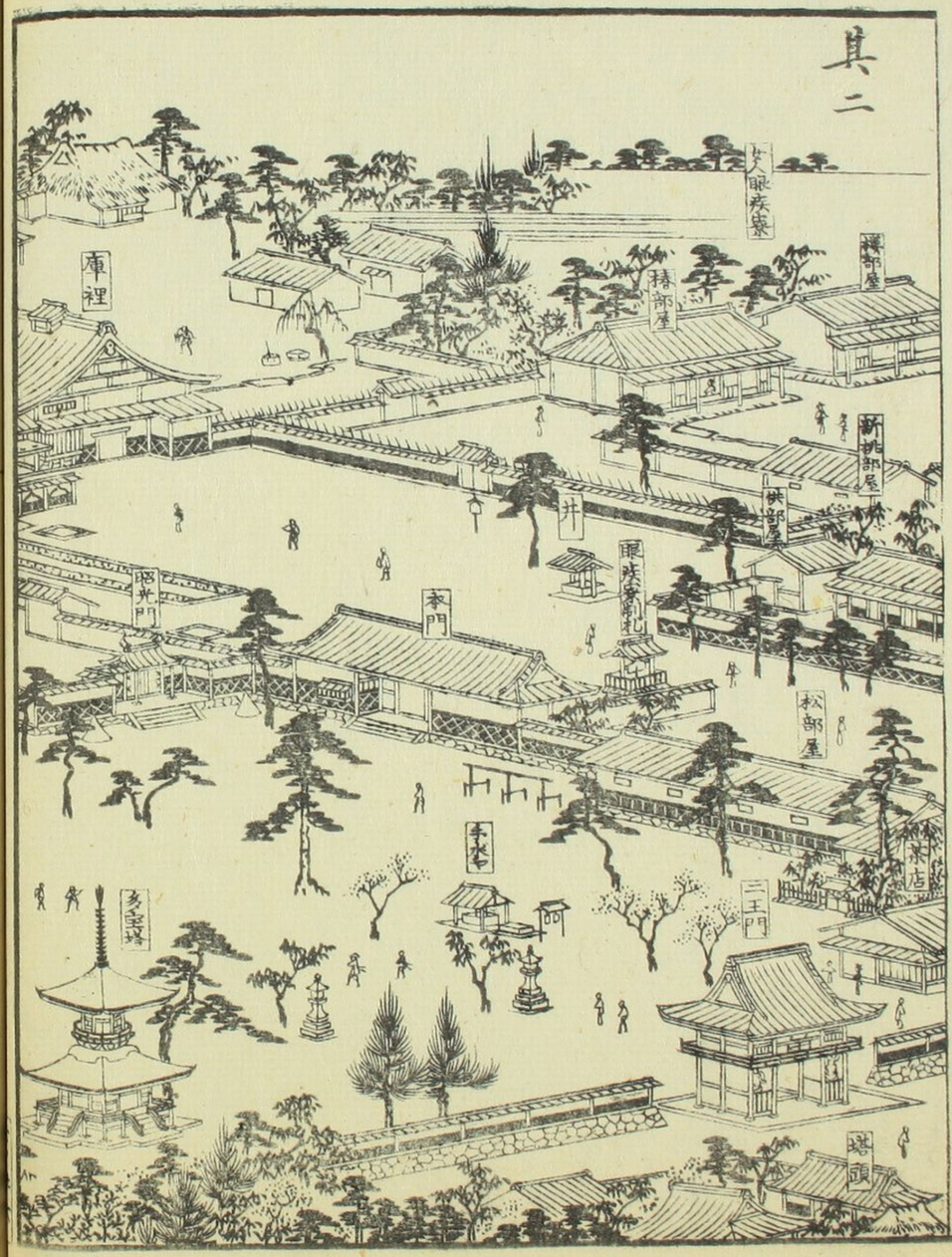
御宇延暦廿一年聖圓上人開基の灵場〻ら上人揺夢と感
得して此小堂塔と基立し先行基菩薩の刻める茶師の本尊
尊像と安置す上人〻〻〻学徒萬徒の智識するバ他益日
小巻に有信の男女山のごとく資財を持げ来ふぞ殿宇構閣も

日〻ずして功と遂へ終小十八の坊舎も左右小列し大伽藍の
巨刹とぶうぬ　今枝院一坊のみ他絶せり　夫れて法燈絶るもうく儀
然〻る巨刹うるしく元弘建武の乱小兵火小〻〻〻悉く灰燼
せり志〻に本尊茶師の本尊及び慈恵大師の木像小のみ僅〻小
此災と脱せり茲小清眼僧都深く此ものと悲み尚る再建の
志願とおこされ小佛力れ加被も空しうして延文二年小もつ
く又堂宇の結構頗る古小復し壮麗とせり為小清眼僧
都とん中興の開山〻すして尚る眼科の一流天下小冠〻るこの
を僧都者小茶師仏と信仰もるの大方うるざりし小或歳暮中
小此茶出ぬ〻汝我と奉じるのさく〻年有り今汝が為小希
世の術とあるべん見とん普く流世と流し〻〻末世と利生し
し給ふ〻一巻の書と壇上小得〻り感歓肝心落じ色ぶ
見とん〻小眼科の奇術とのせり是此術と盛小〻〻慈恵僧

の外一人として餘ざるはなし亦冥助は寺方にて代々由
ある佛の示ししめす術に折由ありて義由坊とのひしと
明眼院と更りて寛永九年（明正院の御宇）上皇（後水尾院）の女三宮
御眼病不豫なりしに京師の醫官術を尽し寺刹を進
るに又ども効なきを歎き給ふ諸院眼科の名
天聽に達せらるゝ　詔ありて召のぼる任僧園芸茶
々　勅ありて　玉座に近づき則眼に針を灸し灸葉と
称せしに日を経て平愈ましましければ　叡感の餘り明眼
院の美名を賜り且清會れ短冊及び茶器永く黄金数十
枚を賜ふ　醫王善誓洪恵のうたを取りて家ふ
人力の及ぶべきにあらず又廿一世園海法下明和三年戊十月
廿二日　桃園院井二宮御眼病を治し給ふ効験園芸法下
の附の外にうるはし示



剣道
方丈
書院
対面所
客殿
車寄
女院
本堂
鐘楼
拝殿


其二
女人眼疾堂
庫裡
精部屋
新地部屋
井
本門
松部屋
手水舎
三王門
多宝塔
塔頭

其三

南し安茅の
とく後へて
世の人に
やすひと
まつ
寺ハけち

岩倉具選卿

尾張名所記

実あり
このめを
あらし
茅子

席竹

よりて給ふ　勅願所ふたうりぬ○本尊　某阿弥陀如来行基菩薩の作　宝塔　源信僧都の刻み給ふ大日如来と安置す今れ塔ハ寛安二年の再建也

白山権現社　聖円上人建て壇と築き祠を建て浦邑及び十二隣村の老若の男女参詣と傾け給ふ　神ましす今に毎年三月廿一日村民不易礼祭紀を営ふ　此日参詣の池　馬島天神祠　焼肉の池　上ふあり　本国帳に従三位馬島大天神と号す　辨財天祠　焼肉ふあり　寺宝　御會短冊　五十枚　勅賜茶器　七種　茶杓　小堀遠州侯の作　同　同作竹ふ明眼院と称す　茶碗　同茶碗ふ明眼院と称す　同　同義書　竹花入　同明眼院　瀬戸文林　茶入　茶壺　呂宋茶壺　同茶壺明眼院と称す　景清甲冑　唐櫃　甲冑唐櫃の図集古十種ふ載せて世に名るし　花鳥二幅對　呂紀　同一幅　周之冕　同一幅　林良　王達王世貞両筆の詩一幅　夢想國師書一幅　十六善神一幅　張思恭　藥師如来一幅　探幽　川渡布袋一幅　同画賛　遠州侯　菊慈童二幅對　山楽　瀧見觀音一幅　雪舟　維摩一幅　元信　神農一幅　國君所賛　山水一幅　周文　枯木寒鴉一幅　雪村　後水尾帝宸翰の御懐紙一幅　陽光院　同一幅　妙法院尭然法親王和歌三首一幅　山水屏風一双　雪舟　古画屏風　岩佐

又[illegible]書院壁張付并襖類 已上のこゝ[illegible]九山[illegible]挙[illegible]画[illegible]并[illegible]代の名
と挙る 後園の假山 南[illegible]年[illegible]
[illegible]本石星宿と[illegible]れば[illegible]
[illegible]法へ[illegible]魚[illegible]天然と[illegible]
[illegible]谷の[illegible]
[illegible]中[illegible]遺[illegible]
[illegible]三八の日並に[illegible]

明眼院八景

醫王殿　滕守禮
烟霞今古辯泉石入膏肓身在杏林裏青囊世々香　石作貞
祇園宝塔多宝塔舊天工疊々珠輪拂碧空不惟半天人語
響法門元自有神通　白山祠　僧月僊
松杉擁翠壁中有托神靈莆々數千歳廢民祈泰寧　南宮岳
行到妙音宮々前凛華表自似彈琵琶春風生樹標　東亀年
高閣撞華鐘曉風遠相送豈唯為報時應覺人間夢　栽眉
茲山何屹立莫道代天工相似赤城外更過神闕中
春霞凝嶮紫夕日映花紅借問栖身者仙来不老翁
浦月亭　龍草廬

寂莫禅閑外有亭百尺程何人明月夜長嘯作鸞聲　僧六如

觀魚橋

投餌敲欄慣不驚架梁影裡駢頭迎悠然心樂思莊
叟々々爭如宝勝名

一森山圓長寺 西條村小字[illegible]寺宗東派也[illegible]天台宗の古刹[illegible]一心
山月照院[illegible]
堂宇殿廡も悉く庆[illegible]
[illegible]殿堂と[illegible]
[illegible]壮麗の[illegible]
[illegible]加藤の山[illegible]一間顧の[illegible]

本尊 行[illegible]作[illegible]天[illegible]の作

藤島神社 秋竹村小字[illegible]今[illegible]
本國帳[illegible]従三位藤島天神[illegible]

天桂山廣濟寺 桂村小字曹洞宗[illegible]嘉吉九年八月の建立[illegible]
開山[illegible]和尚[illegible]織田大和守敏定自筆の額を掲ぐ又
寺[illegible]
代々の[illegible]文[illegible]

本尊 観世の[illegible]

伊福部天神社 伊麦村小字[illegible]
[illegible]同集記に諸本不載此一社但[illegible]田如法院藏本録之[illegible]又國府宮
本[illegible]従四位上伊福部天神[illegible]戸田庄伊麦村七社
[illegible]伊福部[illegible]

塔頭 東陽軒 境内にあり

河葉天神社 川[illegible]村にあり今春日大明神[illegible]
[illegible]天神 元亀二年小書写國府宮本に従四位上河葉氣天神[illegible]
[illegible]天正二甲戌年の再[illegible]

例祭 正月十七日 奉射

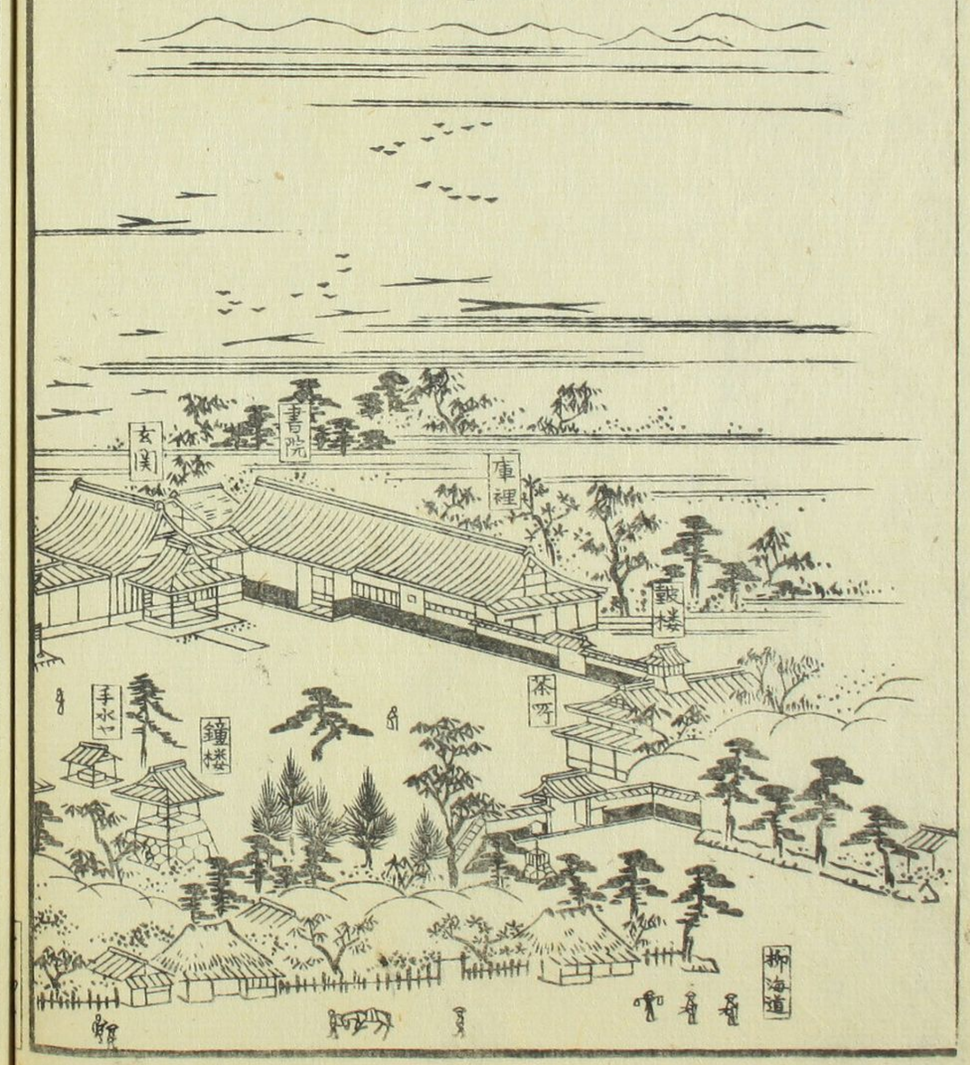
金甲山
銀象橋

明眼院
後園の
林泉
月亭
春日社

圓長寺

西條靈地梵
王城補棟雲
稍修理成常
樂開門容善
士易行傳法
度群生雪封
北嶽窓櫺敞
月出東山樓
閣明最是春
風楊柳道啼
鶯聲和誦經
聲

六橋



面足尊社 三蓋村小ありて俗に三蓋と称す 仲人元亀二年 諸物多く焼神社兵火にかゝらんと白一付初度小串に
次内信光弟宝の古面及び太刀一振ありて遠所小辺りに安置もべきなりとて
と建てくこれと名づけに日〻小串に信光を斬き
今に如ありまして幸との系絡さあるる 黒漆著

義経弓掛松 下田村にあり九郎判官ちうり 強ちと故く武こられけるに百町を
とも建しとつけられ 佐藤街道の馬塚 弥舎流傳
頗る壮麗にていと緑ハ垂り

神守驛 杉て里人わくつひ伝へしとう

憶感神社 国府にあり延喜神名式小海部郡憶感神社本國帳に正一位憶感名
神とあり見え文徳實録に仁寿三年六月丁卯尾張國大國霊神大御
張國従五位下憶感神等列於官社と又三代實録貞観七年十一月十七日甲午授尾
霊神憶感神従五位上 ○別當憶感山吉祥寺

日光川 諸桑村と宇治村の辺にあり頗る大河なり 佐藤街道ふハ大橋を架す
下流より百町 鹿伏兎観音寺 大海用寺 北流し

川の名乃日れひらさ〻ゆ〻えある岩のうみ茶 高橋廣道

諸鍬神社 諸桑村千手院境内ふあり延喜神名式小海部郡諸鍬神社本
國帳に従三位諸鍬天神とあり見えり同集説に按對馬國天諸
羽命神社同神倭歌所詠菓守の神也弘仁式河海抄袖中抄等守万木神と
諸者守之音便而蚕桑之神也とんえり

日置村 和名抄小海部郡日置とあり又民部省図帳小富岡明神有日
置之村去村二百歩地長保三年初奉官殿神霊豊國比羊也と

尺〻〻古
き地名之

若宮八幡社 国村ふあり祭神仁徳天皇別宮光明院これを掌 又社殿小十一面
観音と称す 古墳と揭ぐられいるとの地佛あるんか

宮法往昔ハ大社 今も大門名拾先あり 社まで三町
竹もあり〻社也 古松繚〻〻て雲と構ひ数百年の相を
標し 孫宜屋敷神子屋敷 字も残り神殿いと古
雅なる造りなれ 恵像せらる社伝小新勅公建
立なりと 俗小日亟の八幡と称して名こと古社なり

○例祭 正月十五日管弦 三年の豊凶を卜て五穀を入る箱と小豆粥の中へ〻を数加減
人組と云る者馬の塔と称し此人〻ハむ〻社事れ恵節なりと 国十六日永宝
出拝ひあり古きち矢弾子及び経也小と法人よんせ〻む 又社也れ也紅社
あり九月九日
湯立とうた

八幡山光明院常樂寺 国府ふあり別八幡の宮寺 末右大坊法彩紀之の創建なりとも伝ふ
本尊 某師の朱行基井の作 **寺寶 大般若経** 百帙老あり三紙つれく全〻
三〻る九十巻の奥書に建武五年戊寅七月十一日於尾州海西郡日置庄一色
常福寺州菴 右筆安養佛子覚忍と〻る 帙の表〻ふも 年号とのせ

諸桑村にて古船を堀出せる図

天保九年巳四月諸桑村にて川浚いをせしに船成ちとゆつる寺の裏にて古木のぬき樹に堀出せりしるばるくいぶうしくいと思ひ程ふくく堀ろうしくいと大きなる船を堀出せり此船往古の製なるく樟の丸木船なるゆ三ケ所つぎてかんぬきをもつくる先をさしまき船中より大刀のいと古尾古筋まき余呉形の除器多くあり夫より又其れより とかとかへし足きバ木偉像の半軀を堀出せり さて諸村ハ武内徳紙の神社

をいりて千年に及ぶ旧地なるとぞ
ふるもいまさら此山のあまてあり
ハけよう志づくし
船ならんゆ又八藤村古川村村ハりと川筋なるゆを埋めく今ハ村とぜ
よりうれバ此山まぜも破川筋
まそそこふあり
川船のいろ
ゆ地まあり
かりやあらん

られど今は舍利講式殘編一卷　梅尾明惠上人自筆なり文書なるを
もと略す　廿七日沙門高弁草之と有るは
原本なり　希代の御書なり

甘樂名神社　甘村井村なり本國帳に正一位甘樂名神と有る是なり
由乃伎神社　柚木村なり　延喜神名式に由乃伎神社本國帳に從
三位由乃伎天神　一作夜警　漆部氏之祖也　出自之人也蓋此命歟と見
謂湯支命者三見宿祢　之
えて風土記殘編に のせる湯貴首人等が祖神なるべし今
俗に神明と稱す

佐屋驛　東海道五十三驛の外にして伊勢桑名海
に渡るなり佐屋川とふ　面積は頗る繁昌の地にして旅館
客舍軒を並べ行人つゆ絶る事なし

相江天神社　内佐屋村なり本國帳に海部郡正四位下相江天神と有る
集説に戸田左佐屋村三社明神歟と見えて今三社の外に標石を建て碑面に
水鶏塚　同所　芭蕉の句及び内人秀川が文を彫る

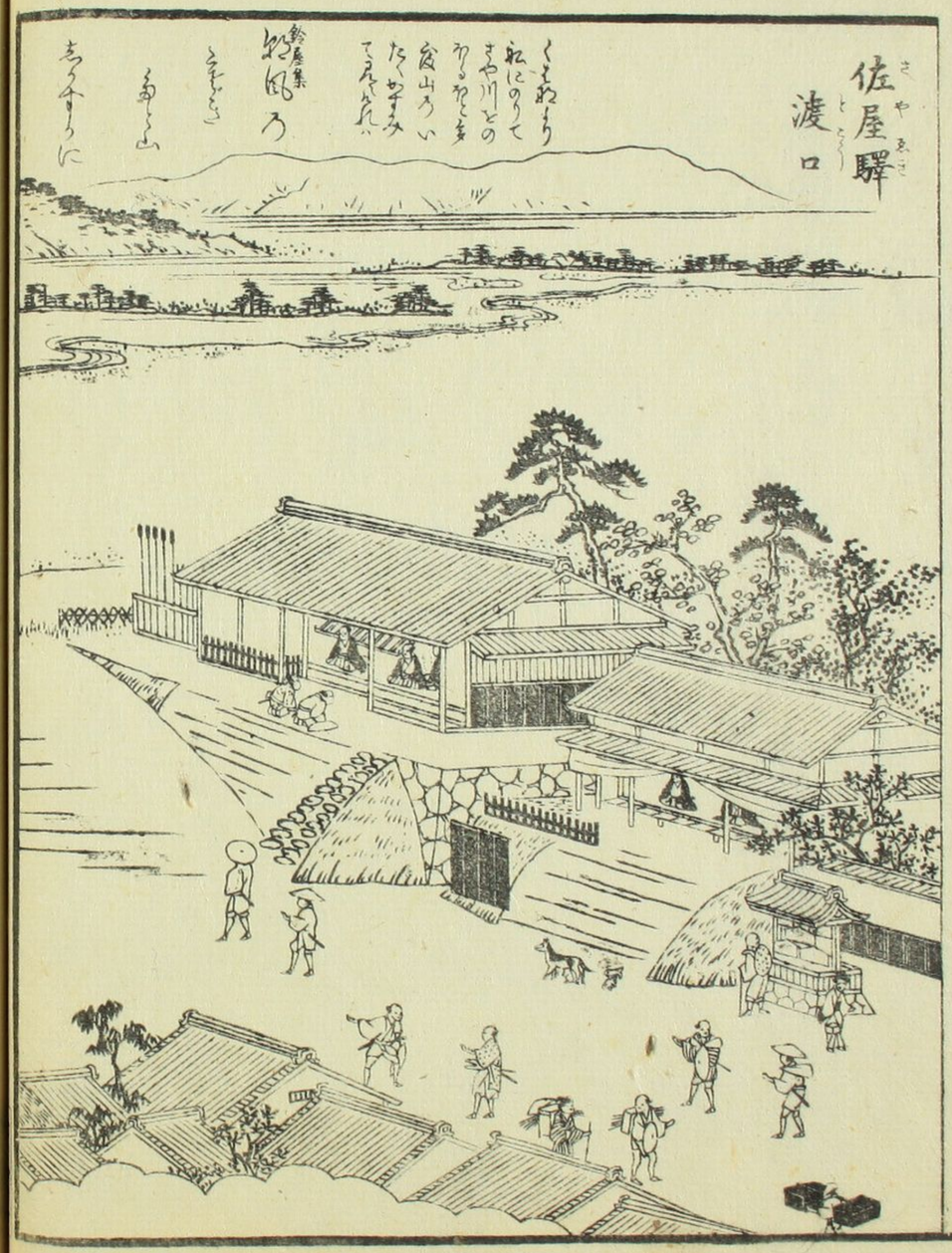
水鶏なくや人のうへ　佐屋泊　芭蕉

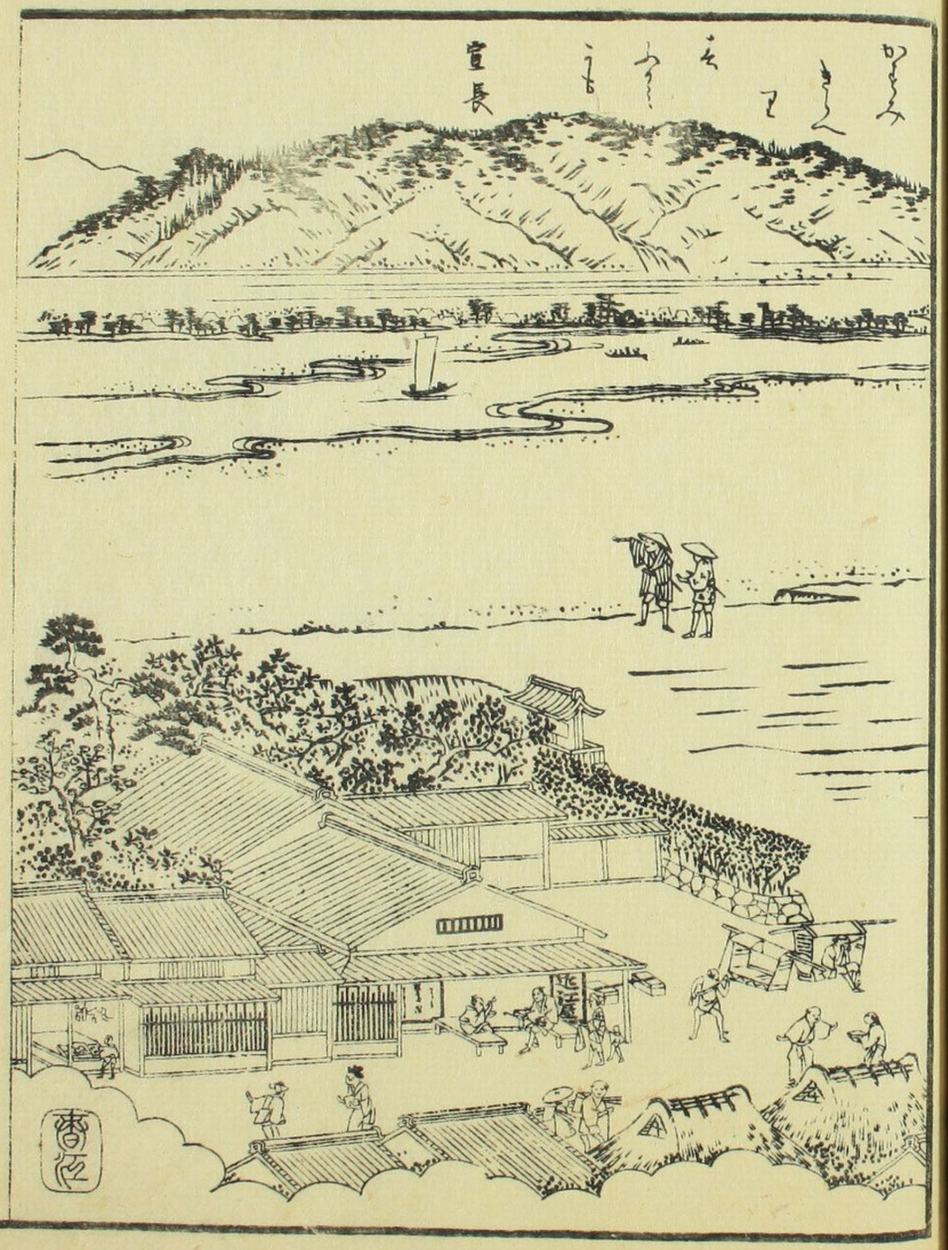
芭蕉翁は伊賀の産にして氏は松尾と稱す風雅を季吟翁に
学ばれ一生不仕の粗衣を東南西北の風に移し道遥すること三十餘
年元禄八の年皐月の初め師の別離を佐屋の宿に送り山岡
何某の亭に五日をとどめ水鶏の一声を枕にひびかせて此里
の風俗竹の蔭り麻の育に似たりと夫の中に寄潮宇林麿とかや等
亀志宜助力を加へ吟山施をとどめ墳を築き碑を建て後世に
銘曰

師や通夜たりんちと　情に勝れ姿なりけり
師やあまたの枕なりと　今玉味噌の名殘に
師や嬬恋邪魔なりと　教へて正風自在なり
師や寂に居て虚に居て　欲して世に風雅の名を
享保二十七年十五月十三日建碑　月空居士秀川

佐屋集に藏せる翁の真蹟の次に記されたる句
草枕
月も見や水鶏なくなる教の宿の上　素顔

佐屋川　同所の西なり大川とも
是木曽川の下流にして水源は信州に流れ
郡奈良井驛の鳥居嶺の奥なり　北は美濃国の
川くのこうなる合或は分流して伊勢の桑名の城下に
て海に入る凡そ六十里の長流にして川巾甚廣く水の浅く


佐屋驛
渡口


宣長

しきる側てをく川中に梶浦油浦の名あり棄名への紀浦三里余岸に大小九紀往来絶る事なく潛紳の言貴及び西国の諸侯方も皆此川を要路とひくわつ浦の七里の渡に出でける紀渡し

自適園遺稿　佐屋船中

水波　縹渺夕陽紅多少歸帆掛碧空　河上長雲飛欲盡　纖々初月有無中　伯就

くとる日れ法とひて乞紀漕い渡船る佐屋の川紀お村て

附て云て乞る布と云ゆうみ佐屋の河也の雪のむきん隆真大尼

戸田米　戸田村と云ふ九月上旬なり　國君（幸敬）を為ふ

苗字の内に村の名を入れ種米の事一部と寸又はたう麦もの雪の菜風味

附小物を作るに世に戸田米と称して名産なり　是も十一月上旬苗村の山田氏

ようり　國君へ

たてまつる

佐久間駿河守城址　蟹江町に在り丑寅の方にあり東西五十四間南北五十間

字して城の内と云ふ又南大手の南に三重堀のあり今田畝となる土俗

のわるくと法門ち口と称す　佐久間駿河守と称す　初め基次郎

武士にて苗城に居住せしが菅生（在番）に移る附記

ち十郎　後行ち母方の伯父なり　と云て苗城をもつむ去るに ち十郎

逆意を起し秀吉公（内密）に通ずるに及

びぬ公小牧甫尾が太閤記に洲川左近将監一益に

会まで小伊勢五郡と称し生涯の城を築て有しつ

宋因滅亡の後は極密の分として江州南郡おいて法

恐ち五千石と称して

称ふ南くの生涯の城を信雄に

楯小ぶ信雄ば勢州木造の城に洲川と富田平左衛門

迫亟と号す　面人を面して入手ひぬ洲川ばや城に

の城と調略し尾州小牧に城

ちびやう見むと謀て前田ち十郎方（此ち秀吉公）

忠義とうまれ（一廉恩賜の地方）ひとに法

りけとば郎ち田ぐうさで来る六月十六日の秋後海

城に入りて、佐々成政九鬼右馬允に告げ知らせ、
人の勢を合せ三千大船を連ねおけば、流川勢米ら城
江の城へ籠り入る。即一益を入城して柵をのり
やがて中村に出でにいる者れ出でざるなん
酒宴に入り放火せしかば思はずも三十日ばかり籠城
を形成す。家康は清洲の城よりけるが注進を
聞き、勢を捨て敵と戦へ急つく海江の城へ
押寄せ先陣の方を固め城中へ流川勢と入交りければ米は又
大船に取乗り浜砲軍をかくて城と二度三度れまでに敵
より柵と付け十九日は楼楼と上げ城中とんかろ
浜砲と打入射すれば火矢と四方より射入を
鉄砲の声とわげ浜砲と多の方より打ち初め夜の方へ
うち納りければ城より又はげ逆しく終夜のまさまに

城の内は城の脱げ出でし矢ぶるも玉薬も
しば流川扱ひ退うんと敵方に謀ひ乱れ
なくおりはいて即城を出し四月七日勢利木造
の城へ退けるが、ここ家は富田左近亟と人は城に
うづも富田云々は城に退ひ分ていうれ堅給
ん城へいえを入まけるとうう流川天満宮
地もあるとぬ境界ろろろ城を越前れ
て給ろろ豊臣秀吉譜小瀧川左近将監一益者紫
田滅亡之後潜居于越前秀吉惜其武名使居伊勢神戸一
益聞秀吉信雄締兵乃遣使于尾州蟹江城主前田與
十郎曰汝可盡忠于秀吉若然則恩禄不少矣前田聴
之於是一益與九鬼右馬允嘉隆乗舟入蟹江城　大
権現信雄共聞之即率兵往攻之酒井忠次榊原康政

蜻江川

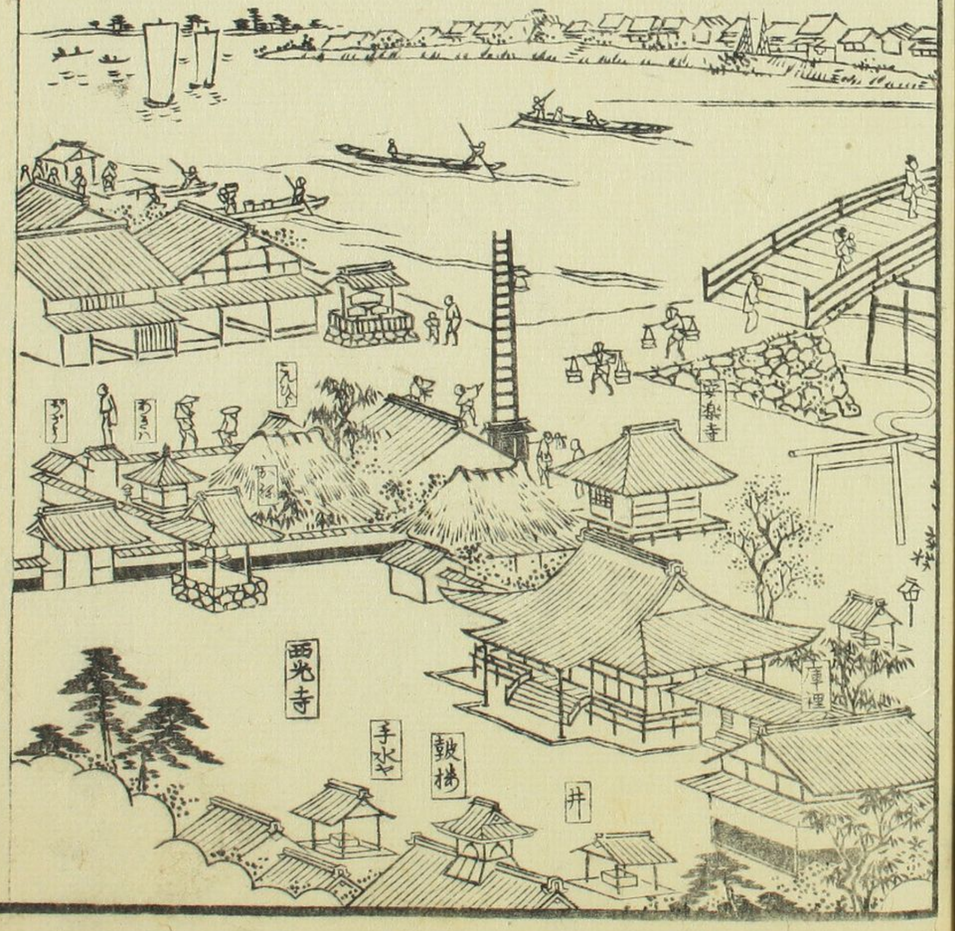
川の左右則塩口村
より農商千戸の
小都会を構上の故来
を結繹して有に
絶えざるべし漁商の
取る所の鰷ひ菜穀野
菜も朝夕に交易し
て豪農富商も亦
多く中ほど徐来
が家いとゝ重宗尚
所の堀を後河を信
江の後ゆるふゝり
ゆゝ重安城南に
宅地をかまへて居しが

天正の合戦に廢絶
第宅も灰燼とな
り全盛の面影は
唯遺物に残れる
の尹宗法八枝本尊
と称して後世に
る二百余年の今に
至りて枝連衡る
封の巨樹と

芳名曰く

蜻江の年々
人波とゝ
こゝとせふゝや
あらん 水香

英中



勵軍功一益力盡斬前田與十郎以降一益歸伊勢而恥之上京又逃於丹波烏秀吉聞蟹江之戰而欲援澁川發自大垣赴蟹江一益既去城故秀吉直歸京云

城南山西光寺 蟹江村にあり 東派京都本山末寺 **本尊** 阿彌陀の木像 慈覺大師作 **寺寶** 聖德太子十六歳木像 慈覺大師の作 地金泥 十字名号 親鸞聖人筆 六字名号 蓮如上人筆

蟹江川 橋江村本町所町の西を流る 大海入る 水源は新居家川にて西へ流れ 魚鼈貝鱗の類多く產する中に 鯉鮒を捕る產業にして 殊に鰻鱧蛤及び青海苔を 京都に送る日々に數々運送す中古より行きと 京都より帰りとに 必ず此川に架せる橋を渡る 又

牛頭天王社 須成村にあり 祭神素盞嗚尊 傍に八劔宮社あり 西北草薙劔 相殿に五神を祀る 紀記に曰 樂和奈望日命本に粗末盡 毎年六月十七日夜祇園の祭礼とつつがなし

蟹江山龍照院 同村にあり 高野宗 府下大須真福寺末 行基菩薩開山 草創の年紀詳ならず 昔は七堂伽藍十八の僧坊もありて巨刹なりしが 天正十二年六月の兵火に焼失し 今は只本堂と庫院の存せり 常樂寺常什也明應九年 庚申 六月十八日 施主一河弥敎白とあり

本尊 十一面観音 行基菩薩の作

鰐口 陸に尾州陸奥 富吉庄蟹江山

源氏島 西表村にあり 里老傳へて平治の乱に左馬頭義朝兵敗の者墓より和多那 此島に隠れ住きて 漁を業とせり 故に名付て 休息の島と云 故に名付て田畠なし

善太川 一に善光川と云 水源は西表村 大井村 吾大村の西を流る 大川の下にて海に注ぐ 西は界川 此川魚鼈多きが中に鯉鮒を多くの白魚 大蜆鱣多く 年中魚絶たゆる事なし 元来常に產する白魚は他邦 小形にして形大く美味なり 事跡合考に云 西國の川多く產する所の白魚は尾張名古屋の浦 伊勢尾張の海に多く白魚 下総の大海用と云 而に八ッ橋と大なり 扨此川 産れたる魚を多く又長を形四角なり 此魚は形四角なるが故に 鳥獸の嘴 長くして 後に大なり 古名なり

夕ゝれ雲に入日のうみ清く さらひ出る夢を書けり 伊勢 芙泉

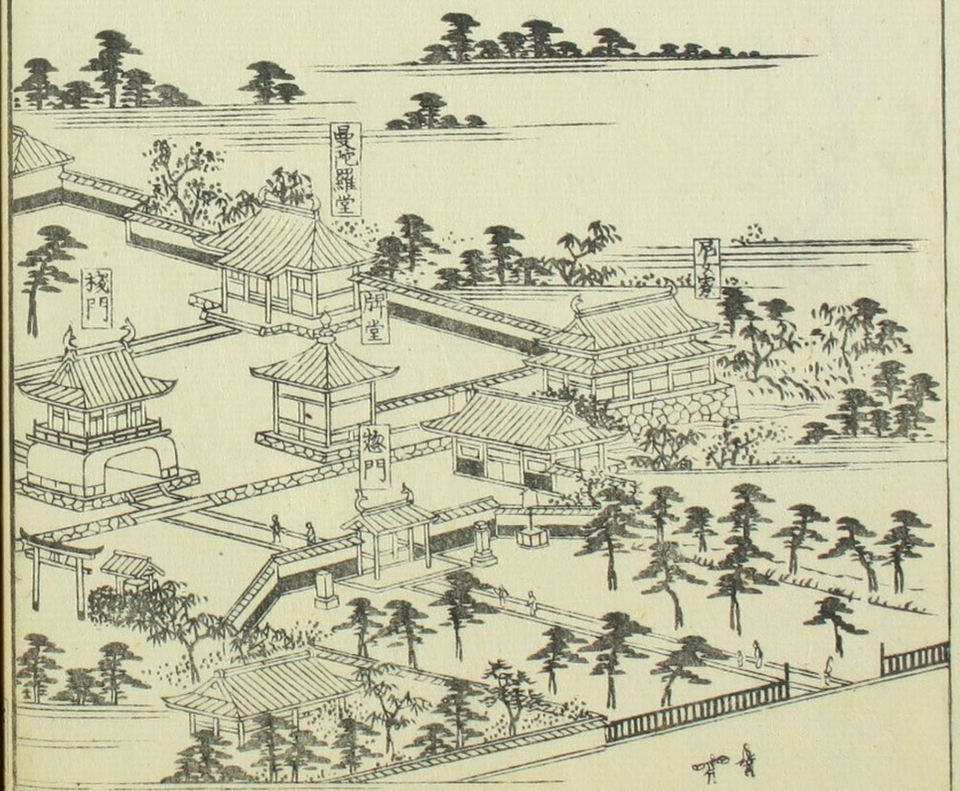
慈與山圓成律寺 中一色村にあり 浄土宗 関通派 新知恩院末 **尚** ちかとも 西臺山西方寺 と称す 浄土鎮西派の甲刹なり 開基年紀詳ならずといへども 後安永和尚の古碑あり 甚古さるものなり 安永年中に品誉上人再び法燈を挑げ殿宇資具 小和尚まで頗る完備 法嗣照誉上人まで 精力と

おしくも先典を修らる又ありしに寔通上人として浄業寺
修持戒堅固化他度衆の碩徳なりしが末法の濁世道
俗ともに名利にはしりて佛願祖意に背んことを深く
患ひ終に寺号を革めて律院となせしより四方の信仰篤
かりし持律の浄行今に儼然たり関通和尚の行業記
に云師一日衆に告て曰予西方寺を改めて如法の律場と
なし有識の大僧を請じて主席となさんと欲せば自ら
機分をはかりて堪んと思はん者は奉律随侍し宜
修行すべしとありければ一僧師に向て曰此寺今規則厳
にして浄業宗祖道を輝すに足ずとせば改めて律
院となさんことはいかなる御意にかと申せしに義
門意は自分を出離無縁のものならしめ仰で佛祖
となむを要とするにありぞやさるを持律しかしなし

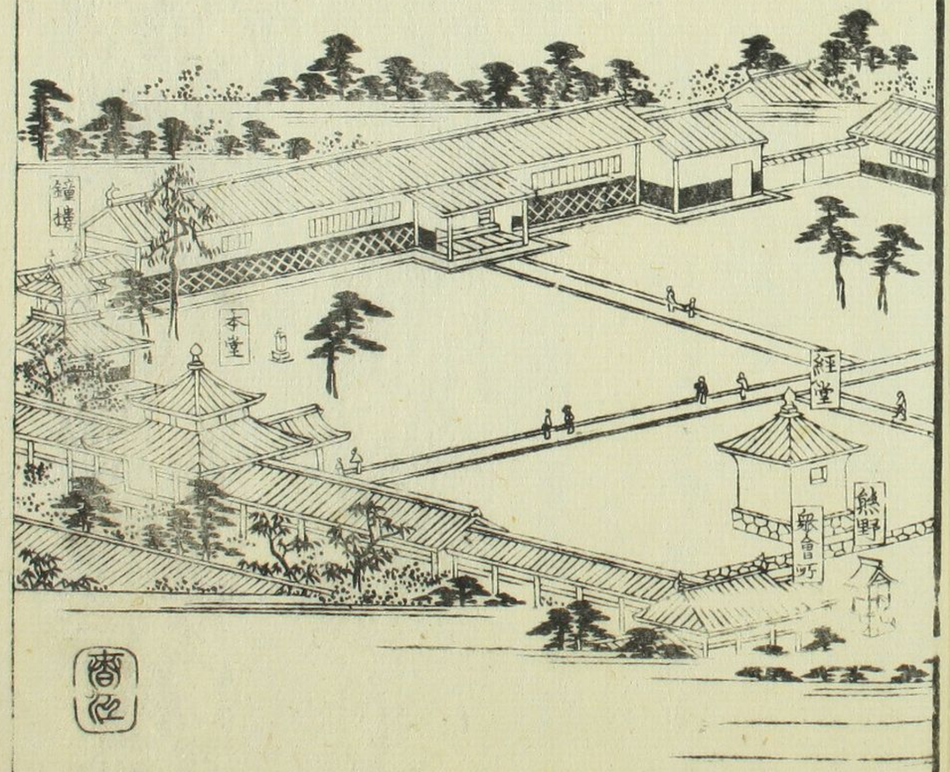
修するならば意楽もまた随て宗意にたがひやし侍らんはいかゞと
いやしく師答て曰それ毘尼住する所は法住し毘尼廃する所
は法廃すといへり又に照誉上人源末に当ちを予に附属
し浄法をして永く絶ざらしめ益を無窮にかゞやかさんと
に遺属しありし言れあるれば予毘尼を当寺に起して佛
法れ寿命とて永久ならしめんと欲するなり又明律の比
丘僧を請じて住持せしめバこれに親近しその風をしたひ
せんもの自ら四つの止作のことをもて慚愧を生じて正
見實行の門に入の因縁となるべきなりさればこそ弊風を
一轉し宗化さらに輝をますべし又持律をもて浄をかへば
意楽も随て宗意に背んといふことをれば各の意に依る
処なりその戒律に従事せん人なりとはいふに随きゆへは善
導大師のごとき護戒堅く謹慤にして南山讃して律

圓成律寺

寛通上人三十
三回忌
法名
お棺中納之持豊
吉水の法名
ふれを
ふらけ



其峯
高岳
寮
ふり
みち



制に越えりとすれども性自身を罪悪生死の凡夫となし
て偏に仏願を仰信し其余我にいふにぞへる称名正業を称
ふべきんやしかく意を用ひて志るも戒律を堅持し給ひたるその
自己の意楽よく此宗意にお適して称名勇進に便あるのみに
あらば僧宝軌範ありて法久しく住し正化もく絶るまじき
らむ子が微志なかにありと答られたり かくて師りて律院
開創のことを國廳に達し且本山にも力請せられぬ凡そ廳
に呼せられ事七十二ヶ度本山に往返せらるゝ事三十六廻享
保十八年におゐて元文元年に至るまで諸の労苦を經てやう
やく宿願をとげ西方寺を轉じて圓成律寺と名づけ兵
山と改めらる帰すと武府の敬首和上に啓してその肖像を迎
へて律院開祖の標準とせられしと云 ○本尊 阿弥陀の座像 曼陀羅堂
に大曼陀羅は往昔華洛の無塵居士是善にまうて岩倉山において九色の彩土を
感得ありし所謂北報恩寺の古澗和尚甚彩具をとして四幅の大曼陀羅と為せし

今は其國は男を徒一ケ所に住む縁ありて勢州山田の清雲院より譲り
とうけられて当寺に安置すと聞けり委しきことは行業記及び義山人の述作記等に出づ
あれども爰に省きぬ 故に其人の事跡は
海西郡大成村おなじ地に委しくおせり

大井神社 大井村にあり 本國帳に正四位下大井天神とあり 国集説に
穂保庄有大井村明神祠 蓋大与犬文字誤者歟とあり

津嶋里 古名を嶌眞里といふよし諸書に見えたり 今は津島村といふ 尾西第一の大邑にして
繁榮の町並五十餘街 商家農工軒を並べ万物一として足ざることなし
むかしのことはしらず 爰は佐屋路伊勢路への舟行日毎に絶ることなければ諸國の旅客至る
につどひて殷昌大なる湊なり 定に一都会といふべし 東鑑文治四年二月二日の條に
修理大夫家尾張國津島社板垣冠者不ㇾ辨二所當一之由事とみえ 其外
この地名とのせたるもの頗る多かれど 事繁ければ爰に減せり

津嶋渡 いにしへ伊勢より当所に渡る航路と 藤蔭集に尾張よりは 名不方角抄る
伊勢より尾張へ行は桑名より小舟にて津嶋の湊にいるなり 名所之略中 津湊
より下津の宮へ上りて熱田へ行ても東海道なり 津島より下津の宮四里之下津より 熱
田へ五里ときく 甚て附綱が津島出家記に萱津の宿を経て長太村に上り 伊勢の渡康頼
甲斐河泉神と称し 銘之長太村は桑名と四日市の間にあたるといへる津の湊より
此も太に至るまでの船路と津湊のことなりといへり 東より長太村より和に名くれ
布驗島にかゝり萱津に至し 執見とも津湊の湊となる 伊勢名所拾遺集に泉神とは庄保
の津湊より桑への方さきの舟にのり長太村へわたりそれより甲斐川として引制泉神とて
渡しまれたる道へおもむく

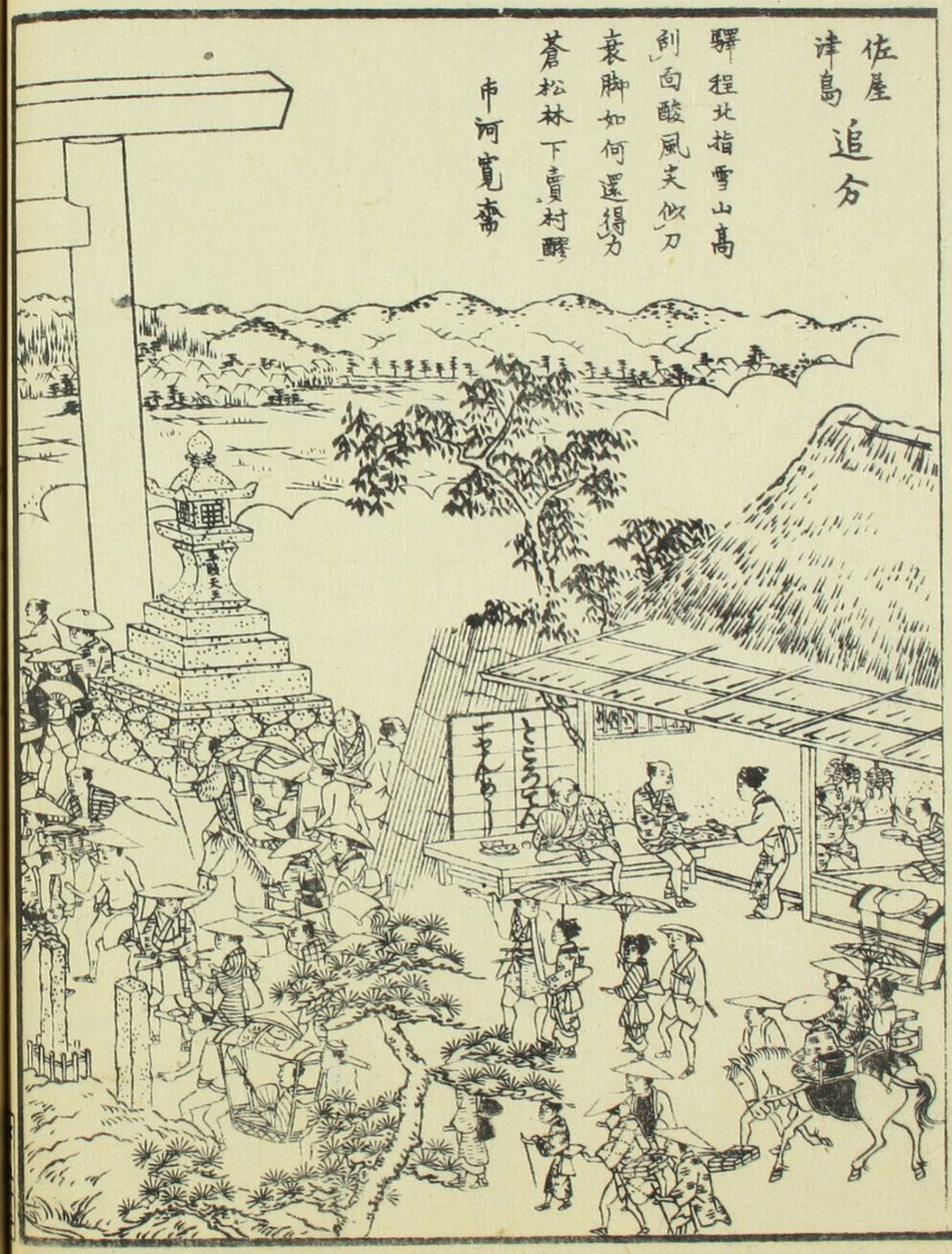
夫木抄 中勢 読人知
たふの白いつちへまさ母人の津湊の渡り風もきをきけ

同 法三位頼政
こゝをけ津島乃渡り治わりしいとまちあらんゆきよりか

佐屋
津島 追分

驛程北指雪山高
創面酸風吏似刀
衰脚如何還得力
蒼松林下賣村醪

市河寛齋



口
漕よる津島の浦よりかくしそめつる雪の高松　藤原基俊

名寄
伊勢人はひとつとげりつ津島の甲斐川さて泉地の家　鴨長明

和歌部類
津島ろ梓さし急ぐは吉にかる甲斐川さて泉地の家　西行法師

名所方記
七日市祭を立て津島の浦にとよみと来てかきはあしの花にまさしく
よりてはるかなる船も立てもれはれ芳のとさ葉に浮はかくまぎるゝ
かく柱はさくく靡はらしくもり越を梓の宋神にかくなれ
さしてゆくおもふからる梓みなれぬ浮も神はぬさ
ともきらきいは院法の思ふるりぬえ

正一位津島牛頭天王社

同村向島にあり延喜式本國帳に正一位津島牛頭天王と見えて元亀二年書写の本府宮本に正一位上と載す

當社は人皇七代孝靈天皇四十五年素戔嗚尊の和魂韓郷の島（書紀集解に韓郷の島は新羅国をいふとあり）より帰朝ましく先西海對馬に留り給ひ此所に年を経玉ひ其後欽明天皇元己未年此神當國に光臨したまふ（延元に社記を引て嵯峨帝の御宇社を建しおりしが弘仁年中の造営なるべしとあれどもこれは修造をいへるならむ）故に舊名の藤波里を改て津島と号せり（對馬と津島とは古訓同じて同じ名に用ひし）始は居守の地に鎮座ありしが（源合記に欽明天皇の御宇海部郡中島に来ると記せりといへば柳竹に

白幣あり神託に我は素戔嗚尊なり此國に生じて日本の悪鬼を守しかるべしとありよて社を建て崇奉る始く柳竹に現じて詫託したまひし所を居守とはいふなるべし）村上天皇の天暦二戊申年勅使ありて柏森の地に社を建給ひ後村上院の建徳元庚戌年正月正一位の神階を授られ日本總社（素尊は則皇國の本主なり故に日本總社と崇めしなり）と称しめ又亀山院の弘和元辛酉年の冬勅を奉じて大橋三河守定省社を造進せり（社傳諸説多し今参考に略抄して爰に挙ぐ）然ありしより以来除増の神威日々に著く永禄天正の頃織田信長公殊に當社を尊信ありて神領若干を附し宮殿を造営したまひしより本社末社及び神門銅尾に至るまで丹塗して善美をつくし荘麗なる事目を驚かせり（今天王社の神器に瓜の紋を付るは此時當社より与へらるとぞ）元来尊神は文武兼備の始祖神にましまして霊験多かる中に疫癘を除き瘟疹をまもりたまふ事普く世に知る所なればこそ其神徳を仰ぎ奉るの輩より寒暑といはず壮観

光釋奠諸人常に絶えず

○本社　素戔烏尊と称る神を家の説には今四神

小十七社なれども別素盞烏尊をもてはめ大己貴命左は八王子右に七名の神いまだ詳らかならずとりつくれど考へるべきばかりなり式の神名帳にみえる國王神社なんの名神と一致し愛神は古さまにあるべきなり國王神社なるべしなんと云る説も暗推の論なれば採るべからず

瑞籬　祭供殿　拜殿　御供所　樓門　南門　神廐　文庫

繪馬所　神庫　箭臺　仁寿の年号なり　鳥居　御井館　手水館

等なり

末社　居守社　本社の南一丁にあり　日靈貴命の幸魂なり　天王坐して素盞烏尊の幸魂左は疫神　右は大

湊の表小書せるなり　蘇民が裔孫なりと云る老女霊媒の託ありて表の中に居まるべし

里民系翻して表に居るべしとひとしく社伝かくなるべし

柏宮　本社の南にあり　素盞烏尊の奇魂なり　天暦二年神託ありて　一王

居守の地なり　爰につづく社のうしろに古柏樹一株あり　故に社号とせり

子社　本社の東にあり　奇稲田媛命と称す　八王子社　三女の神とまつる　大國社

祀る説にあるべしの時あり

本社の東にあり　大國靈神と祀る　若宮御前社　同所にあり　事代主命　蛇毒神社　同所にあり　八岐大

蛇の是なり

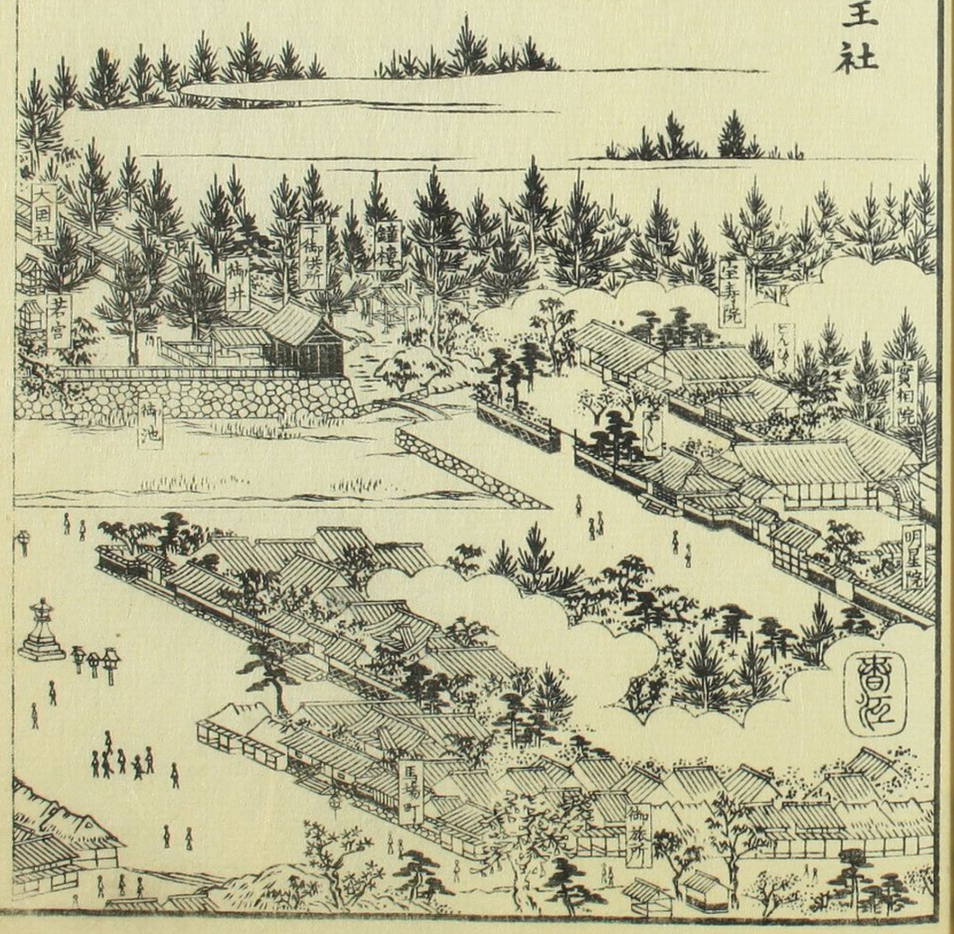
當下御前社　同所ふもとにあり　五十猛神と祀る　滝御前社　同所ふもとにあり　弥豆　王御

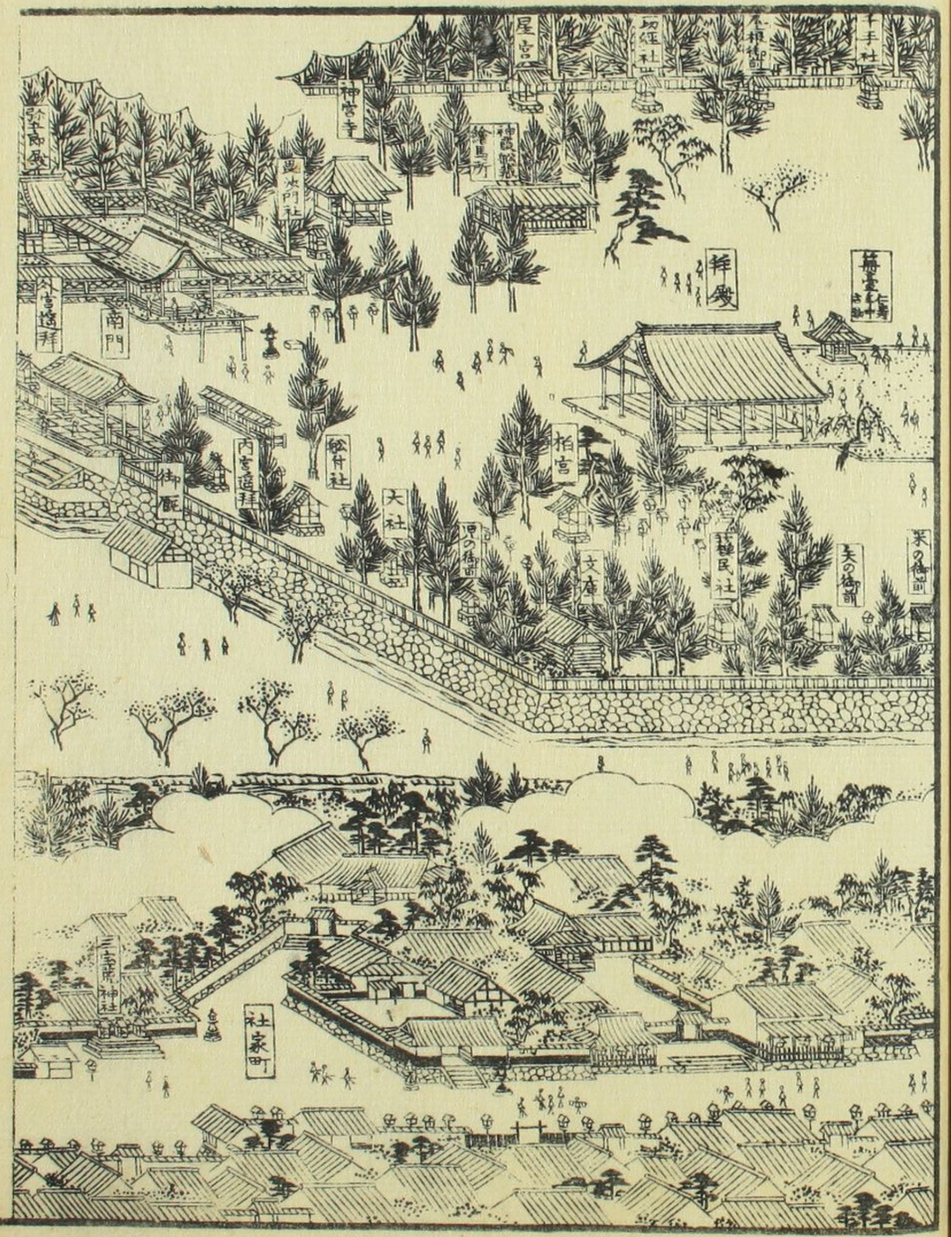
前社　同所ふもとにあり　秋　比咩神と祀る　熱田社　本社の東南ふもとにあり　日本武尊と祀る　米御前社　同所にあり　稲魂神と祀る　倉

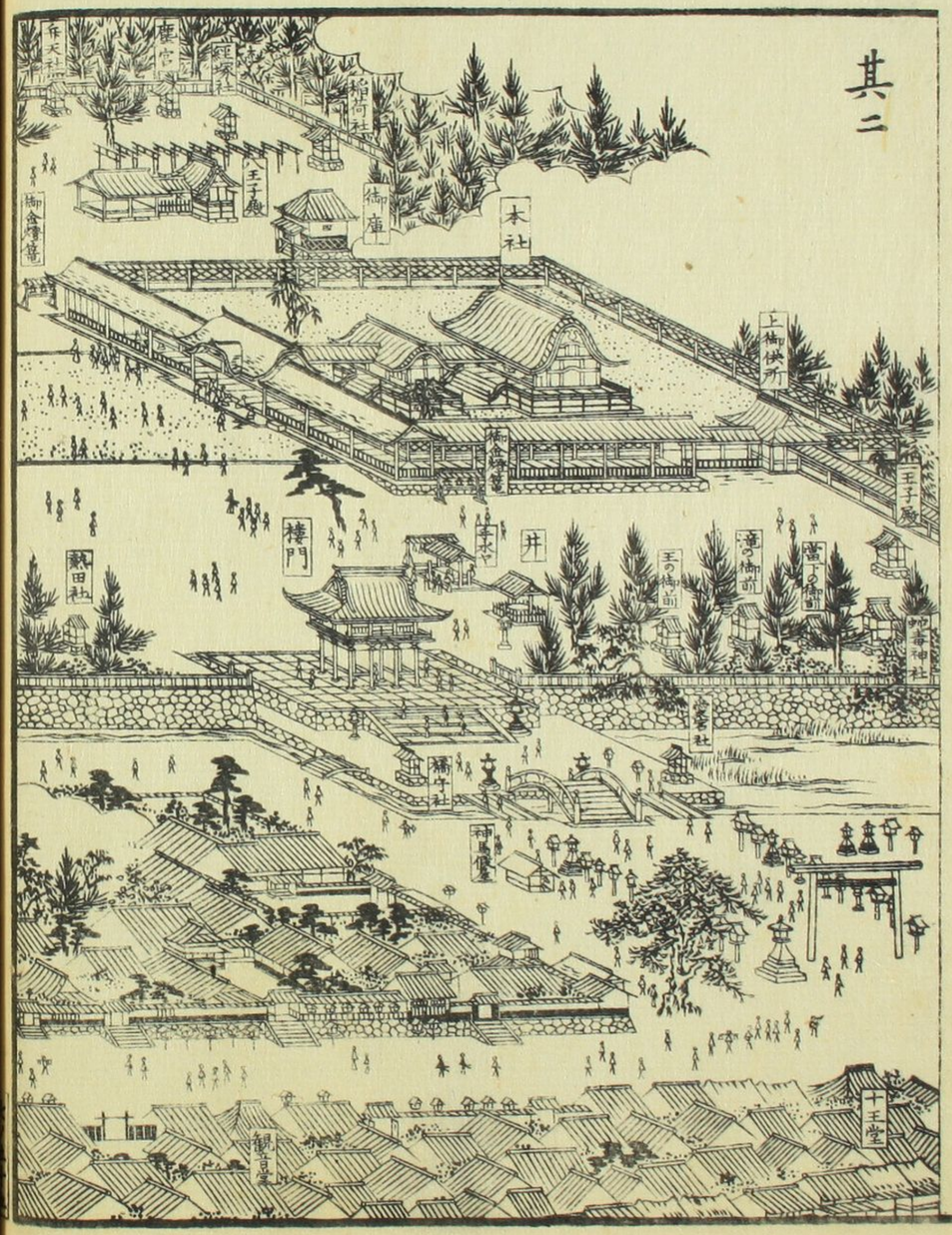
津島牛頭天王社

朱殿高臨舊海
津祥雲千載瑞
光新萬里方知
神化及階前不
斷各州人

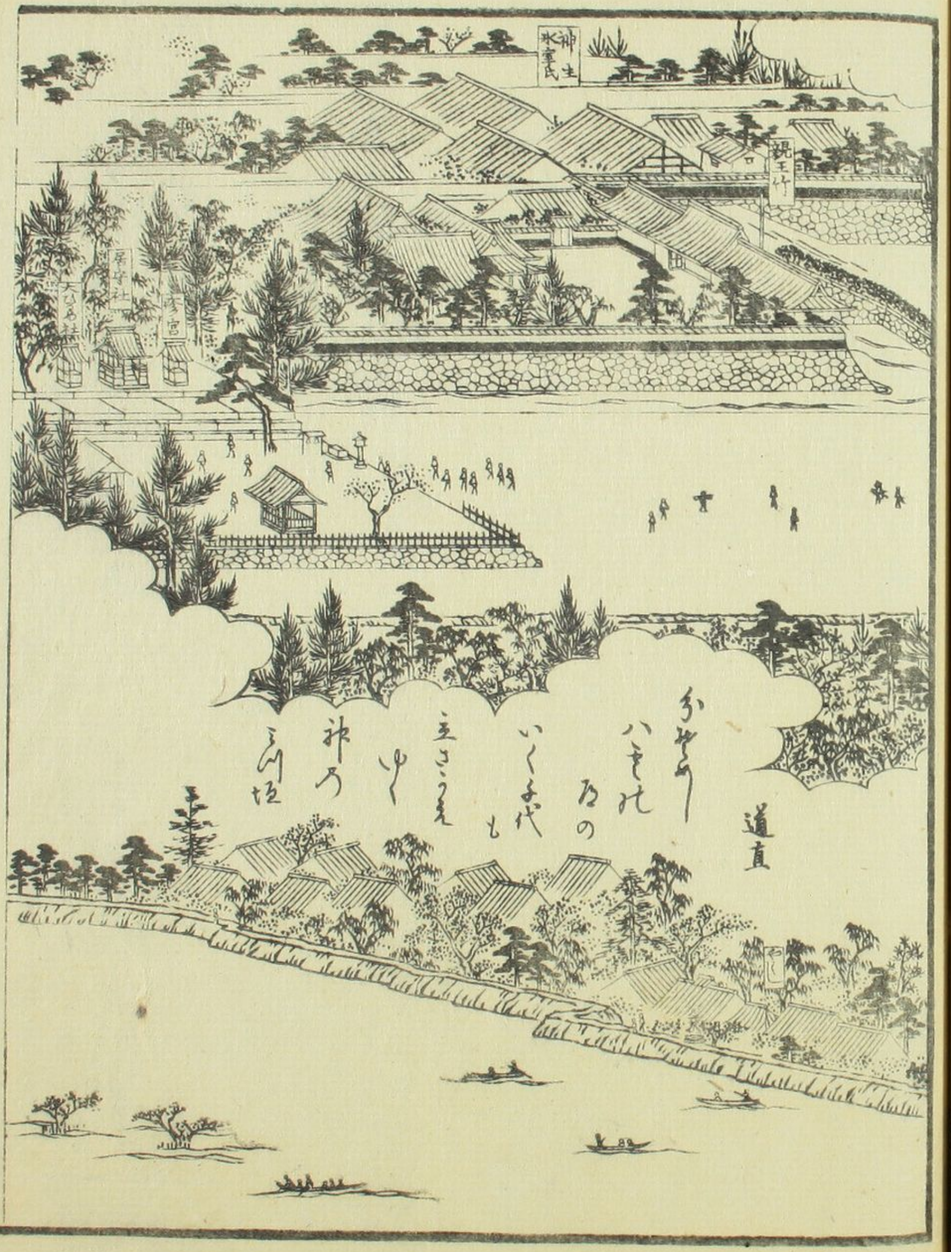
丹羽弘




千手社
地蔵社
屋台
神宮寺
鐘楼所
鹿島門社
八幡宮遥拝
南門
拝殿
拝殿
丙宮遥拝
御配
稲荷社
拝宮
大社
文庫
戸の御前
夫の御前
米の御前
社家町

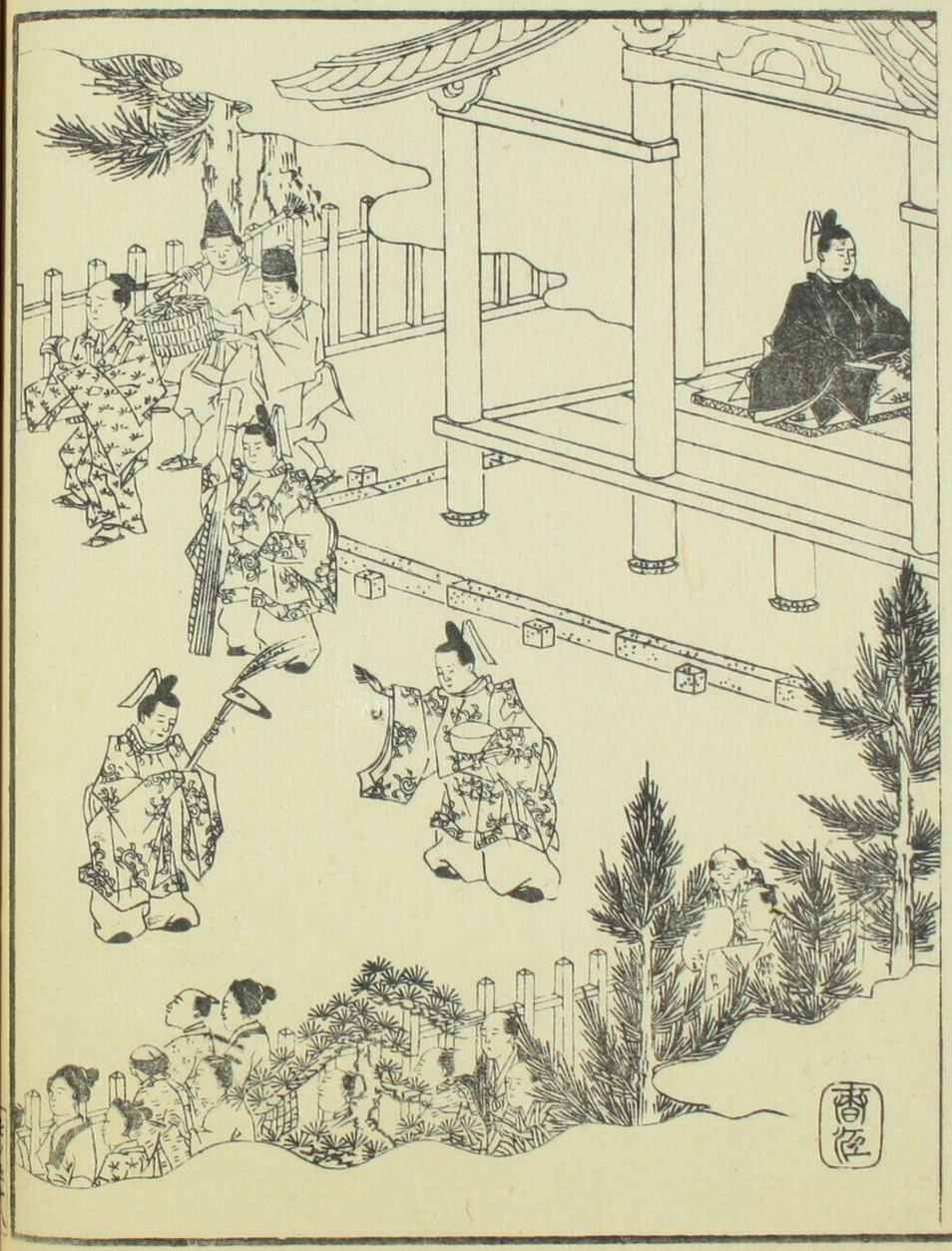

其二
稲荷社
王子殿
御庫
本社
上御供所
王子殿
樓門
井
戴田社
王の御前
當の御前
稲守社
十王堂
観音堂

其三
宗牧
東国紀行
神社の
木の弓
高き
清清
小
三ツ石
かしこき御
かてあかつ
奉り給ふ
豊長
君ハ神ぞ
きみをと
すまそ
人のおそや
世ふ
ら む


神生水
観音
道貞
ハきれ
乃の
いく代も
立さえ
ゆく
神の
高松

矢御前社 同所にあり大歳神を祀る 蘓民社 同所にあり蘓民将来を祀る公事根元に
天神まさにむかし武塔天神南海の女子をよばひにおはしけるに日くれて彼所に宿を
かりたまふに彼所に蘓民将来巨旦将来とて二人の者あり兄はまづしくて弟はたのしかりしが兄は貧しく
く君は富り家に天神宿をかりたまふに惜みてかさず次兄の蘓民よりかりたまへば
則かしまゐらせ粟がらを座として粟の飯をまゐらせけり八年を経て武塔天神八王子を
御子を引具してかの兄の蘓民が家にむかひたまひて一夜の宿をかりし報ひせんと
して蘓民が子孫に茅の輪をつくりてこしにつけよとのたまふ疫癘天下にはやりて人民死する事数を
しらず然れども蘓民が子孫はうつらず後武塔天神我は速須佐雄神なりとのたまひて今より
後疫癘天下にはやらん時は蘓民将来の子孫なりといひて茅の輪をつけば其災難をのが
れんとのたまひ 児御前社 同所にあり若王神を祀る 大社御前社 同所にあり大山咋神を祀る 船附御
なりとみえたり
前社 同所にあり津日神を祀る 内宮外宮遥拝 南門の内東西にあり 多度社 東門の内西の方に
あり天目一箇神を祀る 弥五郎殿社 本社の東西の方にあり武内宿祢を祀る浪合記に左大臣彦宮八分の従者数多と武内大臣と平定経と云
之 後村上院正平元年七月十三日義兵をあげて堀田弥五郎正泰これと
祀る時の人称して名付けて世に弥五郎殿といふよしいへり 星宮 本社の西にあり聖神と
天忍穂耳命を祀る 屋根御前社 同所にあり津日命を祀る 庭にあり 塵宮 本社の西にあり山神といふ 弁財
天社 同所にあり 稲荷社 同所にあり 経塚社 同所にあり 千手社 同所にあり 一切経社
同所にあり 毘沙門社 北にあり弥五郎殿の 橋守社 石橋の東にあり 愛宕社 同所にあり 神宮寺
弥五郎殿の北にあり慈覚大師の作の薬師及び十二神将を安ず 鐘楼 本社の北東にあり 銘に日尾張國海東郡津島牛頭天王鐘應永十年癸未十月廿七日願
主沙弥道叟大工沙弥道忍とみえたり
例祭 小朝拝神饌 正月元三に執行あり 蘓民祭 同四日社家より来る柿の枝をもて蘓民将来の立
符の串を作る俗にみくさ焼餅祭と称す 七種御粥調進 同七日朝 奉射 同十六日午刻神主社
式あり終りて東門において的を射る射終りて酒宴の式あり此時社家一人鯉の庖丁をつとむ
まさに拝殿にて酒宴の式あり 同十六日午刻神主社人拝殿に出座して酒宴の
郡三宅村天王の神主神供として当社へ献ずるに彼神主里童二人を美しく装ひ児と
称し神主も衣冠を着し供人をもまもらせてに出行列を神前にて神主を
奏し神事を執行す 御饗祭 同廿六日中刻 御戸開神事 同晦日 小の月は廿九日その夜漆部子宮廉式
一時上着のかり小神といへり 世にかくれなき神事にして内陣にて幣帛を以て神の正体と拝する事あり社壇には甑蛇形
まる掛つる孫社宰出仕のたとてありける大松明の大造なるを一束と大勢にて締運び拝殿の前にて此式あり神
事ありて夜 春縣神事 同中ノ午の日に祈年祭あり拝殿へ出座す大夫はさらを捧げて神楽を長
小社祝なり これは五穀の種をまき粒しるかりつノコヨノ稲の種をまきよしとくふ神宮は名木造りの獄
る大夫は五穀の種をまきしるかりて一ノコヨノ稲の種をまきよしとくふ神宮は名木造り
をもて田をかへ次に苗代をうちける三度此式終りて右馬大夫先に立て牛と名付し藁繩着
しる者は牛大夫の背に牛なりと云ふ大なる曲物をのせて引くなり乙若大夫是を持ち次に
右る大夫先に立て引くなり すめとさへ古き飛を持ち又竿をもてそれをかきならしまたと云ふるぬと行
同大夫共てめぐる式あり 大般若轉讀 二月十五日社僧実相院にて是を
餅供御調進 午刻神主神子社僧神前において涅槃会の式あり終りて廣前の
白洲にて緑合をうたふこれは良王君当所へ入り給ひし頃より始るよしいへり 闘雞神事 三月三日早朝蓮
神幸 五月五日辨の御膳等あり午刻に出社社宰 出仕社僧神輿の前にお子ども伽陀
文と偏讀すそれより東門へ神輿を移し奉り天王川の堤なる判語

春縣神事



五月五日

流鏑馬

浦張所小祢津あり行旅歳を経て寄船あり甚後浦張所の前にて流滴馬あり
按ずるに此ハ児の流滴馬にてあるべしや千年を経ても尚ほ祢津の河水に沐浴の条ハ一丁ホ
三所つ的を立てうくひ児を射て見るも昔のきまりさまたのもしさ
言あり紀元ハ元より九小是ぬとのうれども其時代の事と作りしものうれば是利時代とハ
児とのせしやうや又伴蕃蹊が沐浴条の記小彼程云の言葉を引て近年ハ条のさまかうた
きつるとあひ云ハ此五月の条と初るもて出月の条し異ひしハ大なる
わやま　船祭手斧始　六月朔日より是を云ハ山車　車楽ともに者ハ毫撥組ホ
ろろ　ところ江口の川流に車河　小車　面ゝ　左に拵る事く
やしられハ毎年　六日　船祭綱打　同十日　船祭のかき立と仕組かげをくる様と
ろう所浦となせり　事ゝ留を彼の嚴子あとるして張ハつう

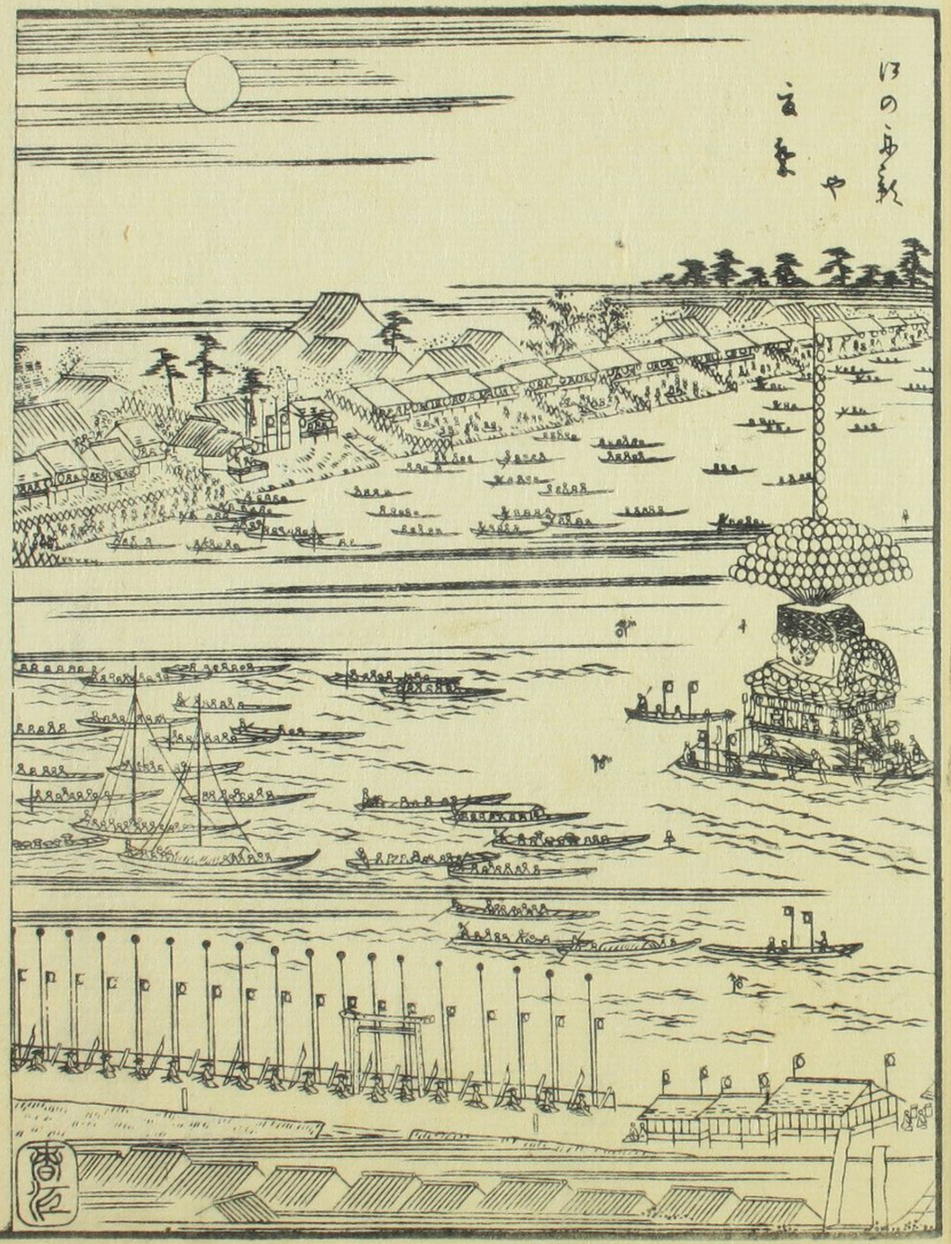
神葭苅神事　同十一日　社掌　船小条りて前ケ頃及び松名也ゝ刈り　神葭揃神
葭を苅

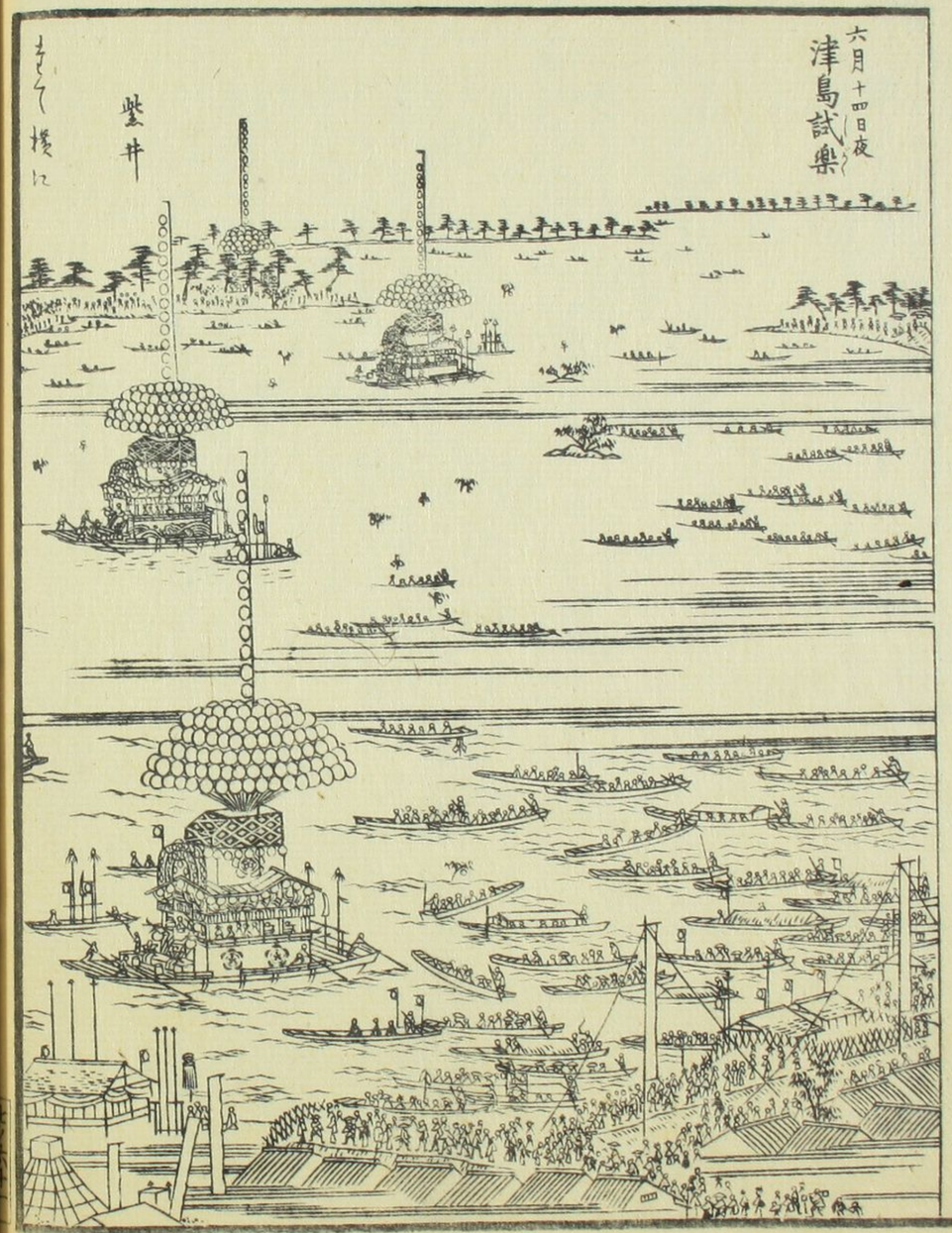
事　同十二日　車楽船割　同廿　船小祢ゝ　日表名古屋明海　南北　染田　今村　辻江戸田伝左等ら来
車楽船割

ゝ船と来にあつる町の人ゝ漕取りて車楽を早く来ると
ゝ船ゝ腰ゝにゝゝゝゝひいと無ある奇観ゝり川中ハ三白と　神輿飾并山揚
浮べ大鉾を建く水面を照せるさまゝゝ是れゝゝ
同十三日　船祭　船祭試楽　同十四日　祢ゝ小
南日の安全といの　又山車　てのゝ式ハゝ
前夜に祢供調進あるのゝゝり　ゝて天王川の北の堤小假屋と仮人　官吏の警固あり暮
古ッ代ふ面ハ小船と浮べく挑灯とつけるゝ祢と対ゝ面小ゝて小船の
及ゝ夫より数多の屋形船小暮　小幡と立陰もの毛物の傘とかざりて列ゝ
こい条附のゝこの条ゝて児船とゝり船小祢ゝ
河戸の江口より浮ゝ流り北堤の波瀾場の条に船ゝゝ沐浴留の楽と奏ゝ早つく
条の方へ船と出ゝ船ゝふ車河ゝ河戸ゝ河ゝて其船の俗ハ大船と二艘で結合せゝく其上ゝ
車楽とのまゝ車楽の上船ゝ巻せ条ふ白浦の大挑灯とゝさ羊のえにひつけ馬連
の灯くさゝつゝ祢ゝ此ハ菱屏風とゝるものとりつく色ゝゝゝ連挑灯の中に真船

と立り見とゝ此ゝ中船ゝハ児の楽あり　留古船のゝ　下船のゝ　車屋二人　祢ゝ　床
祇ゝ此ゝ車楽とゝ此ゝ地に来格ゝる船　年ハ　米の座　埴下　筏場　今市場　下構　等ゝ　柳ゝ祢条ハ
ゝ祢ゝ西海ゝ此ゝ留を吹ゝる幼年の祢ゝ船ゝ
と船ゝ
良親王の御子良王君祢ゝ白に恐ゝ
子と祢奉ゝんとゝる宮方の宰
ゝゝゝ大尻付ゝゝ
ゝゝゝ
数と者ゝる連の三百六十ゝ八日の数に
一月の日の数ゝ年中行事故実考小元条礼の車と船ゝて後ゝ天下戸一の世祝ゝ
本徳元ゝ俳諧初学抄ふまて祇ゝ
他ふるゝかくもうき大ふゝ
此市ハ前に走る牛刈の走ゝ
例ゝり車の俗ハ大概祢条の車ふ
代の古物ゝ　（条ゝ　ハ伝西西西伊村　赤星名祢の条に）ゝり又此車ふハ帛絹の附ゝる弄と拵ゝる者十人立並びて船の波瀾場ゝ
動ゝ祇我先ゝ永中（先必者に）ゝて
ハの車楽波瀾場ふ者ゝ祢俗の
ゝて上船ゝハ宵殿ゝの座俗のゝち
ゝ唐織大和物ゝ告倒に
ゝゝり後の方ゝハ者松ゝ
ゝり又児のゝ雛子ゝ
ゝ年ゝ車ゝ及び児ゝ
殿ゝて祢ゝ
すゝきて大山車ハゝ

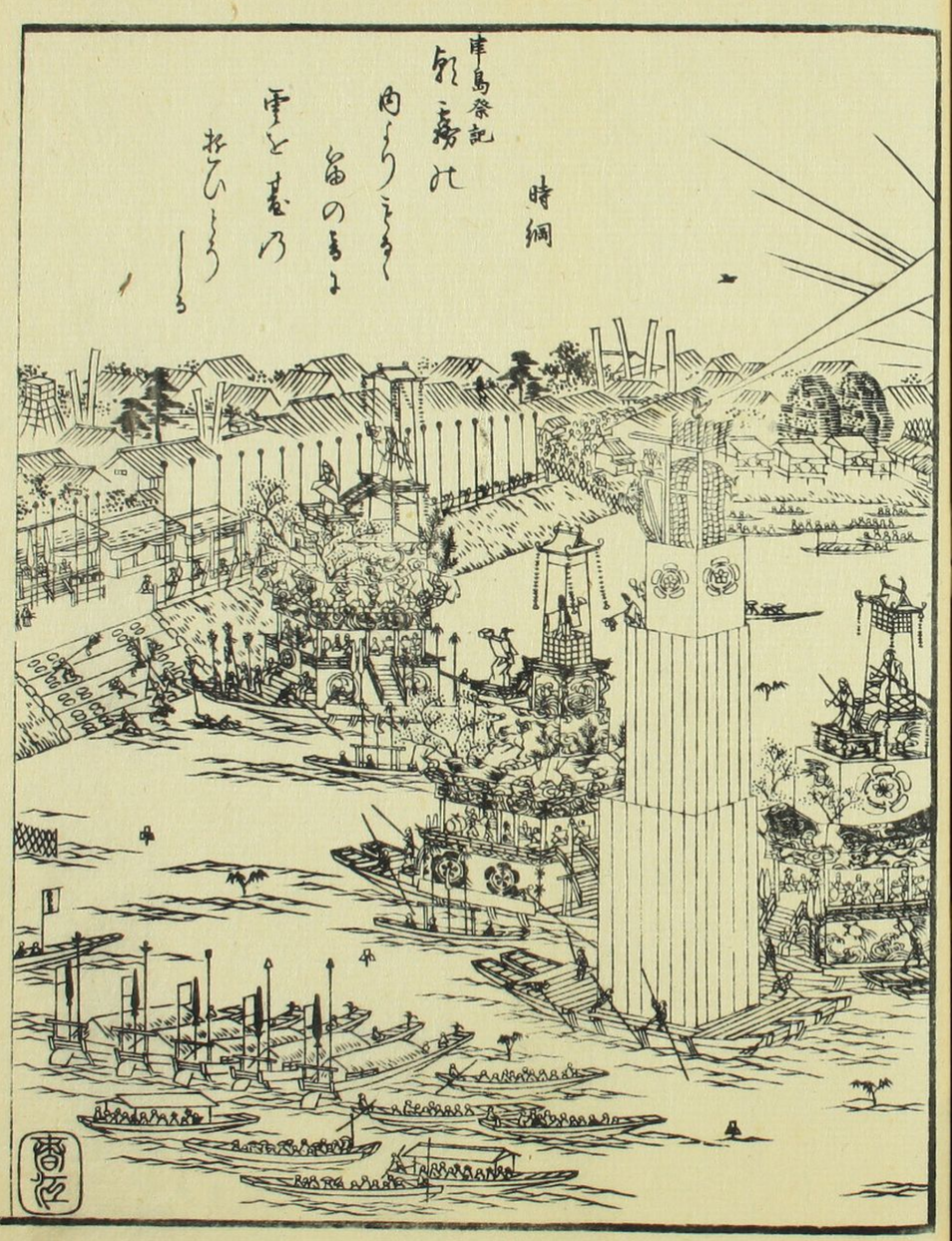
同朝祭　翌十五日　卯上刻条の船吾車ハ戸の江口　小松ひて市ハ此車楽の来ると祢ゝて
倒ゝり車の俗ハ大概祢条の車ふ　ゝ条に市ハの車楽と祢一ふ波す古
代の古物ゝ　（条ゝ　ハ伝西西西伊村　赤星名祢の条に）ゝ　ゝの船瀾場ゝ
動ゝ祇我先ゝ永中（先必者に）ゝて　ゝて祢ゝ又ハ幕ゝゝ
ハの車楽波瀾場ふ者ゝ祢俗の　ゝて天王（条ゝ）ゝ　甚後社家　（村牛）　ゝ古例ゝ　ゝて小市
ゝて上船ゝハ宵殿ゝの座俗のゝち　ゝ車ゝ山車ゝゝに漕ゝ祢車ゝの祢ゝ成ゝ更ゝ
ゝ唐織大和物ゝ告倒に　ゝ人形ゝ座ゝ中船ゝの座ゝ
ゝゝり後の方ゝハ者松ゝ　ゝゝ小神ゝ
ゝゝり又児のゝ雛子ゝ　ゝゝ古風ゝ　ゝ祢ゝ
ゝ年ゝ車ゝ及び児ゝ　ゝ天王（条ゝ）ゝ　ゝ夫ゝ
殿ゝて祢ゝ　ゝて上船ゝハ人形ゝ


ほの〻あけ
玄象


六月十四日夜
津島試樂
堅井
きた堤に

六月十五日

朝祭



すり湯花 神子舞 音羽 戸隠 指扇 欅く等く山の数ハ五輌なれども人形の数ハ多
多しこれ車ハくりかへしておのおの出るなりすべて笛を鼓の拍子に合せてかざるなり又山ごとに
又山ごとに異なる蛇形の作り物とかざる二段目の前の方にハ男女の人形あり是ハ手摩乳足
摩乳なり蛇形ハ八岐の大蛇なり山車車楽の十二輌ハむかしハ市によりて山車ごとおのおの中興勝手元
すさのをのみことの八岐の大蛇を退治し給ひしハ是一年の月の数また十二の末社縁起にも載たり又山車十二輌といふ事ハ
氏子の者ハ少しも怠ることなく常陸の鹿島の神宮社へ汐とまゐりてせうふを奉ることの
の日ハ川水出るハ大に悦びて是を
車汐武といふなり

神葭流神事

同十五日夜これを修行す前に志る
甚暑寄せし所にて是を奏るなりし式のごとく神秘なれバ諸人の拝するを許さず社中と
てもよく知る人なしと云ふ此夜ハ町毎に門戸を閉ぢて燈をけす諸人も恐れて出す天王川へ流し
廻るなり此もの吟味まで出る者あれバ門戸を閉ざす家あれバ
白紙を投入るに必ず其家凶事ありとて人々深く慎みて是を犯すことなし

供御調進

九月九日

秋縣祭

十一月中ノ丑日これを執行す 秋縣祭とハ大国小県の神なれバ故に異なり

て神宮の前へ至りて幣を作りて神主これ門前にこれを

遷 秋縣神 をして竃禊の神楽を奏して退出す

煤拂

十二月廿五日 祠官社家これを行ふ 神楽舎にして是を執り行ふ

暢園詩草 新川

両岸人家結二彩棚一 長川映帯晩涼清二 楼臺忽向二水中一

出ヅ 羅縠看従二水面一生ズ 紬幕飄レ風ニ何ゾ粲爛タル 燈毬得テ月ヲ自

分明ナリ 往還多ハ是閑東ノ客 短笛吹キ来テ暢二旅情一ヲ

一とせの月日のかずれ火にかけてみゆるやうなり 神主 氷室豊長

神領

千二百九十三石余 其外神主祠官等れ領知甚多し 天文九年十二月織田弾正忠信秀の沙

汰をうけて歴代武家の寄附多く文仁治年中本社遷宮の残編の古書からひて今に

きとめておいて古く これを略す

神主氷室氏

後醍醐天皇の皇孫尹良親王の御子正二位大納言良王君ときけて此地に

来り居住しける 其舎弟良新 氷室村を領せしかバ

嗣子なきにより小田井大学助定常が子をもつて連綿たり 後小松院の御宇応永年中に至り新中納言良王津島天王の神

氏を氷室と称しけるをもつて連綿たり 合せて永享七年十二月廿九日良王津島天王の神

主が家に浚清七名字の者共神楽を奏しける吉例までも用ひらるといへり 正月元日

雑煮と良王に奉りし伊勢路と羹とに添ゆる飯ハ半白米なり汁ものハ尾張大根の端切捨ハ

小鍋の中よりに大根の削りを入て

奉るといふ事清流流しおくなり

氷室氏の

神子方

堀田氏 真野氏 河村氏其外の社家あり

神官

堀田氏 服部氏 河村氏 其

神楽方

服部氏 林氏 平

其家ハ 藤又ハ古来の地士ニて皆由緒正しき旧家なり

社僧

實相院

本社の北東にあり開基の年紀詳ならず開山ハ定秀法印 薬師如来 宝暦元年の位牌あり

永禄年中僧覚政中興す○本尊薬師如来 春日作○霊宝 光明真言 紫衣

作 毘沙門天運慶作 種子曼陀羅 興教大師筆 九会曼陀羅 弘法大師筆

明星院

門前にあり

其外数品これを略す又信長公 信忠公 信雄公等諸家の證状数通あり

寶壽院

門前にあり

観音坊

小路にあり

並開基の年暦詳ならずといへども開山ハ元寿なり 寂照と号す 本尊薬師 座像 安阿弥作

小名中島ハ其旧地なり創建詳ならず○本尊薬師 安阿弥作

並開基の年紀詳ならず 文和二年僧実到 開基の年紀詳ならず

中興す○本尊不動明王 智証大師作

永正十二年僧祝法印の中興す

ここハ同郡三宅村にありて三興山廻向院観音坊といひしが慶長十三年 祝義法印此地へ移し

社僧の列に加へしより今に至る○本尊不動明王木仏 以臺座に銘あり其文にいふ略すに永

に応永六年己卯正月日金剛佛師良祐とみえたり○鎮守白山社境内にあり慶長年中

祝義法印創建せり○霊宝 薬師木仏恵心僧都作 阿字 弘法大師筆 信秀 信

長公 信忠公等の證状数通あり

社僧ハ四坊なり牛王山神宮寺と号して真言宗なりて今廃す 大須真福寺末なり 社僧ハ十

坊ありしが中世より次第に廃して今の如くなれり

昨木續集
門真神殿發修營次第琢磨功既成白象列檐裝氣
色翠簾扁鑣仰鮮明及宵燭炬玉牆畔追旦龍歟井
水声清潔洗心前誓拜安全祈世致精誠道昌畏感
八雲詠笛傳音知一曲名遥見境中林木聳遠来諸
客不迷程

昨木齋

西遊紀行別録
張陽十里大江南遥見朱樓照碧潭百丈長橋徒止
度千秋靈跡向西探牛頭廟貌知何守鶴背仙人来
易談但道神威驅厲鬼先王祀典有誰請

熊阪台洲

禪餘偶録
大古神陵水上浮要津誰復繫龍舟南朝帝子移軍
日北地公孫躍馬秋萬里風雲遥虎口千年社稷繁
牛頭千今河畔張燈處猶想英魂月下遊

僧瑞華

[illegible]八重九道のまろ〳〵しきのとの外

小沢蘆菴

つまとゝ[illegible]そ[illegible]の世に絶ぬあまの八重垣

萩原宗固

八重垣の秋代人のよ[illegible]

[illegible]居大平

おさ面る古代のたゝに云のこのすめていのる世の八重垣

度會重養

秋宮の[illegible]

[illegible]

津島八景　居森夜雨

あらくき振袁のうけの海さ[illegible]

健男

[illegible]

偽止水

彩色の[illegible]

隨緣紀行
[illegible]の橋跡　天王橋

亀翁

天王川のあ[illegible]法丁の西に架[illegible]板橋[illegible]六十八号中三号[illegible]
大橋[illegible]寛暦九年卯の[illegible]天王川と[illegible]四[illegible]橋の
跡に堤と樂て所
家主あり〳〵

宗長手記
[illegible]玉津島（主作る[illegible]）
[illegible]

堤の家流い志ける[illegible]

[illegible]

[illegible]

木下藤吉寛罪とのゝれ報
謀のゝち牛頭天王に糸詣の図

永禄六年の秋の末信長を
西京法ゝ和らんとて遣す
ゞ〳〵墨俣ゝ陣と取りて
小さ〻夜福富平左つ耐ゞ
今宵敵の面指狙矢耳〳〵ば
誰彼ゝ云ふ〻〻〻〻〻〻〻
評議の内長吉故ときぬ
斗り〻ゝの〻えけるとば秀吉を
大に怒りゝ〻ひ〻〻〻人と
捕へ〻〻〻寛恕とゝ〻〻〻ん
ゝハ〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
一旦り姫四孫左つ斗り
云豪家へ立寄ゝ〻〻〻〻
ゝ〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

面指と質ゝ〻〻〻〻〻〻
家に来ゝと那ゝ捕へ
表狙の所り見偏ゝ
牛頭天王れ加護ゝ
らんと〻〻〻〻〻〻〻
天王の陣宝家ゝ話
て梅礼〻〻て〻〻人
ゞ陣宝の靴機ゝ
一旦西京法陣ゝ陣
〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
狙委〻〻〻ハ小衆
有居ゞ太閤礼ゝ
ゞ〻〻〻〻〻

社家町

團扇出店

貞俊の後裔として代々尾張三河の守護たりしが俊地は右
大将頼朝さうり貞能が隠退の後ありて所領して足利
家天下となりてより大橋氏の所知は移りて文の世
より定高が孫定省が時は惣小良王君と称し中世ども行の
子細もうりしぐぞ

（後会記小云良王君の御父は生郷の尹良親王母は世良田右馬助政義の女うり上世玉寺尾の城にて誕生あり正平元年四月
寺尾より下世国三河の村落会の惣に入せり永享五年上世国にて行法小説さの人笛吹
ゆえに上杉方を地くさうり良王君は水戸の内もが城に入りの日五月十二日水戸が惣とまて本
多が石領金子の館に居て千久五郎金子うり我彼（近）ちうり日年の子世良田政義祇井
伊豆守貞綱等良王と尾張の海部郡弘法寺に入奉りて四家七名寺三河の兵士
ともに日七年十二月初日三河の国と打越んとて並会に初りの寺に就年一の宮伊
勢守小計り一族宗個小計り一族の惣うりの代所と通りて計れく孝吉にはやと大将祇義り良
宮方小祝見者の敵うりの代所と通りて計れく孝吉にはやと大将祇義り良
王君と元老けり桃井左衛門世良田政祝児玉左度小下並会の表の落うり計てかう城後百三
十騎人と付ちり日二日間の刻より安の刻まで防ぎ戦ふ三るの小良王君と十一騎の者も及び
宮方の宮方伯耆天世上田久世伯耆等会の山まで退けり世田表冷所
加治摩和小二十一騎計乱ぎり日三日桃井満昌会の山まで退けり世田表冷所
里の者も昨日並会の会戦の残りの小少ずやと雑子七八人のうち一人者くり中けるの故号小行の
毛ち村の者中くん昨日並会の町口の家に武士大勢迫入り猛切てい大切も伊勢守貞綱
アのとりふ法昌寺猛切さう者共の死骸小ぞと同雑子日武士共切腹の後家に火と掛りに
しう用到しく小ぞく並会の町中焼失しうり今後行者とも考度一文字の墓下石
の墓下墓未代の後ありさう考さの焼跡とさう濃き力の後会と珍ひすすとうて通りけり

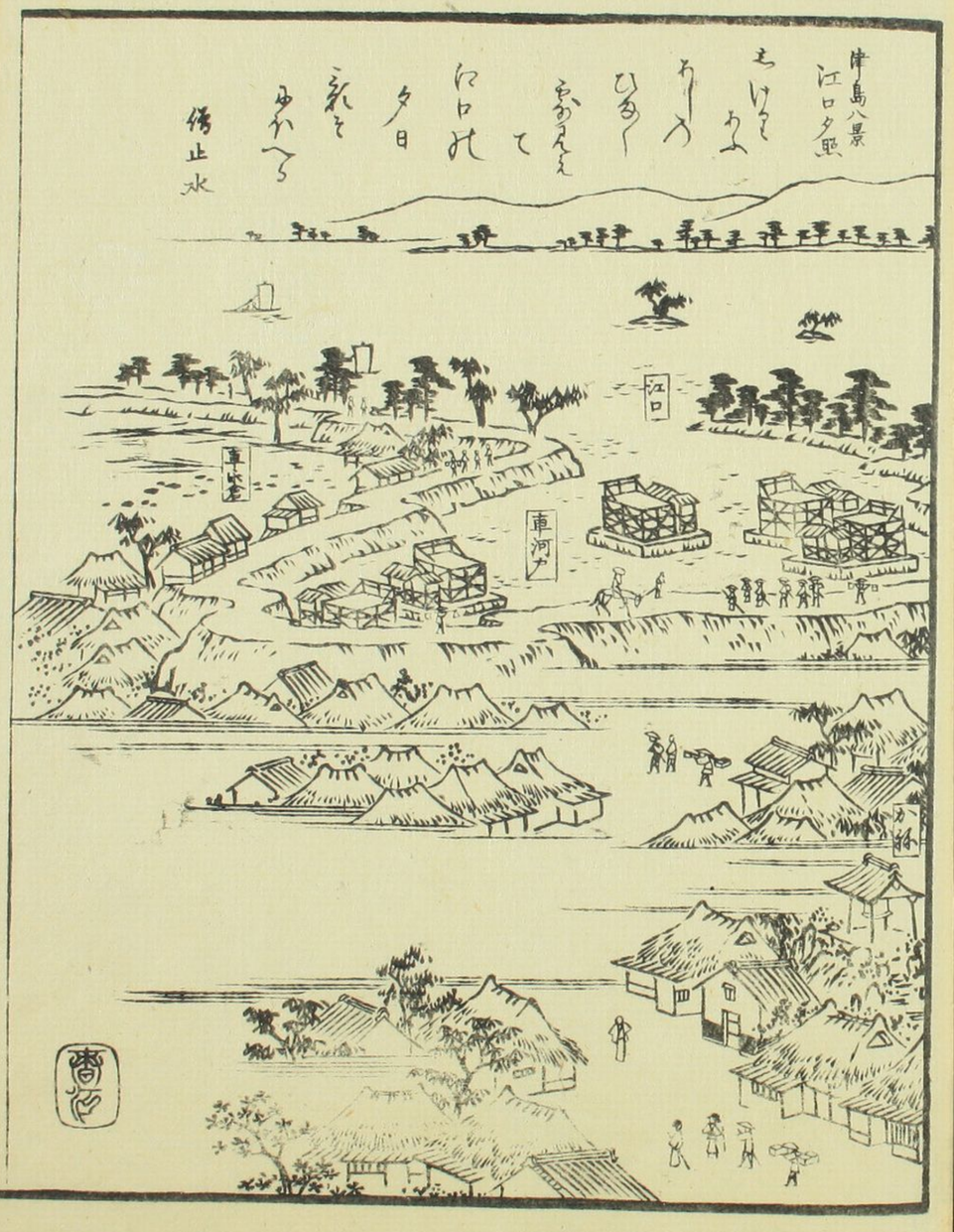
義さう第七さうり満昌是と守て良王君に告うり其やて大橋氏実先と名
て満昌に従う是平会うり並会に寄一討死の者ども吊りしむ一文字の墓下は世良田
敵一面の墓下は山川水元は協田さうも満昌定元小今て共に滅と源ちう政祝辞
世の初分と武家の墓に書られし定元は平谷の陣不小伊満昌は武士は武家並会の西に寺あり名は良三君
伊と教て葬る日日暮に定元は政義の孫一ちうと一分と少ちう清和と帰りふこうに
のさ者て武源会に考むしくしく如西然の士幸こう小蹴しくちうて天地も変ら
ず日五日三河の国宮殿村に郡り里人は人くと疑て入ぎうしく満昌祇文の所知城井郷に
沿て正行寺と称む正行寺は満昌が祝戒下妻が知人うり良王は石に四五日
所遅留ありて尾法法り多大橋定者が如野塚へ入りしと居こう

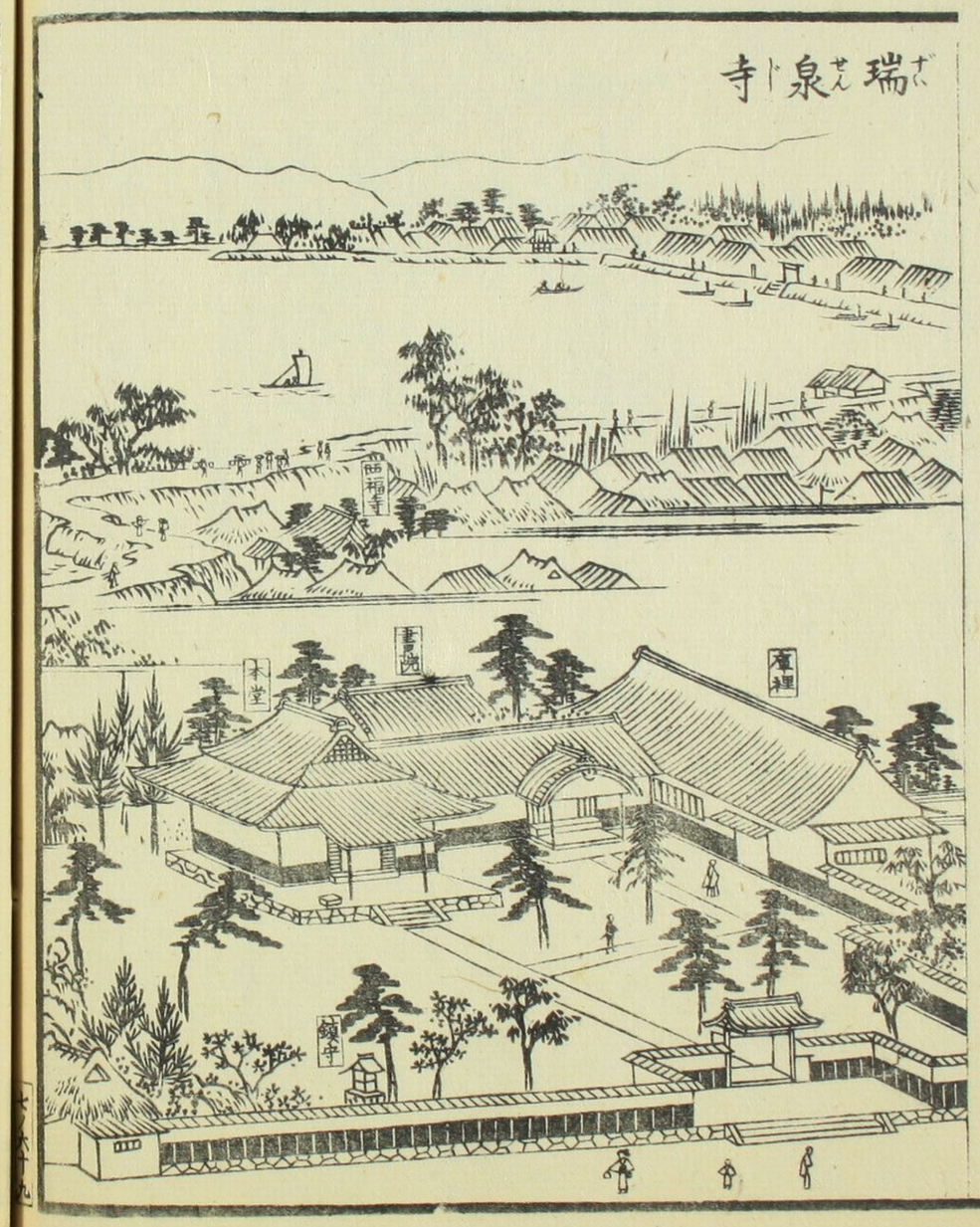
四家七黨　妙法院宗良親王の御子尹良親王と上世玉

小近（近）きる氏君は豊良親王が彼その誕生ありて母は親王井
伊分道政の女之延元元年尹良の御父宗良親王と道政と
君と崇め奉り豊河国小近（近）旗と揚て京都の将軍と桃
戦小尹良は大和国吉野におりて御元指の後正二位中納言
一品征夷大将軍右大将兵部卿親王ありうせり元中三年八
月八日源姓と変色ありう然と北田小田世良田桃井は其外
豊河三河の宮方与力の者共濃て桃井和泉守御貞濃とう

て吉野より上野山へ迎へ移し奉り供奉の人々は
大橋源紀大夫定元　岡本左近將監高家　山川氏紀少輔重祐
恒川左京大夫信矩　堀田尾張守正重　平野主水正
業忠　服部伊賀守宗純　治木右京亮重政　真田武部少輔道
資　光賀大膳亮為長　河村右擬守秀信　此七人と七名字〻略　此十一家と
吉野十一堂と官方の武士中也　已上浪合記ニ云ハく堀田四家七堂ハ家臣ニ成ル　浪子男良親
王に仕へ奉りて忠義を尽し武門又は初度養家〻〻良王君の虜囚
となりて武門又は舟戸ふなと浦に隠れ深林に籠る　西山派
鏡池山瑞泉寺　寺号光明寺深林に籠る
天王洲　今字と称す　小河と云ふ　開基の年紀詳ならず
地小移り寺の〻〻正二位大納言良王君御所奴地堀に入り
しかり自殺元年三月五日薨じ給ふ　法年七十八　と云ふ寺に葬り
彼君の遺骸瑞泉寺殿と云ふ　浪合記ニ曰ク延三年
三月五日天王の境内に社を建て清前大
自神と称す　初て寺号を号す
本尊　文六阿弥陀座像　鎮守　八幡宮
佛工春日作　秋葉

霊寶　良王君影像古画一幅并氏君の位牌　瑞泉寺殿
正二位亞相良王大居士明應元三月五日と有り
紫雲山菩提院西福寺　日所にあり時宗近江の番場宿蓮華寺末　堀田尾張守正重の六男
しかるに泉州に負和四年当寺と建立せり　堀田家代〻の位牌を納む
塔頭　十王堂　先年焼失
津島山妙延寺　今平場小竹日蓮宗甲州身延山久遠寺末　法華山高宗坊と云ふ
開祖〻今の宗に改り寺号も今の如くなり　本尊　法華三宝　寺内に清正の像を安置
永正年中延山十二世日意上人
紙四五人押入りと清正の書も多く祭り昌氏国に云ふ清正八幕と号し村上氏の旧
見て居ると彼紙見と称して
赤鬼の鬼面と称し衣服の入る葛籠の中に
曲り大きなる花おれば紙等敷きて
一里程ばかりて織立ち
清正一刀に切殺したるとて
て三河の鬼祭に云ふ
霊寶　清正真筆詩短冊
蓼老十五首　一去故園為有年　功振海内盡三邊
偶若山家風懷　昔義金玉今如塵　世倉君恩源似海
土御前社　日蓮にあり天王寺社の其一
天王御祖神と称す
寶池山休蓮院貞壽寺　日所にあり尼僧地方俗に尼寺と云ふ　浄土律中一色
村香成寺末　延享元年甲子秋の創建なり　開山ハ
関通和尚と所の行業記に云ふ尾張国法華宗律
俗所に投じて剃髪せり尾張と一宗安住せり
しかんして日所小一寺と開創したるに
所の母妙教及び侍尼等と後住せしめ


津島八景
江口夕照
江口
車屋
車河戸
傳止水


瑞泉寺
西福寺
書院
本堂
庫裡
鐘楼

後貞寿寺と号する是なり貞寿寺は建立の始末は隨聞往生記に見えて委しきぬ
云へしと云へども今は百躰堂と号して今の世に伴猪兵衛施主にて今の世に
本尊 阿弥陀の座像恵心僧都作 紀伊国名草郡院殿圓鑑寺盈
大居士なり又近きに前立阿弥陀の立像あり来せり 鎮守 熊野山證誠殿と称
誌に曰く当山の第山開通和尚の時に石燈と号して一株の一株と植られ
ありて石燈と号して一株と名づけられ委しくは事蹟の記文に
あらるるなり

玉泉の石燈の一株の沖やせん 芝山重豊卿

柱立て松とそうしかの浦波仏の法をひろめと思ふ斗よ 仝

琴静女の筆塚 境内にあり碑面の
刻書なし 詳の事

名のみ妻にしめてあのうらとなりにけん 黄中

藤浪山教津坊 同所小字高田にあり 開基は越後国の産にて山田左エ
門尉道顕と云人道世して比叡山に入り明阿闍梨の弟子となり
観音堂と称し人道世して比叡山に入り明阿闍梨の弟子となり
遍歴と改め又夢告坊と号し後に夢告坊の孫教善と称号して
の孫教善と称号して亦夢告坊と号し後に夢告坊と号し
刻し是も夢告坊の名を後に改め
正三年正月始めて今の宗に改む 本尊 阿弥陀の立像
て今の宗に改む

寶珠山興善寺 同所小字曹洞宗 紀伊国名草郡寺未永徳元年万山寿一和尚の
創建なり 大地震にて天正十三年の地震に諸堂破壊して後今

の地に移せり是も今は寺号のみにて未寺
山門の額に海東古禅林と号し一顆の梵刻なり 本尊 釈迦如来像 鎮守 天満宮

八敏社 詳の事紀洋に詳

九品山蓮華寺 小字中阿弥陀上人の水像あり
和年中阿弥陀上人の水像あり 津浦東の海堂なり時宗江州高野蓮華寺末貞
紀伊国名草郡の寺子良王の開基にて尾州津島の
居住なり 本尊 阿弥陀の立像
不動毘沙門の二像あり 詳の事紀洋に詳

補陀山常楽寺 小字高田にあり曹洞宗紀伊国名草郡の
尚の開基なり 本尊 阿弥陀の立像 塔頭 隔雲山高正寺 永禄元年中紀伊国名草郡
の作なり 塔頭 慈氏山菩提寺 永禄元年中紀伊国名草郡
慈氏町にあり日蓮宗越後国蒲原郡寺院寺末なり 大檀越所
高野山通貞文政二年一乗坊の名日蓮宗紀伊国名草郡寺院寺末なり 大檀越所
紀伊国名草郡の名門の女なり通貞強盗に殺され八幡宮に詣て男子
と称せり利貞紀伊国名草郡の人なり通貞の妻と
時中又の名に法華経と決断せり 強盗に殺され八幡宮に詣て男子
名を一作麿と称し中嘉海村の二郎と賜ふ後建保七年七月名序紀義遠 勅の
眷あり小矢部八郎義仲族なり 詳の事紀洋に詳
と忽大流星あり雷の如く響き中に鬼あり
きれり旧里に帰りと得られ義に
づく正和元年十二月十一日寂年七十二
紀三年貞盛が末孫山寺と南北にあり今は寺号なし

貞壽寺

俗に尼寺とも

信宣詠

世とともに
ゆるるう
たてる
とゝのへ
つびらを
西の門おも

本尊

法華寺

鎮守

三十番神

成信坊

三宝院

[illegible]

名産白雪粧

[illegible]

名産麩

[illegible]

市神社

[illegible]

本尊

阿弥陀の[illegible]

霊寶

[illegible]

塔頭

金光寺

あらざ店

日本無類 あらざや
本家名物 ほ三帝

亀伯山大龍寺　茶の産にあり浮古志西山派京都光明寺末林寺云云

征夷大将軍正二位中納言尹良親王のゝめ小永享年中沙子良王君の創建のふ所なりて則彼君の御法号大龍寺殿とゝ寺号せり　永享八年六月十九日十一黨の者社を焼き天王の境内若宮社を焼き　信濃宮伝小次郎　伊奈四郎　応永三十一年八月宮ハ三河国足助へ移られ小次郎に対へ奈良方ハ八十餘騎にて流浪　伊奈ハ侍従を並会の山れ麓大河内にて敵大勢にて世良田大炊介義秋を我ひ仮田伊奈と始十三人討れ伊子良王を二心なき武士ハ悉く討て大河内の土豪へ入せ伊勢国へ送り入れ世良ひ田ハ三河国へ送り入れ世良ひ田ハ三河国へ送り入れ世良ひ田ハ三河

按るに淀川西北なる古松川を佐保川の堵とせり弘仁の渡うれば其地と古訳の
説と違ていやまちるるんを志ばく時緩流ようて松川より配後考を俟川

小松漕る淀の渡りの白たに山おろし今吹来りり　中尾義稲

海西郡

當郡ハ南北せく東西狭くして東ハ海東郡ハ隣り北ハ中島郡
小椋川西ハ木曽川と隔て濃州の海西郡ハ美濃国ハ海西
伊勢に連まり天正年中秀吉公一郡ところふらて川の西
うるとを天満の海西郡と東と西郡と定られしぶ海郡
近く開発して今ハ大小凡百村ハ及て西郡多くハ新墾れ
地ゆて豪富の農民甚多く社ハ富饒の地うりされど神
社仏閣名所古蹟の挙るすべきものいと稀うり

普陀山圓通寺

上東川村ハ曹洞宗長伏村一心寺末　寛永十一年伊丹昌の創建うり
基多く後ハ沈る縁うて赤見村より出現一丈五尺の観音像を安置ふ
毎夜土中ハ浅緑の光を放ちり村民これをあやしみ日と祈てそれば数十

本尊

十一面観音　うて霊験

の古れかさまりり鎌て破りけるハ黒くて西うり氏子像を作りうて
凡工の作るるも及ばれば背ハ白んと紅淡ハ面ハ雪山の玄昌和尚ふれと
色ひ美く則なを
小女色せ〜〜うり

宇太志の神社

特多須村ハ今白鷺大明神と称す延喜式ハ宇多志
神社本國帳に従三位宇太志天神又元慶二年ハ書写の玉府宮
有餘　天武天皇元年壬申十二月始建宮殿ハ来及寛治二年戊辰加再復造と
民部省図帳ハ國津宇多志明神神田三十八束
例祭　八月十五日　祠官　杉原氏

石塚

田村ハ田畠の中に巨石数多うり接ハ上古巌窟に穴居ロ
ハ石塚と称ふ石塚と称ふ墳墓塚墓の面影ハ見えず

霊松山西青寺

法ケ洲村にあり浄土宗寺名栗生光明寺末永禄四年横井
時朝の建立し附法名西青寺義兵京忠と号ハ山ハ小寺
号と　本尊　阿弥陀如来　鎮守　富士権現社ハ木の実松ハ其丈姫にうく四方を垣ひけ
ばせるを実松山の号ハ　ば伐ロうり血流れ仙人同絶

給父渡

給父村ハ木曽川の下流ハて川中三町余之
西ハ則濃州秋江村うれば往に秋江の渡ふ之り

桂ハ古来名所ハ流るる　月庵

百合根

茂ケ洲村より出るの名産し形甚大きく色雪白ハて千年を
苗村ハ一品とれ東照公運送し槽伸家ハ也と浄業聚と
世に玉食とうるハ玄にこれ等れるものとうるなり

水鶏峠佐倉の渡りに
あしにまじる人の嵐壹
小船とさしてのれ
ともへのまへ竿さゝを
して渡り流と棲まり
あく水をゆく大河小
さうのゆる
青嵐
砂ちかと一面くの
穂麦うる
盛青
夕月のあれ中を
芝茶うる
騏六

太宇志の神社

一ヶ所とそうれん玉若と世のさとにけるうらうして八幡宮の社
うるまていふも大いうう中松と下小田井の里人道出さうう玉鬼
君うておうくうう　　竹原郡まうう
そのうしと伝へきくけていうう　　又のうしうるりき
と二ういおうセうう　　うう　　れうしてきたる　　
郡ひうぬまてうのうと京にうみてうしうるれうまうう
るふいとはうう　　てんまひうきまうう
ううううおもふまう

横井掃部助時永　赤目村の人し　其先小條相模次郎時行ハお撰ち
高時れ二男し元弘年中　後醍醐天皇高時と誅罰し
ちふうう時行流浪してうしうしまは赦免せうまうく官軍　陸奥大尾
小原ちう甚子平太郎時満尾州塩江村ふ蟄居しまう
平ち郎時任尾知郡横井村ふ移住し始く横井氏と称ち
ちう子時永海西郡と住して赤目ふ塩と業きて居住ち夫う
して子孫各海東海西郡の諸邑とうちう住知ち今
ち住ち藩の横井氏連綿として赤目と住ち

光耀寺　落伏村ふあり宗派知多郡大北光明寺末明治三年ふ光耀寺と改ち
　　正坊の創建うう光正坊と称ち住ち基ちつと称して邑士さんしう教ち上
人清須と称ち住ち化度ふ遇ひく治くその法と伝ひ遂ふ上人ふ帰ひ雑餐
して光正坊と号ちすうう上人うう徒ち上人の画像及び朱筆蟬乃鞍を
と模うう国うう今ふ所で内主ふ所の付ハ　本尊阿弥陀如来
諸うう茅乃ふ送迎と称ち

國音山一心寺　口村ふあり曹洞宗三河正眼寺末明治九年横井時永海西
　　廃ち寺と称永十七年横井時安再ち興ち住ち安報繁の住
自ち一心飛筆居士と号ふ住ち今の寺男ふ改む

早尾渡　早尾村ふあり木ち川の下流うて佐屋の渡しのうう渡ち田ちうう
　　伝ち便船三艘ふ櫓郎の給米若干と附ち すこハ徒永法年ハ
ちうて年経ち村存ち徒永法年ハ
あ年ハ　ハ金と称ち　人うう

葛城古渡　葛木村ふあり　沙人うう
ハ葛城ふうう夫うう古佐屋ち渡てうきふ勢州の楽名ち
ううてうづに名のく称ち　清須ふ玉うしで今ハ面新うう

蘭通上人傳　大成村の義子て又横井氏母ハ小泉氏と　元禄九年の佛誕日と称く出生と
初の名ハ元教後自ち蘭通と改む　字ハ無礙一蓮社向誉と号
し又別ふ雲介子と号す上人十三ち入て出家し明和七年

二月二日寿七十五才にして寂すその生涯自行の堅固化他の廣大なる凡を上人小酉にして日課念佛の行と丈六の十百万人小菴にして遂小浄土の正宗開通派と開肇し永く末世を化益し又教基の寺院とも創建せり碩徳の餘光枚挙に遑あり孫ばゝ上人の行業記小録にてくに略す

石田里 尾張の名所にて行基の石塔あり洋々たる武蔵郡又ハ新多郡ハ武州小高せ八神の宮石田村に地つゞきて一口ハ海の浜より富木へ通りまたハ海の方に流れ一方ハ山の麓にて里うるおい因もわんべ小高郡小高にてきにおりぬ

いまうやいと田の里れ秋風を教えを小夜ハ哀しけらん　民部公の家歌

小杜天神社 小茂井村小あり本國帳に從三位小杜天神同集説に富安庄小茂井村称天神社培栽せ小ふるが回振美莖小菊〳〵丈と双生せ〳〵ばゝ庶人ちまと神〳〵〳〵老夫がを考れ湯洋うれ

連理菊 田村の農家岩田氏の老夫菊とぬこて年久〳〵〳〵〳〵老夫ハ是ハ湯洋の中に林学士の詩〳〵〳〵武ハを志形と図して言る貴に郭〳〳又ハ是ハ湯洋の中に林を詩と図上小ゑ〳〳て〳〳〳〳古に博〳〳す又ひる湯元小も載せて昔　陽成院即位の元慶元年一丁酉二月尾張小連理生じ又　光孝天皇受禪の元慶八年甲辰四月尾張小連理生せ〳〳り世小三代受禪小孫小見えが又今為ゝ新帝受禪の年ゆえ連理生じけるのゝ〳〳〳〳

連理菊の真図

前園為菊託吟魂異種生々
雨露恩花制頽齡開壽域蓬
莱仙藥偶同根

林學士藤信篤

立田
荷沼の
夏景

信甫

ひきりわく
さけるや
いろこ
紅の
ちりすれ
花の
ほのに
かをりく

蓮根 土田輪中の名産 千代田新田 池庵大小てや 湖水ふひ 根既未形状 ともに絶弱 就中 戸倉村のと最上 一年に代村 一千慣ひ千両余 ちなみ由名 云服の繁茂花さきかゝ 海晨の風系 八四徳水の金蓮かゝやとあり 水中より出れば色焼の人は蓮根の價かて 花のきんうすと 越後志 又岡田廷之の秉穂録に尾州 水郷の村落と輪中と 広廣東新語 に番禺諸村皆在海島之中 大村曰大藷園 小村曰小藷園 言四環皆江水也と似るう

古川城址 上古川村 土人伝云 当年小野田彦七屋敷の址と

信長記と按ふ織田彦七は則信長公れ舎弟にして古木江の城ふ居しを元亀元年十一月長嶋の本願寺門徒兵と起して彦七れ居城を囲らは彦七土民のもに死うんを慙て同月廿一日櫓ふ登りて自殺ひ其後古木江は今大表村の支邑にして子消と書けり則古川村の隣村うりされば此古川の城は彦七が住ひし城にして土人の小野田彦七と云ひ伝へるは織田と小野田と誤まるうべし

子消里 大表村の字色うり 弘仁年中弘法大師當國巡錫の道筆ち

と用基ありしは此里とさゝある畝に帰らとてこゝ後嘉女懐妊しけるを家れわるじ孫僧密通の子ぞうと疑ひ捨ねてわるとうぎらとしは其うと若く子とんヒれば殺うさるいやもうぞ殺れめるるれうと且くひかくも彼がうぐひすや思ひもんもに拾る茶とロに含し彼児ふ吹ふけらとうば忽ちと子消うヒうぞ

さて村の名とうくゆびた

市脇嶋 若上 鄰浦西保 東保 西條 東條 本郡田 五ノ三 已上八村と市脇 紀ノ道記に慈法に市紙とふふとあり 今ハ市江と書けり 貢魚海 浪合記に一會とうとうう 今ハ市江と書けり 貢魚海 凡あくまい菅崎ちて山城の髪間に藤ち 繁ちの衣の浪ハ千光の火ちに ハ 嘆 鑑い孤松の義と砕ち 此ふとまて 孤のうち松ふうれてやや 松ふかくらんとき 見て市紙の名のきと知べ

赤星名神社 西保村ふあり星の宮と称して当所の本土神 例祭 八月大日陽之 氷糸うの 竹王山 松隣寺曹洞宗 本國帳に従二位赤星名神 祖門和尚

社僧

当社ハ市脇七郷のうちにして例年当所ふ伝へ車楽れ下調と当社

長野社内
たゝずに
月れいりをい
ひ見る
井の花びれ
ふき清の
も
此間鳥居迄
長三町程

赤星名神社

のねぶくゝるまゝに舊例とりてハ六月晦日市服橋中れ
うち松ちにおゝ者年始一回七日に人形を作り（故人形一ハ内外の二百余）
ゝ囲て是を作り車樂に乗る児笛太鼓及び囃子の聲古よりハ十
四日年拂市（市場）行事試ふゝ廿日児どもゝ柏の葉に青
と書て版とゝ古例ゝ市江登記小者車ハ天王ゝ
夢れの始ゝ天正元年織田信長之ゝ浅合戦の砌中
絶せしと服部氏宇佐美氏等の浪人ゝと再興せ
し服部氏の子孫市に者の内ゝ上村小居住に其家ハ天正年中小走一ゆ
うゝて今もゝの古典と存せられ故ある旧家ゝ毎年六月の条
津ゝゝ多けれ共にゝ由緒ある車樂ゝバ神君ゝ
時ゝ多けれ共にゝ由緒ある車樂ゝバ神君ゝ

金襴唐織の御小袖金襴の胴掛金襴大口等所ゝ
今も例年車小飾ゝ

又

大楠　鯰浦村小ゝ世ゝ縁ゝ大楠ゝて里民氏木のやゝ或ハ業と云きゝて毒ゝに
出宜ハ忽年急すれ寺持ゝゝゝ樹下に聖法ゝ子作の業ゝ出業の小
堂又社有の社もゝゝ
事に多活の人絶えず

筏川　依屋川の下流五町ゝて二流ゝる西と筏川ゝ東と筏川ゝ
山中ゝ伐ゝ材木ゝ筏ゝ流ゝ本ゝ川ゝ
ゝ流ゝ田ゝ田ゝ川ゝ
ゝて多くゝの松樹繁ゝ中ゝ
ゝに小武陵ゝ

龍華山弥勒寺　多ケ地彩田にあり曹洞宗桂村慶海寺末ゝ海ゝ筏川
村小ゝて開基ゝ年月詳ゝ天正十二年撰ゝ
破壊せしゝ元禄四年辛未春ゝ
ゝ和尚ゝ中興ゝ
高野山一心院實阿弥明應
九年八月廿九日ゝ

本尊　弥勒　木像背銘ゝ尾州海東郡芝山郷宗次領主

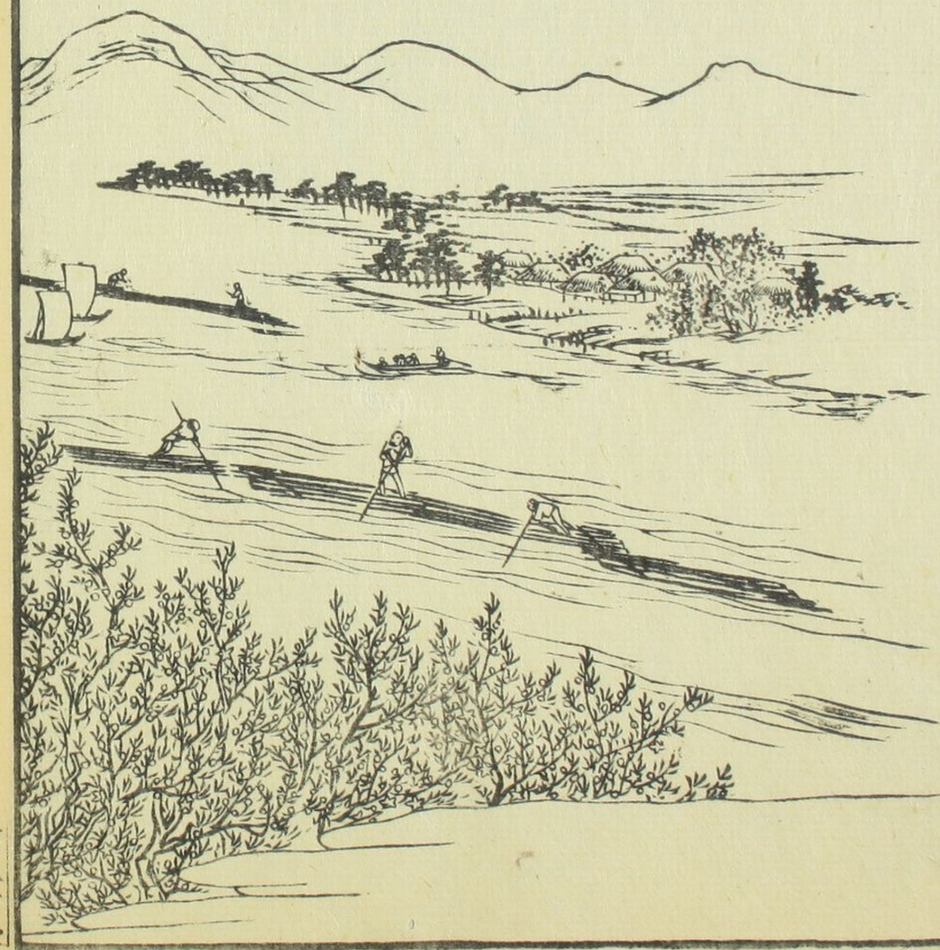
宮筠園　同村の産ふゝて父母ゝ
門人私謚ゝて行恭ゝ
準ゝ書及び墨竹小
ゝ一日慈母の警戒小感
の陰光ハ洛東禪林寺に建ゝ
生儒紳のゝ小冠過礼待ゝ
の拓ゝ先生の裏名普ゝ
叢話小の諸書にも載せれ
人に勝ゝ者邑弥勒寺に建ゝ

行恭宮先生碑銘

維安永三年甲午十二月十日筠園宮先生終焉越
五日葬于東山禪林寺先塋側既而其義子弭奉行
狀来請誌銘于其墓余曾有師資之親不レ忍固辭因

筏川の
南涯桃林
春興の図

春もや
日かす
ちられて
いさ川
さし棹の
ちとせ
色ふかき
了計
史雄



桃い桃の
ふさふさ
ちらち
日は
紅
梅居

弥勒寺

事主養親共
盡歡深林誰
種並頭蘭芳
芳應待多年
發莫作尋常
花卉看

松園

記其槩先生姓宮諱奇字子常称常進父曰舜彌母
長尾氏以享保二年丁酉八月廿一日生先生于尾
張國海西郡鳥地邑幼而聰慧強記超羣稍長好学
十歲善詩父謂之曰勉旃不継吾業則非我子也享
保十九年從父母遷于京師以其父嘗受学于東涯
元藏氏先生亦事之東涯没卒業于蘭嶋才藏氏元
文四年丁外艱思慕哀戚服喪三年某粥僅給而貧
窶亦甚母戒之曰窮當益堅遺命莫忘焉先生奉其
誨夙夜不懈焦心覃思逐究古学之奥也明和紀元
買宅於近衛巷將入居俄遭内艱居喪盡禮服闋而
徙方此時也先生声誉藉甚徳望隆重四方来学者
晨昏盈門其誘人恭謹退讓而務本實去浮華各因
其為人恭謹退讓而志純守固威武富貴亦不能
之其為人恭謹退讓而志純守固威武富貴亦不能
奪之事雖至小非義不為焉偶聞一善言見一善行
必録藏之其接人也無少長賢愚皆禮之天性至孝
傷蚕喪父每展祭如事生先生作文温雅詩亦真率
不敢逐時好書学趙文敏深得規範人得隻字半行
以為至寶兼善墨竹請者尋踵毋日恐人以汝為畫
工先生感之誓不復作矣園有竹因號筠園扁堂曰
尚友所著詩文集若干卷又有備考録經說皆未脫
稿而易簀門人親友私謚曰行恭初娶入谷氏举一
男不育継室飛森氏産一女而無嗣子親眷從治命
養門人名弼者奉祀継業先生享年五十有八仁而
無壽孝而無嗣嗚呼天哉嗚呼命哉銘曰
儀表儒門好善如饑嗜学如飡克光先徽
言居仁之宅爵天之尊田耶牛耶倏忽歸根德音不

そよ女
孝養の図

孝女そよの傳

正二位權大納言源朝臣信通撰并書
有榮篆題
男彌建

安永四年乙未孟冬
勝谷名永存

田村孫勝寺の門前に碑あり百姓長六なるもの墓なり
乙ら拾てる田地なれば一畝もなく耕作の業もなく終に貧困
業にして世を渡るに妻は姑の心に叶はず若六が三十二才の時なりしに二子あれ
姑と共に絶て去りけるなり浪の妻も求ずして母と娘と三人のみ暮しなれども日と
送るに毎に長六が五十三才の時なりし娘ふさよは成長ひ孝心深く身は
きこのみして髪ゆい結ふ男もなければ終に妻なるとのみ
楽しみなく終るなり裁れ文るまで草とるを樵と織るとして公の貢とすれば衣
食乏の云ふも皆女の業なり然るに二人とも折ふし病気に成身
若むすめなれど独ふ夫もなきに世に又或時は若六がうるさきなりとて
がくばたに長六がきげんのうるさを我ふ酒を好みけるが
日ざしに年の到るなりふ酒十文の酒と給ふ又申の刻ふ十文の酒と給ふ是を
旨とよろこび業なりはどなおとる代りして一日も缺るなりはうりうり
して例のごとく十銭と長六ふ与へ給ふ娘ふさよは
中一文ふ十銭の酒給ふ悪うるうんと思ひて十銭と給ふ
百かこ是ひとへさあれば海の十銭もあれ
若をいかりきぬ給ふ十銭の酒を傾け又海の十銭と給ふ
さしるめもきるえきればそれ素りわびて給ふるもたくんして種の蓋とうて
で内に十銭とさくしひくしうるもの臭ありるなりて
しそ為ふ長六も性質まるうて母を怨る者なれば折ふ
ふ長作辞例しるもきあるとば若ふ思ひ為の後ふ義を捨
てさりしき武ハ奴隷と為りきて作ふ今地又ハ衣類を負ひ
ひて時あ星きふ時ひしまめやふ立入り結を

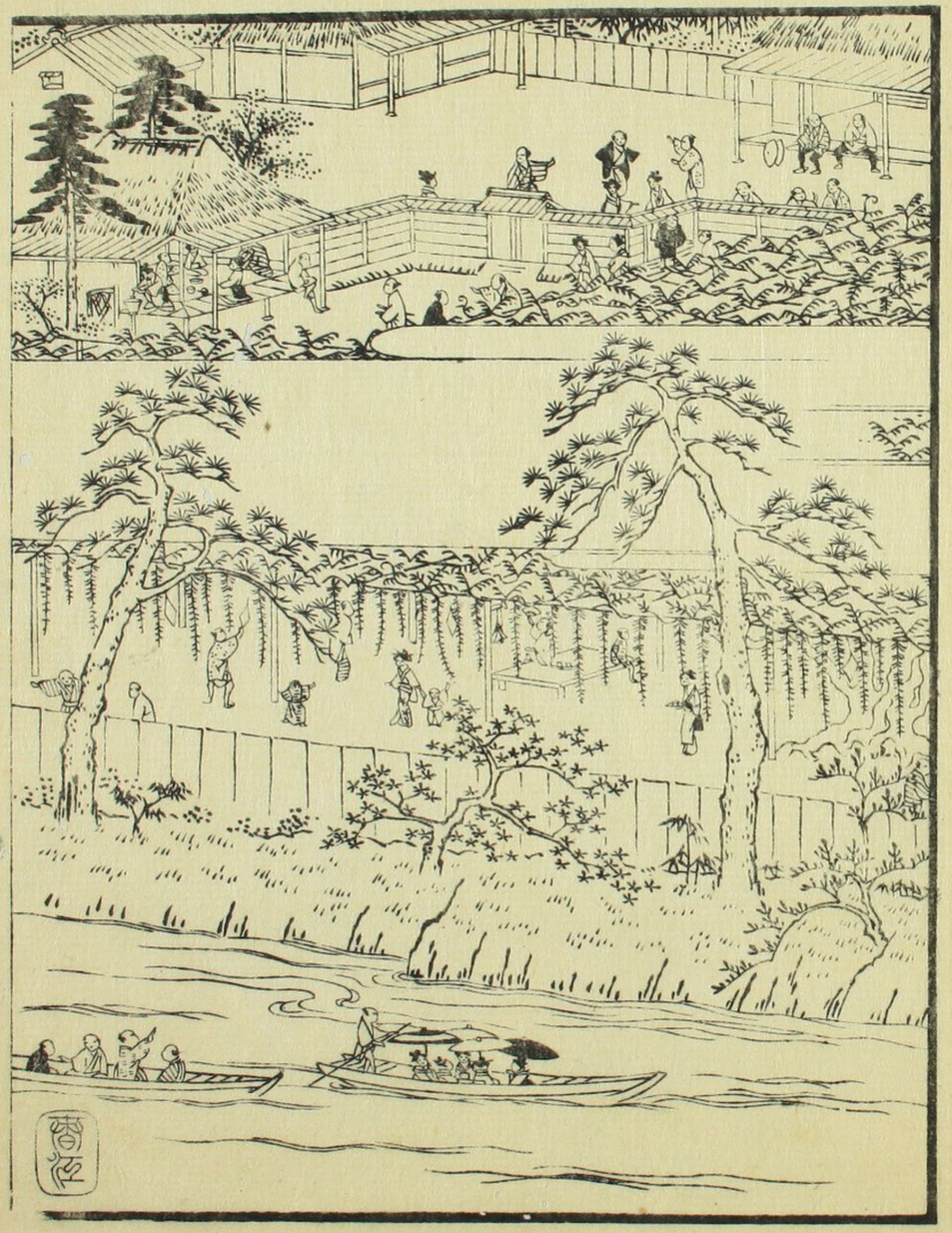
望国ふ立ばう若六ふ嘆る恵も時ふ妻ふ
きるく祝の祭びをめくおのたのしくさめく勧く孝吉とうすも思ひ後年月
令ふ給ふ人けるとば長六もそうく孝ふ感ひ老ふ恵ふ給て人ふ語るるび
けるひしるるる地阪志水東ゆ人れば安永之年のそう張ふれ年貢と
教られ又　國君もゆしられて多くれ令ふ給ふ此時長六ハ七十五才なるハ
四十五才なるる妻しきるるハ西河勇蔵ひ著ひ刻ふれ孝女そよ傳にあるく
省きぬ

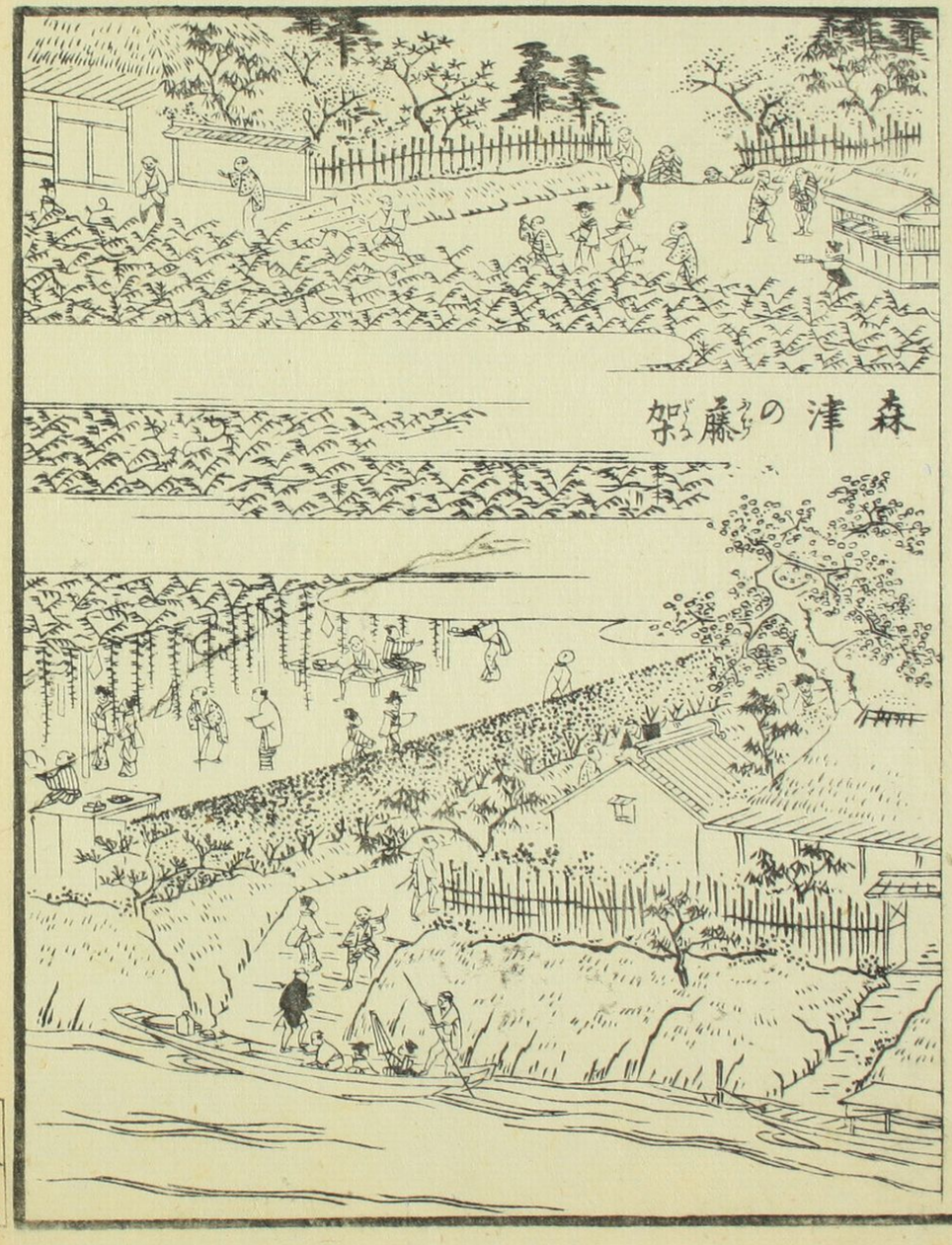
忠女ちるの傳

田村の孝女そよの碑と共ふ長ひく泳勝寺の門前ふ碑あり田邨新
て乳母ちるは性淳朴忠貞ゆして浦村農家の産し年廿六の時日給ふ西河基助が家ふ入
有志の人称ふ褒詞と授ひてこれと黄金ゆ教十年の後と之を忠義一のわし
ふ来一編ふ暦殘五貫文とふを天保二年　正月十六日年八十四ゆて西河が家に病死
ゆ田年の変石に勤して以て美と不朽ふ称ふ為ゆ長く碑文ふ為ゆてこに累す
田村の長武田
沢義が表れ為国ふ立

紫藤架

悟れふ力を為しく架棚の廣さ縦横廿五尺四面ゆその蕃延の
余蔓別ふ六百條の痛架あり元そ棚のうさ弱ゆ年ゆて花
の長さ四五尺ゆ寸ゆ程ふも及べり暮春の比宴を架よりる
時ハ白日ふも寸天ゆ紫雲を作ばさるべ紫雲の蔽るが
如く又織女の天機ふ織ハ及ばと思ひる亦に広大ゆる




森津の架藤

菱架い　皇國い素ろり海外ゆ。又古今ゆと絶ろ守ゞ伝ゆ壮観
ろり所ゆ素とろり日だゆ来賞ろる人幾百千ろゆる事と
知ゞ伝ろゆ家ゆ水ゆ多く泛ゆ水ゆ俊りたゞ暫ゆ遊ゆ紀を
来拝ろる人ゆ多く粧図ゆ就ろ万分の一を表象ゆ

精一

紐紫蔓藤鬚日架　縦横百歩一振ノ花有ニ此奇観ニ春夏
際無ニ人不ニ訪ニ武田家ニ　服部赤城
藤架萬條垂春風　緑ニ紫絲ニ此是天機錦應ニ従ニ銀漢ニ移ニ

堀川や日盛ろ涼ゆ　藤架の里ゆ菱の花ゆ　昭豊

年ゆろ〜菱の下陰色深く苔ゆ清を立けゆ　道直

見ほゆ〜せぬうちに夕日や菱の花　梅間

菱ろ〜やもゆろ〜ろ人一景ろ　沙路

孝女和喜の傳

大室村の農民甚三ゆ娘ろり〜と人ゆ伝へ〜精忠父母と申ろる
孝ろれば甚芳名四方にきゆえ主をゆ藉き〜伝に　公聴に
達ー多くれ美金と　賜ひ褒賞しゆひろ世のろ〜ろろ〜ろ人見幾邑
先生内務東甫翁ろ〜て伝ろ〜ゆ自ら其讃詞と送りて夏月重元に命じ

主図上に筆ゆ多く人ゆ称ろ〜ゆ其実名と主境に知ろ
ゆんゆろ〜ゆ〜ゆ多ゆれば〜ゆ貴詞ゆろ〜ゆ　むろ〜　天長六年六月
尾張國の孝女吉弥侯部長子に位階を進ゆ〜ゆ類聚國史に
のゆろ〜ゆ〜ゆ近世海東郡八ッ屋村苗穂村鵜浦村の忠女
孝女及び光智郡美野村の孝婦ろ知多郡古見村の忠女ゆ
ゆ知ろゆ忠孝ゆ〜て称ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ苗字の人
婦人に忠孝多く男子に勇義を備へるゆゆ　素盞烏尊
日本武尊の二ゆる武勇の魁首其妃稲田姫宮酢姫の女姫貞操の
本源にゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ苗字津治奥田にゆづゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
ゆれる婦人ゆものゆる少く〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

尾張名所圖會巻之七　終

天保十二年辛丑十一月　脫稿
同　十五年甲辰二月　發兌

春江小田切忠近圖畫
文園岡田啓
梅居野口道直　仝撰
瑞齋加藤昭豐傭書

尾張書肆　名古屋本町九丁目　菱屋久兵衛
仝　傳馬町五丁目　菱屋久八郎　合梓

明治十三年四月二十四日求版
愛知縣下名古屋區玉屋町
片野東四郎

發行書肆

東京　北畠茂兵衛
同　稻田佐兵衛
京都　藤井孫兵衛
同　大谷仁兵衛
大阪　前川源七郎
同　森本太助
同　吉岡平助
同　山岸彌平